



群馬大学 キャンパスマスタープラン 2023

Gunma University Campus Master Plan 2023



目次

1	キャンパスマスタープランの基本事項	
	(1) キャンパスマスタープランの目的・位置づけ	2
	(2) キャンパスマスタープランの構成	3
	(3) キャンパスマスタープラン2023の役割	4
	(4) 大学ビジョン	5
	(5) キャンパスマスタープラン策定にあたり考慮すべき事項	6
	(6) キャンパスマスタープラン2017の検証	7
2	キャンパスマスタープランの方針	
	(1) キャンパスマスタープランの基本方針	10
	(2) キャンパスマスタープランの整備・活用方針	11
3	キャンパスの現状・課題	
	(1) キャンパス概要	12
	(2) キャンパス変遷図	14
	(3) 主要キャンパスの現状・課題	17

4	フレームワークプラン	
	(1) フレームワークプランの目的・位置づけ	51
	(2) フレームワークプランの共通方針	52
	(3) イノベーション・コモンズに向けた全学の方向性について	56
	(4) 荒牧キャンパスのフレームワークプラン	59
	(5) 昭和キャンパスのフレームワークプラン	62
	(6) 桐生キャンパスのフレームワークプラン	65
	(7) その他キャンパスのフレームワークプラン	68
5	アクションプラン	
	(1) アクションプランの基本的な考え方	69
	(2) 施設整備計画	70
6	施設マネジメント	
	(1) 施設マネジメントの基本的な考え方	74
	(2) スペースマネジメントに関する取組	76
	(3) サステナブルキャンパスに向けた取組	77
7	参考資料	
	・キャンパスマスタープラン2023策定プロセス	79
	・キャンパスマスタープラン策定に関する委員会	79

1. キャンパスマスタープランの基本事項

(1) キャンパスマスタープランの目的・位置づけ

キャンパスマスタープランは、アカデミックプランや経営戦略を踏まえた、教育研究活動の基盤となるキャンパス環境の基本的な計画であり、施設整備の指針となるものである。

大学の将来ビジョンをもとに、本学が目指すキャンパス像を中長期的な視点で考え、キャンパス全体の質の向上を図るとともに、優先的課題を明確化し段階的な整備を進めるために策定してきた。

キャンパスマスタープラン2023では、本学の基本理念・目標に基づき、キャンパスマスタープラン2017の基本的な考えを継承しつつ、長期的な視野の整理を行うとともに、第4期中期目標・中期計画期間（2022年～2027年度）における中期的な目標達成のための計画を策定し、大学を取り巻く環境の変化に対応することとする。

なお、原則6年毎に策定・見直しを行うが、各計画期間においても必要に応じて随時見直すものとする。

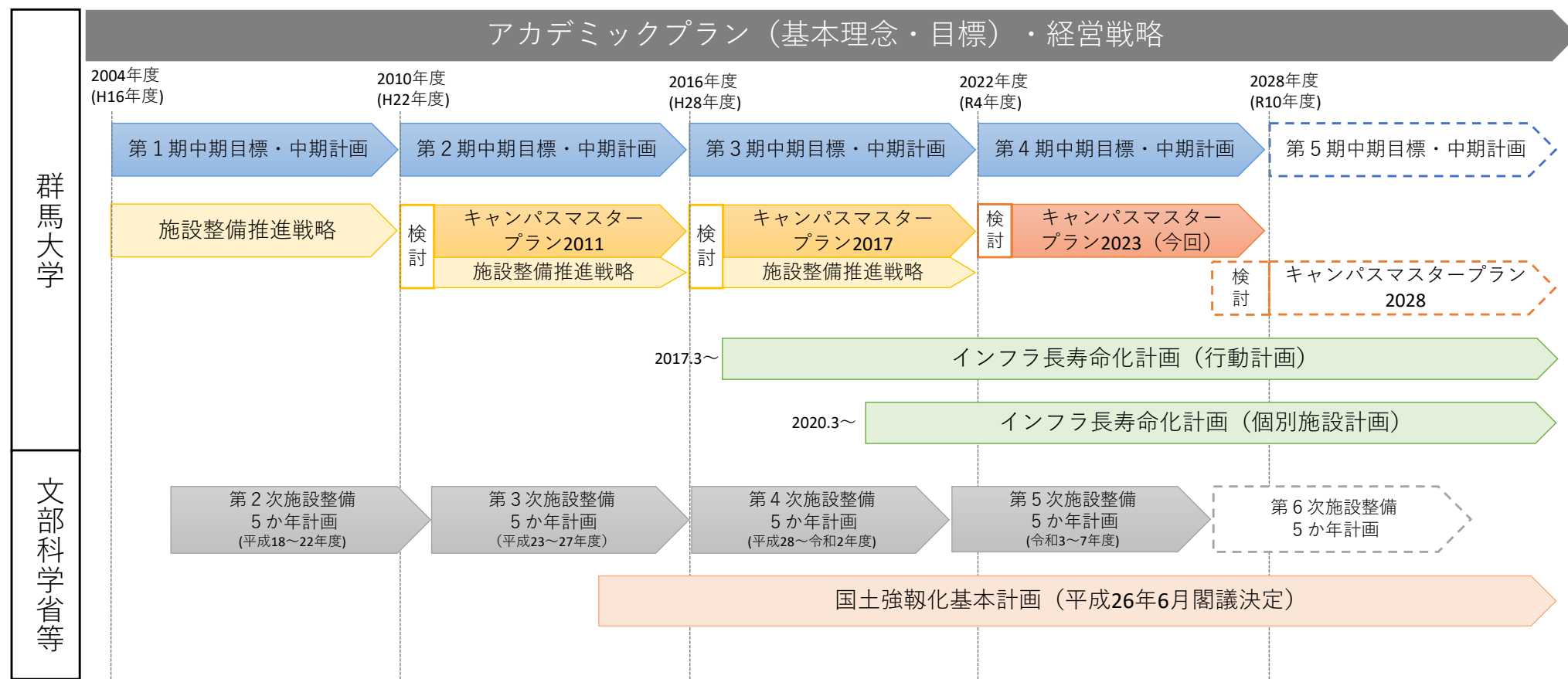


図1-1 キャンパスマスタープランの位置づけ

(2) キャンパスマスタープランの構成

アカデミックプランや経営戦略の下に位置づけられるキャンパスマスタープランは、「基本方針」「整備・活用方針」「フレームワークプラン」「アクションプラン」「施設マネジメント」から構成される。

キャンパス空間は、キャンパスが計画されたときには予想できなかった環境や状況の変化が生じており、不確定な要素に対しても柔軟な対応が求められている。しかし、様々な変化に応じるため無計画にキャンパス空間を変えると、空間的な無理が生じたり、大学のイメージやキャンパスの調和を失い、長期にわたる計画的な整備が不可能となる。また、規模や量の多さから一度に全体的な整備ができるのではなく、段階的な整備を実施していくためには、キャンパス空間にかかる長期的な戦略が必要不可欠である。

これらのことから、30年程度の将来像を見据えた、教育・研究・医療状況の部分的変化にも対応可能なキャンパスの骨格となるフレームワークプランを定め、計画の柔軟性と段階的な整備を反映させた中期的なアクションプランを策定し、施設の戦略的な運用を行うことが必要であり、施設整備、維持管理、施設マネジメントが一体となり、推進していくことが求められる。

そのためにも、キャンパスの課題や問題点を洗い出し、現状を正確に把握することによって、その場限りの解決策ではなく、抜本的な解決策を構成員らの十分な議論と合意のもと、大学全体の将来戦略に合った骨格を示す計画案としてまとめ、実現に向けた取組を全学的に推進していくことが重要である。

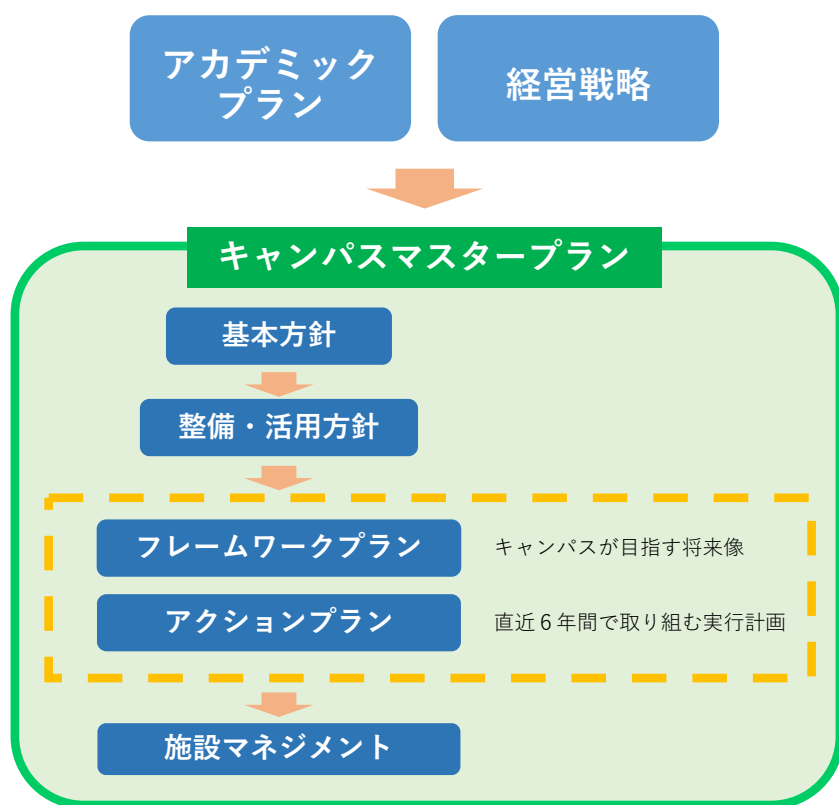


図1-2 キャンパスマスタープランの構成

基本方針

- 群馬大学のアカデミックプランや経営戦略を踏まえ、その実現に向けた現状把握を基に、キャンパスの整備・活用に関する戦略として目標とすべき指針

整備・活用方針

- 基本方針を実現させるための具体的な方針

フレームワークプラン

- キャンパスマスタープランを実現させるため、基本方針や整備・活用方針に基づいた約30年後の各キャンパスが目指す将来像を示した計画案

アクションプラン

- 基本方針や整備・活用方針、フレームワークプランに基づき、直近6年間で実現させるための実行計画案

施設マネジメント

- 「施設の戦略的な運営」のため、キャンパス全体について総合的かつ長期的視点から教育研究活動に対応した適切な施設を確保・活用することを目的として実施する内容

(3) キャンパスマスタープラン2023の役割

魅力あるキャンパスの実現に向けた取組を進めるため、キャンパスマスタープラン2023においては、大学の目指す方向性を明らかにし、大学の約30年後の姿についてステークホルダーと共有するとともに、次期キャンパスマスタープラン2028に向けた、より具体的な検討を進めるための計画とする。

なお、教職員や地域住民等様々なステークホルダーに対し、キャンパスの将来像についての共有を深めるとともに、より良いキャンパスにしていくための意見交換やアンケート等の実施を進めることで、大学一丸となったキャンパスの在り方について考える体制整備をつくり、キャンパスマスタープランを発展的に成長させていく。

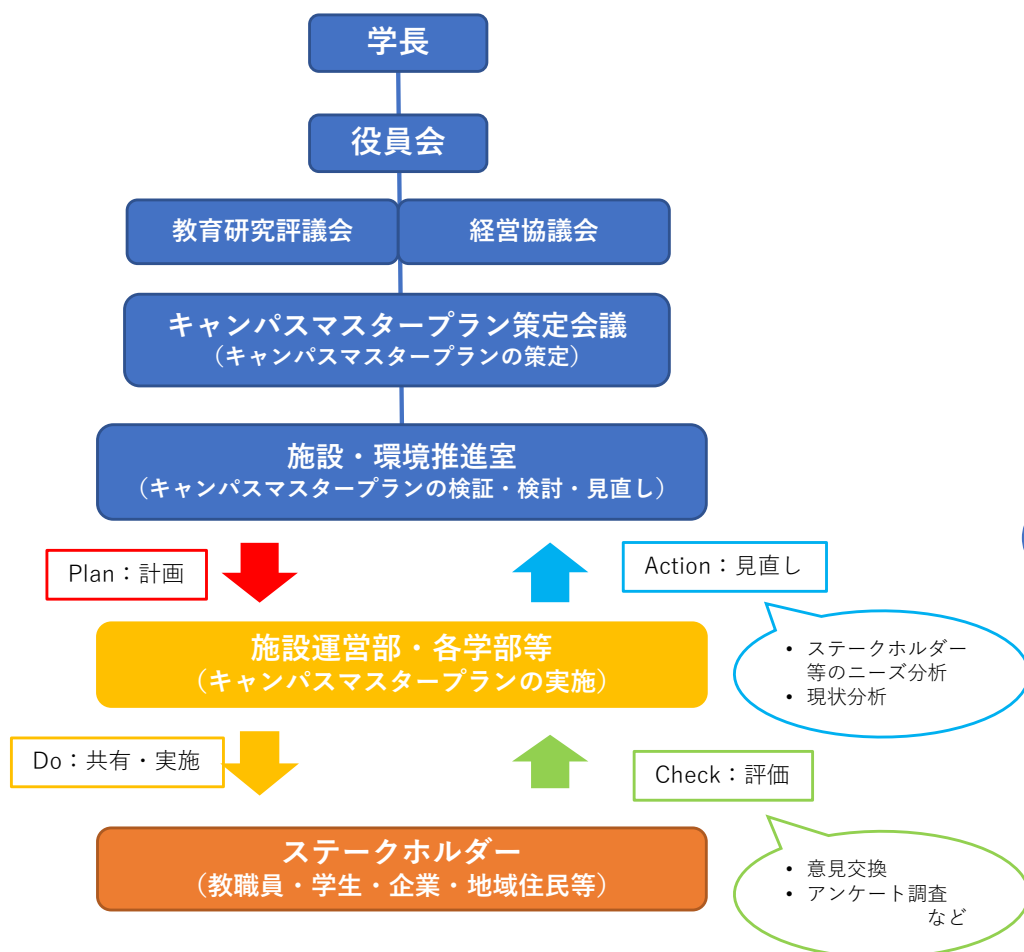


図1-3 キャンパスマスタープランの体系図

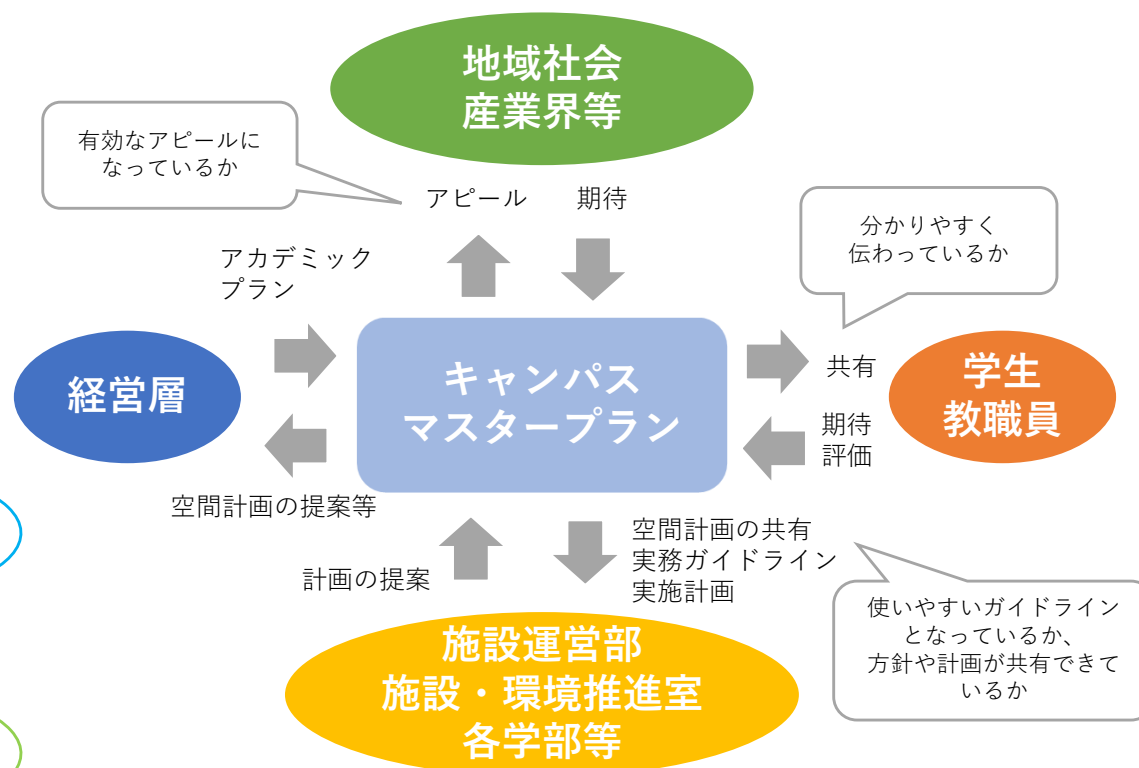


図1-4 キャンパスマスタープランが想定するそれぞれへの効果のイメージ

(4) 大学ビジョン～アカデミック・プラン～

群馬大学は、理念、目標等の設定において「教育」「研究」「社会貢献」「大学運営」の4項目を軸に展開し、群馬大学のビジョンである「地域に根ざし、知的な創造を通じて、世界の最先端へとチャレンジし、21世紀を切り拓く大学へ」の実現に向け、地方創生に貢献すると共に「知と人材」のグローバルな集積拠点としての大学を目指している。

－ 基本理念 －

1. 新しい困難な諸問題に意欲的、創造的に取り組むことができ、幅広い国際的視野を備え、かつ人間の尊厳の理念に立脚して社会で活躍できる人材を育成する。
2. 教育及び研究活動を世界的標準に高めるため、国内外の教育研究活動機関と連携し、世界の英知と科学・技術の粋を集め、常に切磋琢磨し、最先端の創造的な学術研究を推進する。
3. 教育及び研究の一層の活性化と個別化を実現するため、大学構成員の自主性、自律性を尊重し、学問の自由とその制度的保障である大学の自治を確立するとともに、それに対する大学としての厳しい自己責任を認識し、開かれた大学として不断の意識改革に務める。

－ 基本目標 －

教 育

1. 学生の自主的で創造的な勉学を促進する学修環境を整えるとともに、学生が本来持っている潜在的能力とエネルギーを引き出すため最大限の支援を行う。
2. 教養教育においては、その重要性を認識し、全学的な協力体制の下、専門教育との連携を図りながら、幅広く深い教養、総合的な判断力、そして自然との共生を基盤とした豊かな人間性を涵養する。
3. 学部専門課程においては、教養教育との融合を図りつつ、各専門分野の最新の知見及び技術を修得しうる基礎的能力を育成し、豊かな知性と感性及び広い視野を持ち、学士力に裏打ちされた、社会から信頼される人材を養成する。

4. 大学院教育においては、高い倫理観と豊かな学識に立脚し、学部専門教育との関連を視野において、実践力を有する高度専門職業人及び創造的能力を備えた研究者を養成する。

研 究

1. 専門分野において独創的な研究を展開するとともに、特に重点研究領域において国内外の大学・研究機関と連携して先端的研究を推進し、国際的な研究・人材育成の拠点を形成する。
2. 基礎的研究と応用的、実践的研究との融合を図り産業界や自治体等との共同研究・共同事業を推進し、その成果を広く社会に還元する。

社会貢献等

1. 地域の知の拠点として学内外の関係機関との連携した活動を通じて、地域の文化及び伝統を育み、豊かな地域社会を創造する活動を行うとともに、知の地域社会への還元を推進し、産業の発展に貢献する。
2. 地域医療を担う中核として医療福祉の向上にあたりとともに、地域住民の多様な学習意欲や技術開発ニーズに応え、地域社会の活性化に貢献する。
3. 国際的視野の下で教育研究を充実する観点から、留学生の受け入れ及び本学学生の海外派遣を推進するとともに、海外の大学等との学術交流や教職員の国際交流を進める。

大学運営

1. 学長のリーダーシップの下で経営戦略を明確にし、大学構成員の能力を引き出し、自主性、自律性を持って効率的な大学運営に当たる。
2. 大学内での情報共有化と社会に対する大学情報の積極的な発信に努め、学内外への説明責任を果たす。
3. 不断の点検・評価と改革を推進し、大学の活力を維持発展させるとともに、大学の諸活動の質的向上を図る。

(5) キャンパスマスタープラン策定にあたり考慮すべき事項

～キャンパスマスターを策定する上で根幹となる国の施策や政府方針～

・国立大学法人等施設整備5か年計画

文部科学省では国の科学技術基本計画を受けて平成13年度から4次にわたり、「国立大学法人等施設整備5か年計画」を策定し、各国立大学法人では本計画に基づき施設整備充実が図られてきた。第5次国立大学法人等施設整備5か年計画（令和3年度から令和7年度）においては、各国立大学法人がキャンパス全体を「イノベーション・commons（共創拠点）」へと転換していくことの必要性が明記されており、その実現に向けて以下①～⑤の取組を優先的に進め、かつ(1)～(4)の施設整備を行うことを求めている。

- ① 大学施設の最大限の活用・社会情勢の変化に速やかに対応できる整備の実施
- ② 効率的な施設整備による老朽化整備の加速化・教育研究ニーズに対応した機能強化
- ③ 多様な人材のニーズに対応したICT環境やネットワーク基盤の整備
- ④ **カーボンニュートラル※1**に向けた取組・**ダイバーシティに配慮した施設整備※2**
- ⑤ 効果的で効率的な施設マネジメントの取組・多様な財源の活用

- (1) 安全・安心の確保と機能向上(老朽改善整備、戦略的リノベーション、施設のトリアージ)
- (2) キャンパス全体の強靱化(ライフライン更新)
- (3) 新たな教育研究ニーズに対応するためのスペース確保(新增築整備)
- (4) 先端医療・地域医療を支える病院の機能強化(大学附属病院整備)

・国土強靱化基本計画

強くしなやかな国民生活の実現を図るための防災・減災等に資する国土強靱化基本法（平成25年法律第95号）第10条に基づく計画で、国土強靱化に係る国の他の計画等の指針となるもの。国立大学法人等施設においては災害に対しても安全に教育研究活動を継続できるよう「キャンパス全体のレジリエンスの確保」を邁進する。



文部科学省「第5次国立大学法人等施設整備5か年計画」の公表について
https://www.mext.go.jp/a_menu/shisetu/kokuritu/1318409_00001.htm (令和3年3月31日)

図1-5 「イノベーション・commons」のイメージ

※1カーボンニュートラル

温室効果ガスの排出量と吸収量を均衡させること、すなわち二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの「排出量」から、植林、森林管理などによる「吸収量」を差し引いて、合計を実質的にゼロにすること。カーボンニュートラルの達成のためには、温室効果ガスの排出量の削減並びに吸収作用の保全及び強化を必要がある。

※2ダイバーシティに配慮した施設整備

多様な人材がキャンパス内で活動しやすいよう、バリアフリーやユニバーサルデザインなどを含めた施設整備。

(6) キャンパスマスタープラン2017の検証

第4次国立大学法人等施設整備5ヵ年計画においては、安全・安心な教育研究環境を確保するために建物の老朽改善を図るものとされており、本学の施設の老朽改善は喫緊の課題であったことから、目標として掲げることで計画的な整備を進めてきた。

また、サステイナブルキャンパスの形成や、機能強化等への対応として新たな教育ニーズに対応した教育研究環境の充実化についても目標に掲げ、全学の共通認識のもと各種施設整備に係るマネジメントを実施した。

ここでは、キャンパスマスタープラン2017について検証し、キャンパスマスタープラン2017策定後の施設マネジメントの成果等を客観的に見つめ直すことで、その結果を新たなキャンパスマスタープラン2023に反映していく。

◆ キャンパスマスタープラン2017で掲げた基本方針・整備方針等について

基本方針

1. 教育・研究機能の高度化など地域の知の拠点としての施設整備
2. 医療の高度化や地域医療の拠点にふさわしい施設整備
3. 産学連携など地域貢献の推進のための施設整備
4. 世界に卓越する先端的・独創的な研究拠点としての施設整備
5. 地球環境に配慮したサステイナブルな施設整備
6. 個性豊かで魅力あふれたキャンパス環境を実現する施設整備
7. 安全・安心な教育研究環境を確保する施設整備
8. 国際的な教育研究・交流拠点の施設整備

整備・活用方針

教育研究社会貢献活動の高度化・多様化への対応

- ・教育研究活動の活性化支援として、多様なニーズに対応できるようフレキシビリティの高い学修空間の確保
- ・知識創造空間の創出
- ・極めて高い水準で特色ある研究拠点の形成として、協働作業、実験研究の場の確保
- ・産学官連携の強化のため、弾力的・流動的スペースの確保
- ・学生のための学修支援施設の形成として、自習的環境の整備
- ・生涯学習機能の充実
- ・医療の高度化や地域医療の拠点

安全安心な教育環境の確保

- ・老朽建物・基幹整備などのインフラ長寿命化計画による予防保全の実施
- ・屋外の危険箇所の改善や歩車道の分離などのハザード改善
- ・ユニバーサル化の推進

国際化への対応

- ・グローバル人材育成のためのラーニングコモンズの整備などキャンパスの国際化の推進
- ・留学生、外国人研究者等の研究・生活環境の向上への対応

地球環境に配慮した教育研究環境の実現

- ・施設整備時における省エネ機器の導入・断熱性能の向上の推進
- ・地下熱や雨水・井水の利用、緑地化などの検討
- ・平成28～令和2年度（5年間）で、エネルギー消費量原単位を5%以上削減

個性豊かなキャンパス環境の充実

- ・歴史と伝統の継承
- ・学生支援施設等の整備の充実に努める

ライフサイクルコストを考慮したコスト縮減等

- ・施設整備計画における、総合的なコスト縮減を目指した計画の立案
- ・多様な財源による整備の検討

施設・土地の有効活用

- ・スペースの再配分などを含めた施設の有効活用
- ・土地の有効活用を図るとともに屋外パブリックスペースの利用の検討
- ・駐車場の整備の推進

(6) キャンパスマスタープラン2017の検証

◆ 成果

■ 教育研究環境の整備

荒牧キャンパスに「次世代モビリティ社会実装研究センター」を設け、社会・産業界との連携拠点を整備。

桐生キャンパスでは、歴史的建造物を継承するため、有形文化財である「工学部同窓記念会館」の耐震改修を行った。

また、令和2年度に実施した附属小学校のトイレ改修では、サインや内装について、男女色分けをせず統一した色・デザインへ見直しするなどユニバーサルデザインを意識した整備を進めている。

■ インフラ長寿命化計画に基づく施設整備

予防保全型のライフサイクルへの転換を目指し、平成29年3月にインフラ長寿命化計画（行動計画）を、令和2年3月にインフラ長寿命化計画（個別施設計画）を策定し、実施計画に沿った長寿命化対策事業の実施を開始した。

■ 施設整備推進戦略の実施状況

項目	実施計画数	実施数
建物整備計画(予防保全などの部分改修含)	26	11
基幹整備計画	4	3



次世代モビリティ
社会実装研究センター新営 (H29)



工学部同窓記念会館改修 (H28~29)



附属小学校トイレ改修 (R2)



アトリウムラウンジ整備 (H30)



附属幼稚園舎改築 (H29~30)

■ スペースチャージ制度の導入による多様な財源の確保と施設の有効活用の促進

施設の有効活用の促進を図るため、令和2年度に全学スペースチャージ制度を導入し、施設の予防保全に係る予算の確保に努めた。

また、既存のスペースの再配分を行い、留学生等との国際交流のイベントなどの共創の場となる「アトリウムラウンジ」を新たに整備した。

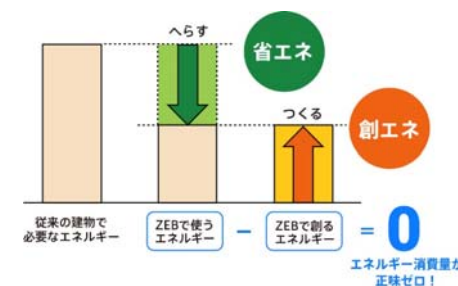
■ サステナブルキャンパスの形成に向けた取組

高効率機器や断熱機能の向上など積極的に導入し、改築をした附属幼稚園舎では『ZEB』※を達成。

令和2年度より昭和キャンパスでESCO事業を開始し、大学全体の光熱水費の約1割を削減。大学全体ではエネルギー消費量原単位を5年間（平成28年～令和2年度）で▲17.9%削減するなど、整備を中心とした省エネへの取組を進めている。

※『ZEB』とは、**net Zero Energy Building**（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）の略で、省エネや再生可能エネルギーを利用し、一次エネルギー消費量を限りなくゼロにするという考え方

環境省「ZEB PORTAL」
<https://www.env.go.jp/earth/zeb/about/index.html>



(6) キャンパスマスタープラン2017の検証

◆ 課題

■ 施設整備等

- 施設整備は進めているものの、福利厚生施設の老朽化が進んでおり、インフラ長寿命化計画に沿った整備が出来ていない。
- ライフラインの整備が全体的に遅れており、法定年数2倍以上の屋外給排水設備や電力・通信線が多く存在している。
- 各建物がそれぞれ独立して存在しており、有機的な繋がりが弱い。
- 土地の有効活用に関する検討や施設のトリアージに向けた具体的な検討が進んでいない。
- 緑地管理、駐車場整備、バリアフリーなどの外構整備にかかる具体的な整備方針や計画がなく、整備が遅れている。

■ キャンパスマスタープラン2017の構成等

- 各キャンパスの将来像が描けておらず、キャンパスマスタープランを意識した施設整備となっていない部分が生じるなど、関連性が薄い状況であったことから、各キャンパスが目指す方向性や将来像を明確化する必要がある。
- 基本方針や整備・活用方針を細分化していたため、内容の重複等が生じ、わかりにくい表現となっているため、要素を整理し分かりやすい方針へ見直しする必要がある。

■ 施設マネジメント

クオリティ

- 既存スペースの再配分を積極的に推進し、フレキシブルなスペースの確保に向けた理解を進め、多様な教育研究活動が可能な環境整備を進める必要がある。
- 継続した建物の省エネルギー改修やZEB化などを進めていき、脱炭素社会の実現に向けた取組を図る必要がある。

スペース

- 共同利用スペース等の一定量の確保・拡充に向けた施設マネジメントの強化が必要である。
- 土地の有効活用に関する検討や駐車場の適正化、施設総量の適正化に向けた具体的な検討を進める必要がある。

コスト

- インフラ長寿命化計画による改修費用の縮減・平準化やスペースチャージ制による新たな財源の獲得等に取り組んでいるが、予防保全のための予算不足により予定どおりの整備が進んでいない。更なる財源の確保が必要である。

2. キャンパスマスタープランの方針

(1) キャンパスマスタープランの基本方針

大学を取り巻く状況の変化や本学のキャンパス整備の進展や課題を踏まえ、アカデミックプランのもとキャンパスの目指すべき指針として、「施設の機能強化（イノベーション・コモンス化）」、「安全・安心の確保」、「交流拠点」の3つの視点を主軸とした基本方針を示す。

～ 施設の機能強化（イノベーション・コモンス化）～

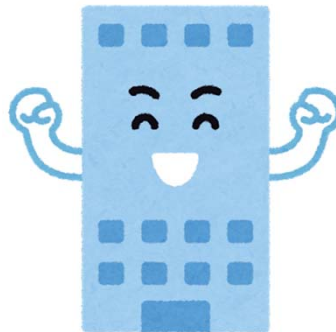
1. 教育・研究・医療の高度化、多様化、グローバル化などに対応し、イノベーションを生み出す共創の場となるキャンパス

～ 安全・安心の確保～

2. 災害に強く、安全・安心で持続可能なサステナブルキャンパス

～ 交流拠点～

3. ダイバーシティに対応した、自然豊かな環境で新たな交流が生まれるキャンパス



(2) キャンパスマスタープランの整備・活用方針

基本方針に基づき、重点的に取組むキャンパス整備の方向性（整備方針）、経営的な観点からの施設・土地の有効活用の方向性（活用方針）を示す。

1 教育・研究・医療の高度化、多様化、グローバル化などに対応し、イノベーションを生み出す共創の場となるキャンパス

- ・教育・研究・医療の高度化・多様化・グローバル化を推進し、キャンパス全体の「イノベーション・コモンズ化」により、イノベーションを継続的に生み出す環境づくりを行う。
- ・時間や場所に制約されることなく教育・研究を実施することができるよう、DX・ICT環境、学習環境の整備を進める。
- ・様々な用途に対応できるようフレキシブルな教育環境の整備を進め、教育・研究・医療の高度化・多様化に対応した施設整備を行う。
- ・施設・土地等の研究資源のあり方を見直し、学際的・横断的な領域、産学官連携にも対応できる環境を整備する。
- ・先端医療を推進する役割を果たすとともに、地域医療拠点としての機能を担う場として、附属病院を計画的に整備する。

2 災害に強く、安全・安心で持続可能なサステナブルキャンパス

- ・敷地を有効に活用するとともに施設の総量最適化を図り、「戦略的リノベーション」を中心とした老朽化改善整備により既存施設の長寿命化を図る。
- ・施設整備を行うにあたり、予防保全などの性能維持改修をはじめとする老朽改善整備、多様な財源の活用を積極的に検討する。
- ・良好な教育研究環境を維持・確保するため、施設マネジメント推進のための仕組みの構築、スペースの適切な配分による施設等の有効活用、および適切な維持管理、の3つの観点による戦略的な施設マネジメントの取組を推進する。
- ・キャンパス全体の環境負荷の低減を図るため、積極的な省エネ機器等の導入、キャンパスにおける消費エネルギーの抑制などエネルギーマネジメントを行うとともに、脱炭素社会実現に向けた取組を進めていく。
- ・学生や教職員の安全・安心な教育研究環境を確保するため、防災・減災を考慮した施設やライフライン等の強靱化を推進する。

3 ダイバーシティに対応した、自然豊かな環境で新たな交流が生まれるキャンパス

- ・教育・研究・医療活動や地域・社会との共創において、多様な人材の能力を最大限発揮できるよう、ユニバーサルデザインに配慮した施設整備を行う。
- ・地域に開かれた魅力的なキャンパスとなるような、全体などの景観に配慮し、地域との交流を促進するパブリックスペースの整備を推進する。
- ・学生や教職員のみならず地域や産業界など様々な人々と、屋内・屋外を問わず、キャンパス全体で交流が生まれるような施設整備、空間の整備を行う。

3. 施設の現状・課題

(1) キャンパス概要

◆ 群馬大学のキャンパス・団地について

本学の主要団地は群馬県の前橋市内及び桐生市内にあり、本部のある荒牧団地（キャンパス）は前橋市街地から直線距離で約5.8kmの距離に位置し、面積は約25.6万㎡である。

昭和団地（キャンパス）は本部から距離約3.0kmで面積は約16.2万㎡、桐生団地（キャンパス）は本部から距離約27.0kmで面積は約7.8万㎡、若宮団地は本部から距離約4.2kmで面積は約3.5万㎡、上沖団地は本部から距離約4.5kmで面積は約3.7万㎡となっている。

また、荒牧団地～桐生団地間は公共交通機関での移動が難しく、自動車で約60分を要する。



図3-1 主要団地の位置図

※円は本部のある荒牧団地からの距離を示す

2022年5月1日現在

団地名	学部名等	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延床面積 (㎡)
荒 牧	共同教育学部、情報学部 総合情報メディアセンター 大学教育・学生支援機構、 研究・産学連携戦略推進機構 国際センター 数理データ科学教育研究センター 食健康科学教育研究センター ダイバーシティ推進センター 事務局本部 等	255,763	21,571	51,059
昭 和	医学部（医学科・保健学科） 医学部附属病院 生体調節研究所 重粒子線医学推進機構 未来先端研究機構	161,631	49,326	178,844
桐 生	理工学部 研究・産学連携戦略推進機構、 未来先端研究機構	78,182	18,288	68,040
若宮 1	附属小学校、附属特別支援学校、附属幼稚園	34,903	7,005	13,281
上 沖	附属中学校	37,430	4,306	6,700
太 田	理工学部	8,696	2,737	4,561
桐生宮内	学生寄宿舍（啓真寮）、国際交流会館	9,549	1,785	4,282
日 吉	附属学校栽培植物園	3,087	0	0
伊香保	伊香保研修所	8,223	355	536
若宮 2	学生寄宿舍（養心寮）	4,852	989	2,603
国 領	国際交流会館	1,063	478	660
北 軽	北軽井沢研修所（課外活動施設）	2,507	230	285
下小出	研究者交流施設（非常勤講師宿泊施設）	279	121	233
菱	理工学部グラウンド	24,839	27	27
平 和	職員宿舎（向町住宅）	4,917	947	3,787
国領 2	職員宿舎（国領住宅）	1,241	275	1,099
南 町	職員宿舎（第2南町住宅）	3,568	701	2,801
合 計		640,730	109,141	338,798

※太田団地は建物の一部を太田市より借用している

(1) キャンパス概要

◆ 各キャンパスの特徴

【荒牧キャンパス】

昭和45年に前橋市日吉町（現県民会館付近）から教育学部、教養部（現情報学部）等が荒牧町に移転し、現在に至る。

以前は、松林等のあった丘陵地で「荒牧山」とも呼ばれた場所であり、現在もその樹木が残存している自然豊かなキャンパスである。メインキャンパスとして、共同教育学部、情報学部、教養教育で構成される教育・研究機能と、全学の事務局機能で構成されている。

【昭和キャンパス】

昭和18年に前橋医学専門学校として設立され、昭和23年に大学令により前橋医科大学となり、その翌年に諸学校と包括され、群馬大学医学部となった。

前橋医学専門学校当時、周囲は田園が広がる農地であったが、現在は、商業・住宅地となっている。医学部、附属病院で構成されている。

【桐生キャンパス】

大正4年に桐生高等染織学校として設立、後に桐生高等工業学校、桐生工業専門学校に改称され、昭和24年に諸学校と包括され、群馬大学工学部（現理工学部）となった。

桐生市は、県都前橋市から南東約25kmに位置し、市街地の中心を東西に流れる渡良瀬川の兩岸と、市の南東に流れ渡良瀬川に注ぎ込む桐生川と山田川の兩岸に広がる扇状地の平野にある。キャンパスはその北に位置する。

◆ 群馬県内における役割

① 「学都前橋」の中核を担う

前橋市内の5大学と2短大の学生数6,481人のうち、群馬大学の学生数は2,835人で全体の43.7%を占める。

（令和2年度版前橋市統計書 令和元年5月1日現在）

② 高度先進医療の実践

群馬大学医学部附属病院は、特定機能病院として高度で先進的な医療の研究開発及びその診療への応用実践を推進している。

③ 前橋市との包括連携協定

平成30年に前橋市との包括連携協定を締結し、「1.教育、研究及び文化」「2.地域産業の振興」「3.保健医療」「4.まちづくり」「5.人材育成」「6.その他両者が必要と認める事項」の6分野から地域の発展や人材の育成等に寄与することを目指している。

④ 主権者教育を推進する群馬県大学コンソーシアム

県内全ての大学、短期大学、高等専門学校及び群馬県選挙管理委員会と協定を締結し、大学等の高等教育機関で学ぶ学生の主権者意識の醸成、若年層の投票率の向上及び県内大学等間の交流の促進を図ることを目的に、主権者教育に係る取組について連携・協力している。

(2) キャンパス変遷図

【荒牧キャンパス】

昭和44年

教育学部が日吉地区から荒牧地区に移転した当時のキャンパス配置図
主に教育学部、教養部、図書館、学生食堂、体育館(課外活動施設)が整備された。

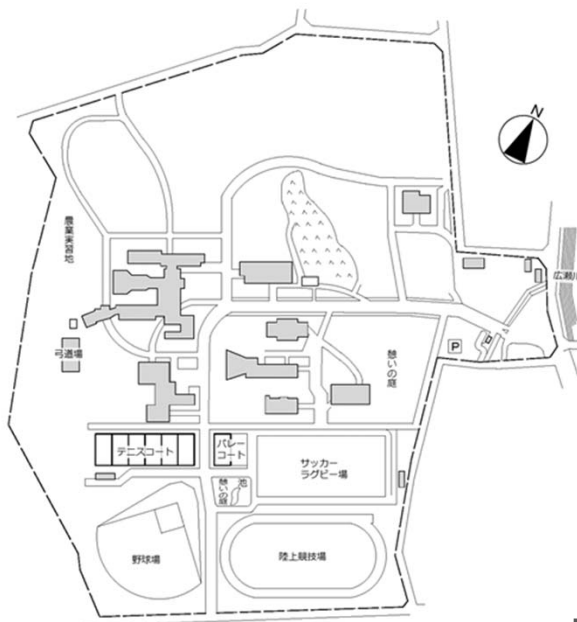
【主な沿革】

昭和24年

- 群馬師範学校、群馬青年師範学校、前橋医科大学、桐生工業専門学校の諸学校を包括し、学芸学部、医学部および工学部からなる群馬大学が開学。

昭和40年 教養部 設置

昭和41年 学芸学部から教育学部に改組



昭和60年

事務局・学生部・保健管理センターが昭和キャンパスから移転し、教育学部に教育実践研究指導センターを設置、公務員宿舎が整備された。

【主な沿革】

昭和53年

- 公務員宿舎(現職員宿舎)新築

昭和52年

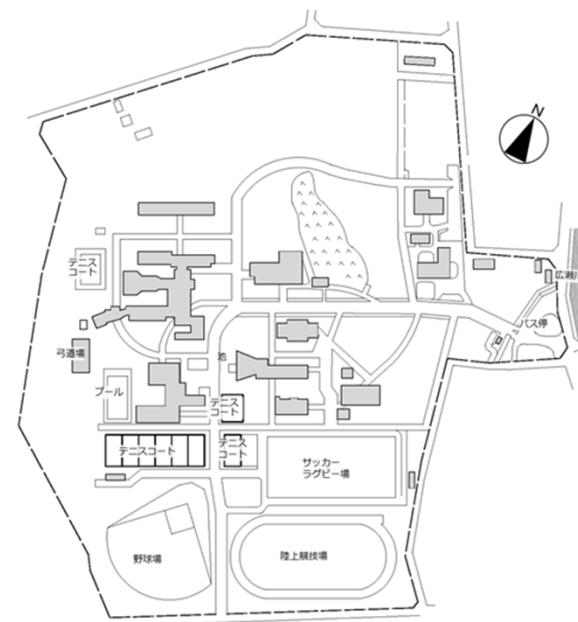
- 保健管理センター設置

昭和55年

- 事務局、学生部、保健管理センターが荒牧キャンパスに移転

昭和56年

- 教育学部に教育実践研究指導センター設置



平成10年

教養部の改組で社会情報学部が設置され、課外活動施設、教養教育棟の渡り廊下などが整備された。

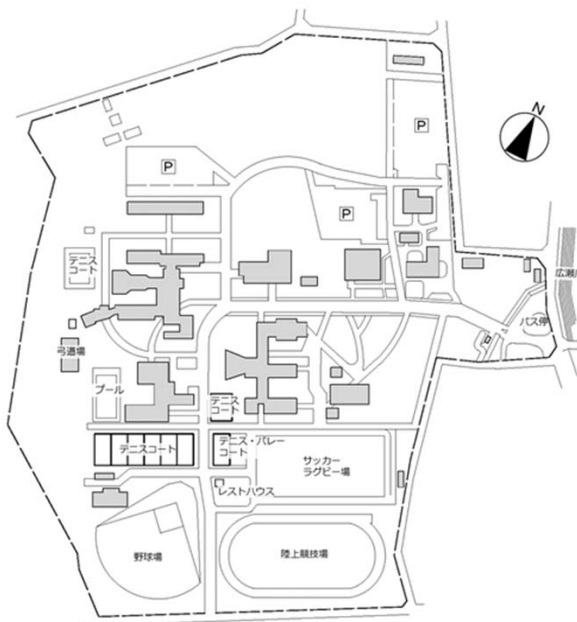
【主な沿革】

平成5年

- 教養部を改組、社会情報学部を設置

平成11年

- 留学センター(現国際センター)設置



現在(令和4年)

学生食堂のある学生会館の改築や、平成29年度地域科学技術実証拠点整備事業による次世代モビリティ社会実装研究センターが整備された。
現在、情報学部設置による10号館増築(建設中)が行われている。

【主な沿革】

平成28年

- 次世代モビリティ社会実装研究センター設置

平成29年

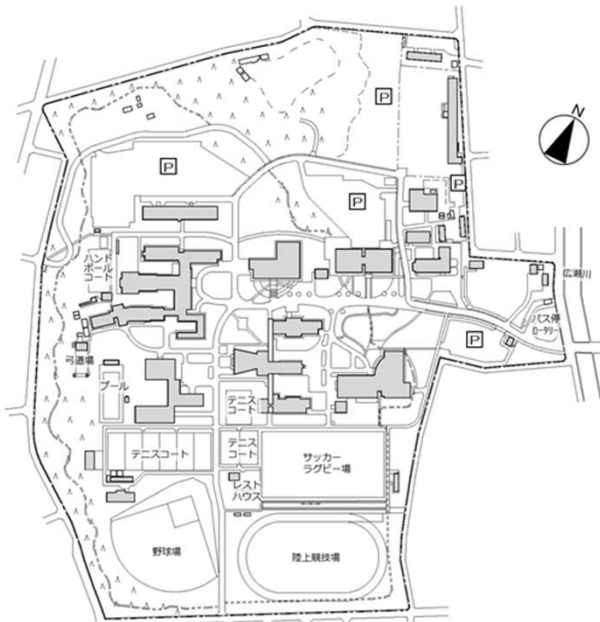
- 数理データ科学教育研究センター、食健康科学教育研究センター設置

令和2年

- 教育学部を改組し、宇都宮大学と共同教育学部を設置
- ダイバーシティ推進センター設置

令和3年

- 社会情報学部と理工学部電子情報理工学科情報科学コースを統合し、情報学部を設置



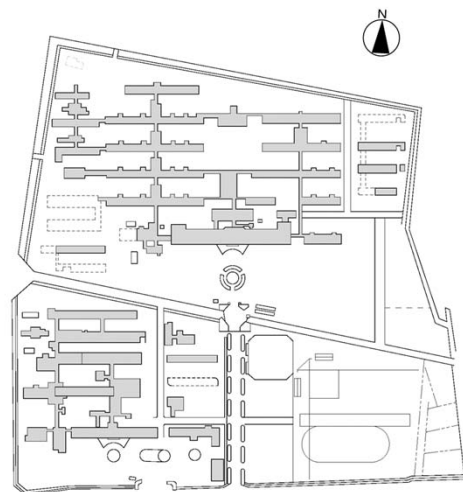
(2) キャンパス変遷図

【昭和キャンパス】

昭和28年

昭和19年3月28日にベッド数約50床の附属病院の開院式が行われたが、昭和20年8月5日の前橋空襲により一部類焼。昭和24年8月外来本館が竣工し全科移転、本格的な診療が始まる。昭和22年に木造の基礎本館が竣工。

この頃、キャンパスの周りのはのかな田園が広がっていた。本部管理棟（事務局）が昭和キャンパスにあった。



【主な沿革】

昭和24年

- 群馬師範学校、群馬青年師範学校、前橋医科大学、桐生工業専門学校の諸学校を包括し、学芸学部、医学部および工学部からなる群馬大学が開学。
- 医学部附属病院設置

昭和26年

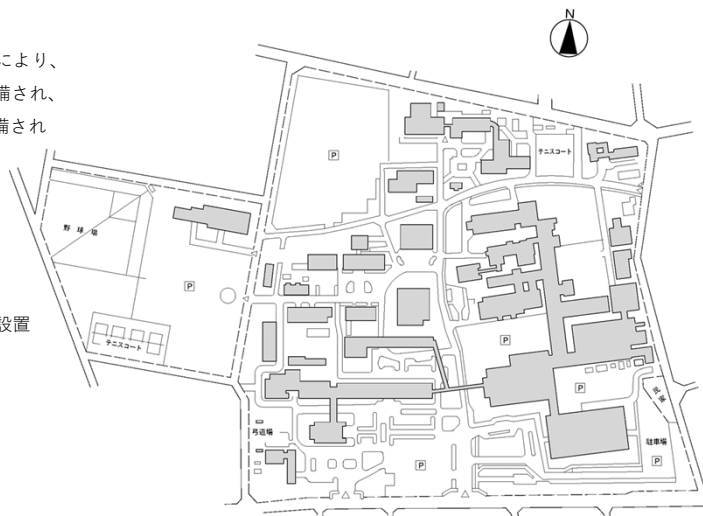
- 医学部附属内分泌研究施設 設置

昭和38年

- 内分泌研究所設置（現生体調節研究所）

平成10年

病院地区で、昭和61年から病院再開発により、外来診療棟、南病棟、中央機械室が整備され、医学部地区で、図書館、RI研究棟が整備された。



【主な沿革】

平成8年 医学部保健学科設置

平成9年 遺伝子実験施設設立

平成17年 重粒子線医学研究センター設置

昭和58年

昭和32年3月外来本館焼失、この時、横にあった鉄筋4階建ての病棟は影響が全く無かった。その火災を契機に鉄筋コンクリート造の建物への整備が始まる。東西第二病棟、東西第一病棟、西第三病棟が整備された。

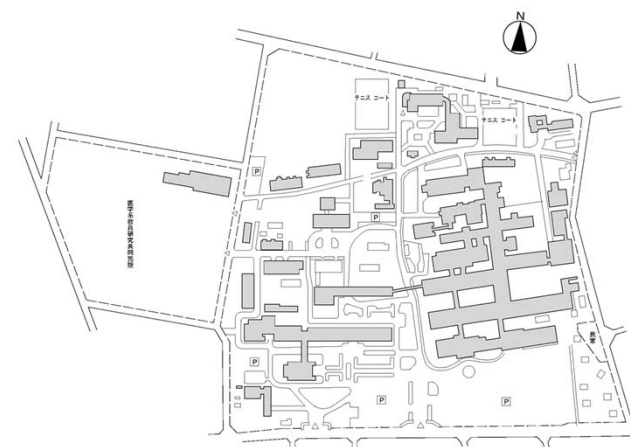
【主な沿革】

昭和52年

- 医学部附属看護学校、附属助産婦学校、附属臨床検査技師学校を医療技術短期大学部に改組

昭和55年

- 群馬県蚕糸試験場の筑波移転による払下げにより、キャンパス西側の地区を取得



現在（令和4年）

病院地区で北病棟、中央診療棟、重粒子線医学センター、特別診療棟、東棟、立体駐車場・アメニティモール(PFI)等を整備し、再開発が完了した。医学部では、保健学科新棟、生体ゲノムリソースセンターが整備され、現在に至る。

【主な沿革】

平成21年 重粒子線医学推進機構設置

平成25年

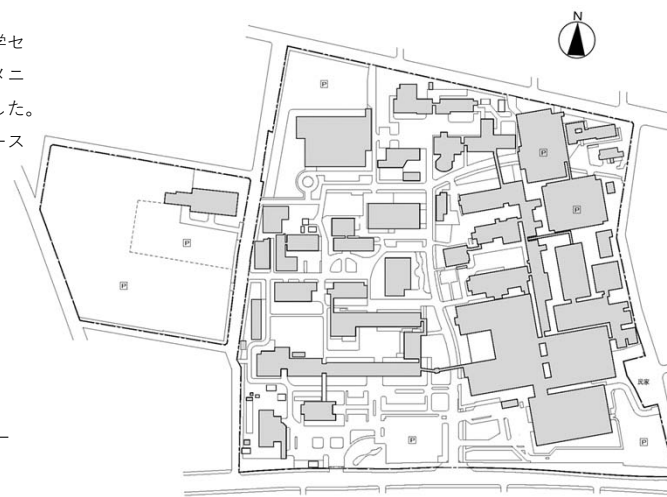
- 多職種連携教育研究研修センター（WHO協力センター）設置

令和元年

- 生体調節研究所附属拠点研究支援センター設置

- ウイルススペクター開発研究センター設置

令和3年 多機能診療棟設立



(2) キャンパス変遷図

【桐生キャンパス】

昭和33年

昭和33年頃、現理工学部の前身である工業短期大学部に機械科・電気科が設置された。ほとんどが木造の建物であったが、昭和32年の応用化学科教室焼失を機に鉄筋コンクリート造の建物への改築が始まる。

【主な沿革】

昭和24年

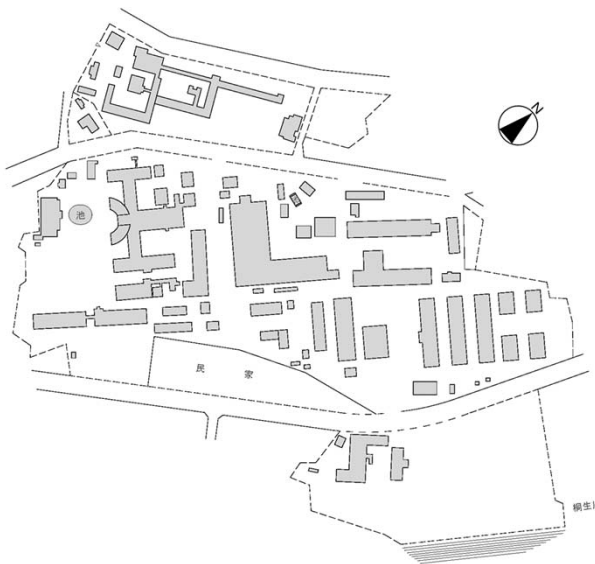
- 群馬師範学校、群馬青年師範学校、前橋医科大学、桐生工業専門学校の諸学校を包括し、学芸学部、医学部および工学部からなる群馬大学が開学。

昭和28年

- 工業短期大学部併設

昭和31年

- 附属繊維工業研究施設設置



昭和40年

鉄筋コンクリート造の2号館（応用化学、高分子化学、合成化学、化学工学科）が建設された。これ以降、3・4・5・6・7号館、図書館、講義棟、1号館、体育館等、建物整備が加速し、桐生キャンパスの再整備を進めた。

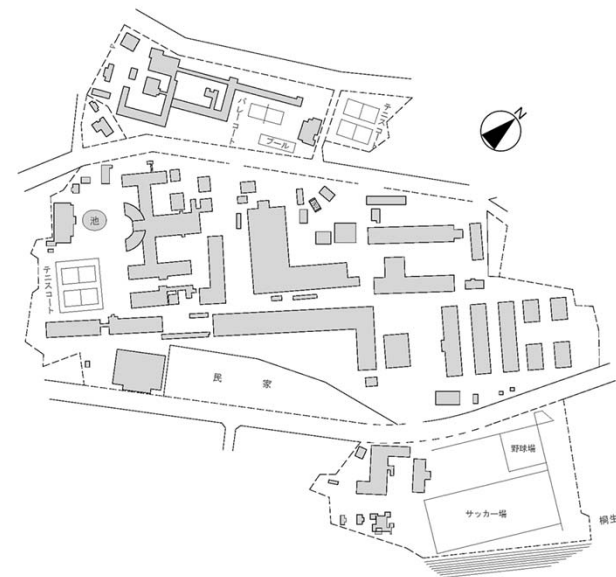
【主な沿革】

昭和31年

- 工学部附属繊維工業研究施設を設置

昭和49年

- 附属繊維工業研究施設を附属応用複合材料研究施設に改組



平成10年

平成4年から桐生キャンパスの再整備が始まり、情報工学科棟、RI実験施設、応用化学科棟、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーが整備された。

【主な沿革】

昭和63年

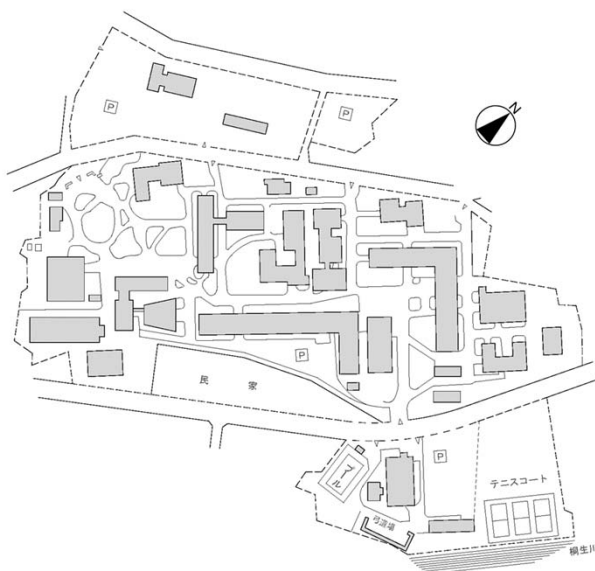
- 地域共同研究センター設置

平成4年

- 工業短期大学部 廃止

平成8年

- サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設置



現在（令和4年）

材料工学科棟、総合研究棟、インキュベーションが建設された。また既存建物の耐震化改修が進み、現在に至る。

【主な沿革】

平成20年

- ケイ素科学国際教育研究センター設置

平成25年

- 工学部を理工学部へ改組



(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスの周辺環境・条件【荒牧キャンパス】

■ キャンパスの立地条件

前橋市の北部、JR前橋駅から北北西に約7km離れた利根川の左河岸沿いに位置する。キャンパスの東側及び北部には、国道17号線が南北、東西に走っており、周辺は主に第2種中高層住居専用地域の住宅地となっている。

北側には群馬県総合体育センターがあり、利根川寄り隣地は区画整理済住宅地となっている。

前橋市都市計画マスタープランにおいて、キャンパス周辺は「南橋地区」のうち一般住宅ゾーンに位置しており、「自然を活かした潤いに包まれた住みよいまち」を将来像としている。

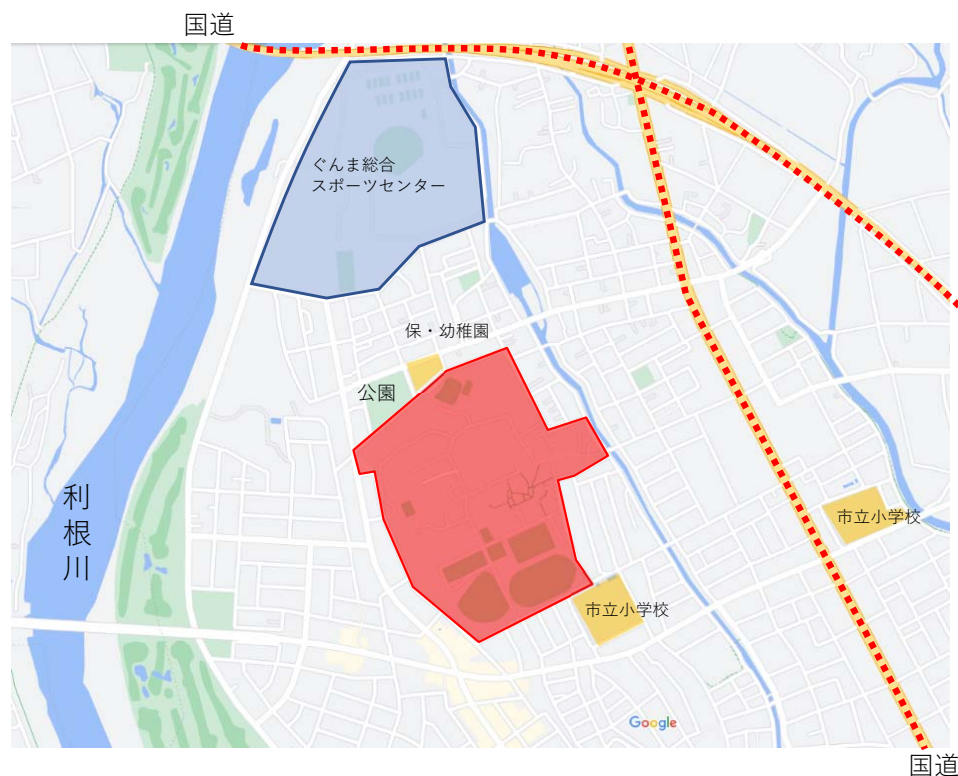
また、荒牧キャンパスは、地震・火災時の指定緊急避難所となっている。

■ 敷地条件

敷地面積255,763㎡を有し、敷地内の高低差は5.1mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。地質構成は、表層から2m程度の河川堆積の粘土混じりの砂層があり、深層部は玉石混じりの砂礫層が分布しており、建物支持層として深さは3m程度である。

敷地内の建物延べ床面積は51,059㎡、建ぺい率8.43%、容積率19.96%となっている。

都市計画上の用途地域は第1種中高層住居専用地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。



■ 現状課題・問題点

- 正門及びキャンパス南側の市道の道路幅は8m、他の周辺道路は6mとなっており、正門以外のキャンパス周辺道路が狭い。
- 歩道が整備されているのも正門側道路のみ。
- キャンパス北側に用水路が高い位置にあり、草木の詰まりにより道路側へ水があふれることがしばしばある。また、周辺地域との壁となっており、キャンパス北側の整備検討の支障となりえる。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスの周辺環境・条件【昭和キャンパス】

■ キャンパスの立地条件

前橋市街地北西部に位置し、JR前橋駅から北北西に約3km離れた利根川の左河岸沿いに位置する。キャンパスの東側には国道17号線が南北に、南部には県道6号線が東西に走っており、周辺は住宅や商店等が密集している。

キャンパス北西には、県管理のスポーツ施設区域と市管理のレクリエーション区域が併設されている地域拠点も近くに存在している。

キャンパス内にある附属病院は、高度医療・人材育成、地域災害拠点病院など地域の中核を担う救急医療機関となっており、JR東日本の前橋駅、高崎駅、沼田駅と複数の駅からアクセスできるよう公共交通機関も整備されている。

前橋市都市計画マスタープランにおいて、キャンパス周辺は「本庁地区」のうち一般住宅ゾーンに位置し、「県都の顔として、利便性が高くにぎやかなまち」を将来像としている。この地域には、県庁・市役所や集積しており、行政サービスの中心機能を有する都市核がある。

■ 敷地条件

敷地面積161,631㎡を有し、敷地内の高低差は1.5mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。地質構成は、表層から2m程度までは河川堆積の粘土混じりの砂層があり、深層部は玉石混じりの砂礫層が分布しており、建物支持層として深さは4m程度である。

敷地内の建物延べ床面積は178,844㎡、建ぺい率30.52%、容積率110.65%となっている。

都市計画上の用途地域は準住宅地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。



■ 現状課題・問題点

- 市道を挟んで東西キャンパスが分かれており、キャンパスの間を通る市道は6m幅と狭く、キャンパス西側にある駐車場の出入り口として利用しているため、通勤・通学時に渋滞が発生している。
- キャンパス南側の県道6号は片側2車線道路で歩道も整備されているが、救急車の出入りはキャンパス東側にある8m道路を利用しているため、救急車の出入りの際、一部制限が生じている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスの周辺環境・条件【桐生キャンパス】

■ キャンパスの立地条件

JR桐生駅より北北東に約2km離れた市街地北部の一級河川桐生川に面している。

キャンパスは、県道（桐生田沼線）及び市道によって3つに分断されており、敷地周辺は住宅、商業、小工場が多い。

桐生市都市計画マスタープランにおいて、「中央東地域」のうち公共公益施設用地となっており、「魅力ある商業・文化機能を備え、産業と住環境が共存・調和した、市内外から訪れる人々がすばらしいと思える、歴史と文化の薫るまち」を目指している。キャンパス周辺を群馬大学周辺拠点とし、人材・企業の育成の場として位置づけ、市民や産業と技術・研究の交流環境の向上を図り、広域的な交流拠点の形成を図ることとしている。

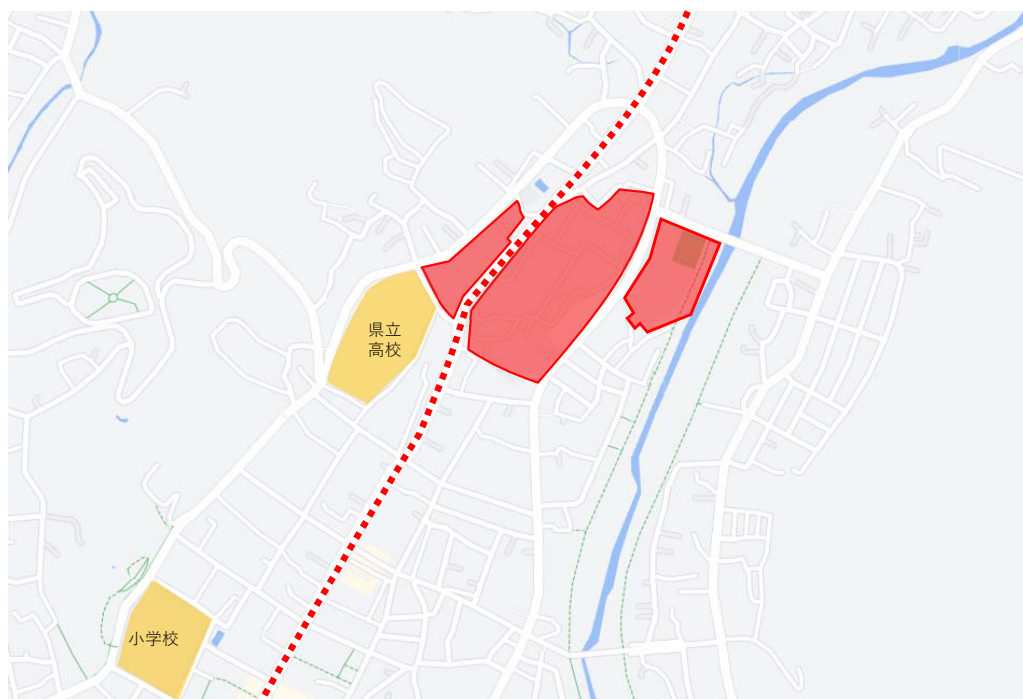
また、桐生キャンパスは、洪水、土砂災害、大規模火事、内水氾濫時の指定緊急避難場所となっている。

■ 敷地条件

敷地面積78,182㎡を有し、敷地内の高低差は1.0mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。地質構成は、表層から2 m程度までが砂質粘性土であり、深層部は玉石混じりの砂礫層が分布しており、建物支持層として深さは5m程度である。

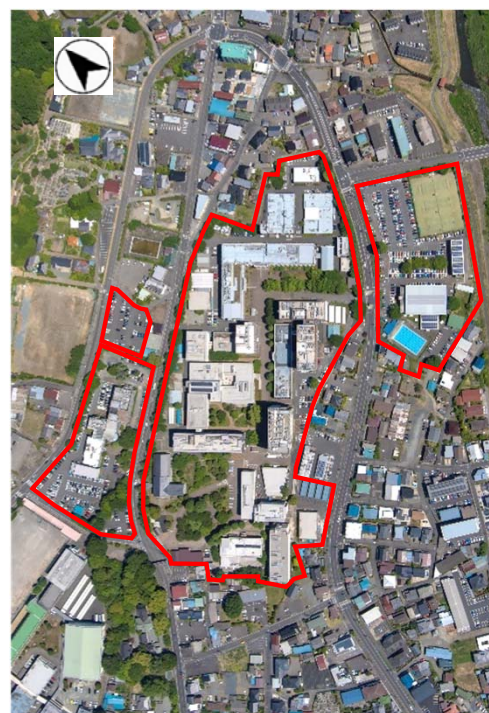
敷地内の建物延べ床面積は68,040㎡、建ぺい率23.39%、容積率87.03%となっている。

都市計画上の用途地域は第1種住居地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。



県道

引用元：Google社「Google マップ、Google Earth」



■ 現状課題・課題

- ・ 県道を挟みキャンパスが横断している。特に産学連携拠点となっているエリアが学生の滞在エリアから離れてしまっているため、空間的な隔たりが発生している。
- ・ 他のキャンパスからの物理的な距離があるため、他学部間交流がしづらい環境となっている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスの周辺環境・条件【附属学校（若宮団地）】

■ キャンパスの立地条件

前橋市市街地中心部よりやや北東寄り、JR前橋駅より北に2km離れた場所に位置している。キャンパスの西側には県道4号線が南北に走っており、公共交通機関も整備されている。

小学校・特別支援学校、幼稚園が北から南へ公道に隔てられた配置となっており、公道を挟んだ幼稚園の南側には農園（日吉団地）が近くに存在しており、周辺は住宅に囲まれている。

東には市立中学校、南には放送大学群馬学習センターや県立図書館、県民会館などの地域拠点がある。

前橋市都市計画マスタープランにおいて、「本庁地区」のエリアの一部に位置し、「県都の顔として、利便性が高くにぎやかなまち」を将来像としている。

■ 敷地条件

敷地面積34,903㎡を有し、敷地内の高低差は0.4mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。敷地内の建物延べ床面積は13,281㎡、建ぺい率20.07%、容積率38.05%となっている。

都市計画上の用途地域は第1種住居地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。



引用元：Google社「Google マップ、Google Earth」



■ 現状課題・問題点

- 敷地周辺は西側を除く周辺道路は幅6mで、歩道がなくスクールゾーンの安全対策が不十分である。
- 小学校南側の市道が一方通行のため、駐車場への出入り等に制限が生じている。
- 小学校側では来客用の駐車場が不足、幼稚園では保護者送迎用の駐車場がなく、保護者が送迎用に近隣の駐車場を借りるなどの対応をしている。
- 若宮団地内での附属学校園での連携は図れているものの、附属中学校のある上沖団地とは距離が離れていることで、連携がとりにくい状況となっている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスの周辺環境・条件【附属学校（上沖団地）】

■ キャンパスの立地条件

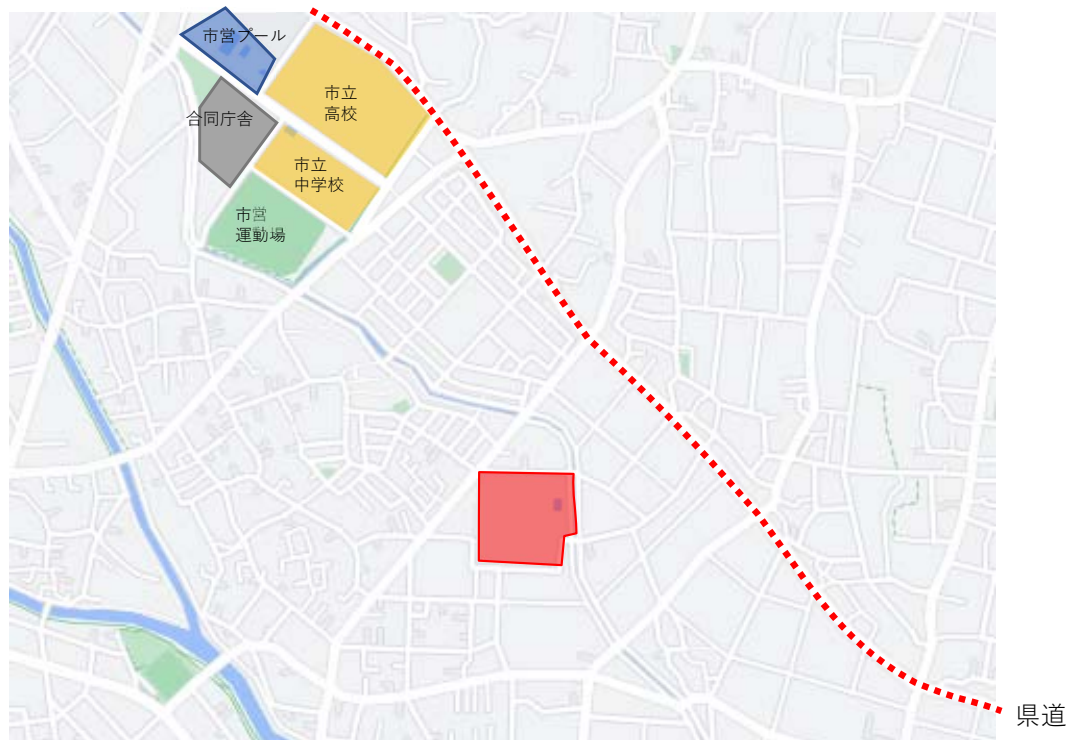
前橋市市街地中心部から少しはずれた北東寄り、JR前橋駅より北北東に約4km離れた場所にあり、附属小学校のある若宮団地からは、約2km北東方向に位置する。キャンパス北側には東西に県道76号線が走っており、敷地周辺は住宅と田園に囲まれており、北西には市立の中学校、高校、合同庁舎や市営運動場がある。

前橋市都市計画マスタープランにおいて、「桂萱地区」のうち一般住宅ゾーンに位置し、「交通の利便性に富んだ住みよいまち」を将来像としている。

■ 敷地条件

敷地面積37,430㎡を有し、敷地内の高低差は1.1mであり、敷地全体としては北側が高い状況である。敷地内の建物延べ床面積は6,700㎡、建ぺい率11.5%、容積率17.9%となっている。

都市計画上の用途地域は第1種住居地域であり、建ぺい率60%、容積率200%が上限となっている。



引用元：Google社「Google マップ、Google Earth」



■ 現状課題・問題点

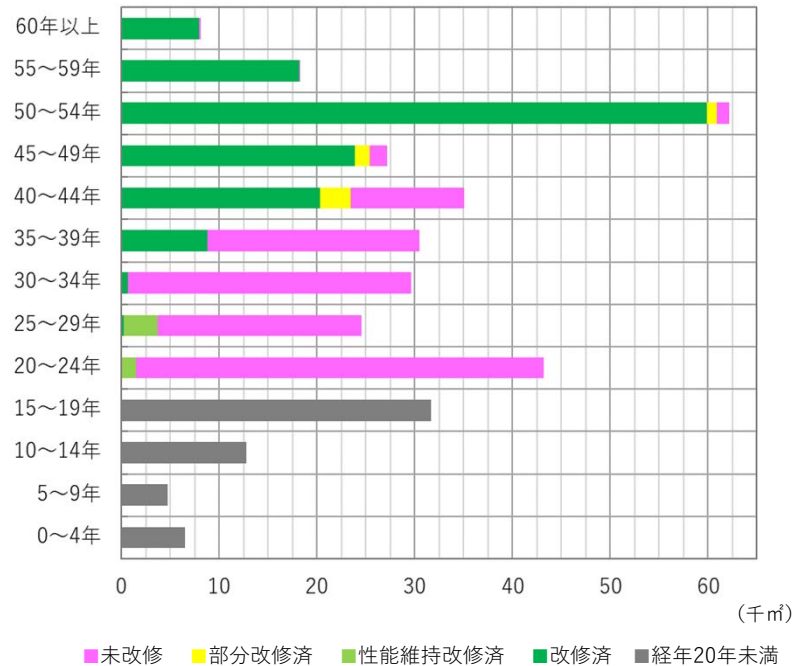
- ・公共交通機関は一番近いバス停から徒歩10分以上かかり、交通の便が悪い。
- ・生徒は主に自転車で通学しているが、キャンパス西側の主道路でも6mと道路が狭く、スクールゾーンとされているが交通量が多く、通学時が危険な状況である。
- ・キャンパス周囲の道路幅はさらに狭く、4.5mとなっておりキャンパス周囲の環境については、安全とはいえない部分がある。
- ・他の附属学校（若宮団地）と距離が離れており、授業などでの連携が取りづらい状況となっている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

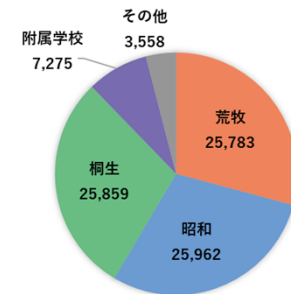
◆ 経年別施設の保有及び改修状況（大学全体）

経年別施設の保有・改修グラフ（大学全体）

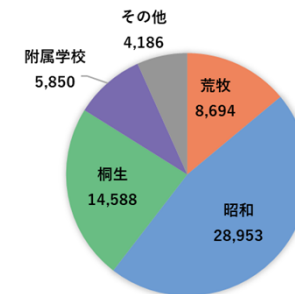
※太田キャンパス（借用）を除く



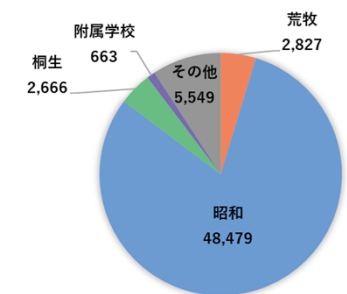
経年別施設の保有面積グラフ



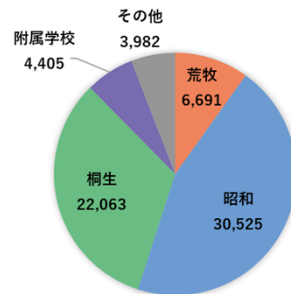
経年50年以上 88,437㎡



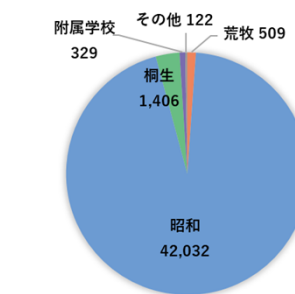
経年40～49年 62,271㎡



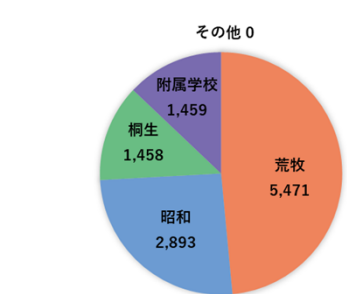
経年30～39年 60,184㎡



経年20～29年 67,666㎡



経年10～19年 44,398㎡



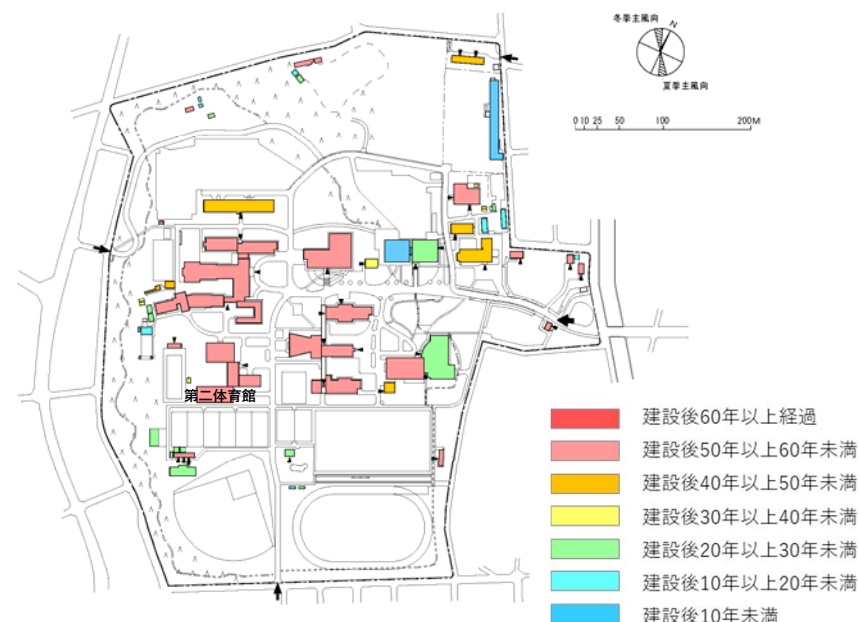
経年0～9年 11,281㎡

- 本学の建物面積は借用（太田キャンパス）を除き334,237㎡あり、そのうち荒牧キャンパスが15%、昭和キャンパスが53.5%、桐生キャンパスが20.4%、附属学校が6%、その他（研修所・学生寮・宿舍）が5.2%である。
- 本学のインフラ長寿命化計画において、新営後40年を全面改修、80年で改築の周期としており、経年40年以上の建物150,708㎡のうち全面改修を行っていない未改修建物は14,885㎡（全体の約4.5%）である。国立大学法人等と比較すると建物の老朽化改修は、他大学より進んでいるものの、約30年後に改築周期となる建物面積が88,437㎡（全体の26.5%）となるため、キャンパス全体の整備について検討を進める必要がある。
- インフラ長寿命化計画に基づき、新営・改修後20年に予防保全改修（性能維持改修）を進めているが、予算不足等により計画的に実施できていない状況のため、安定的な予算確保と確実な実施が求められる。
- 建物の耐震化はすべての建物（倉庫等500㎡以下の建物を除く）で実施済みであり、非構造部材についても耐震化が完了している。
- 経年44年の学生寮（養心寮）や4つの団地に点在している職員宿舍（経年28～44年）については、未改修で老朽化も進んでいるため、今後の運用について検討を進めている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

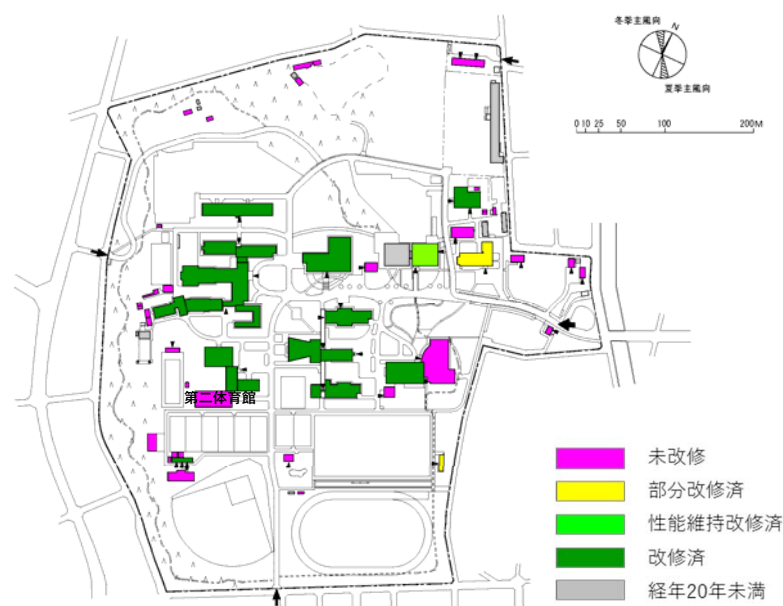
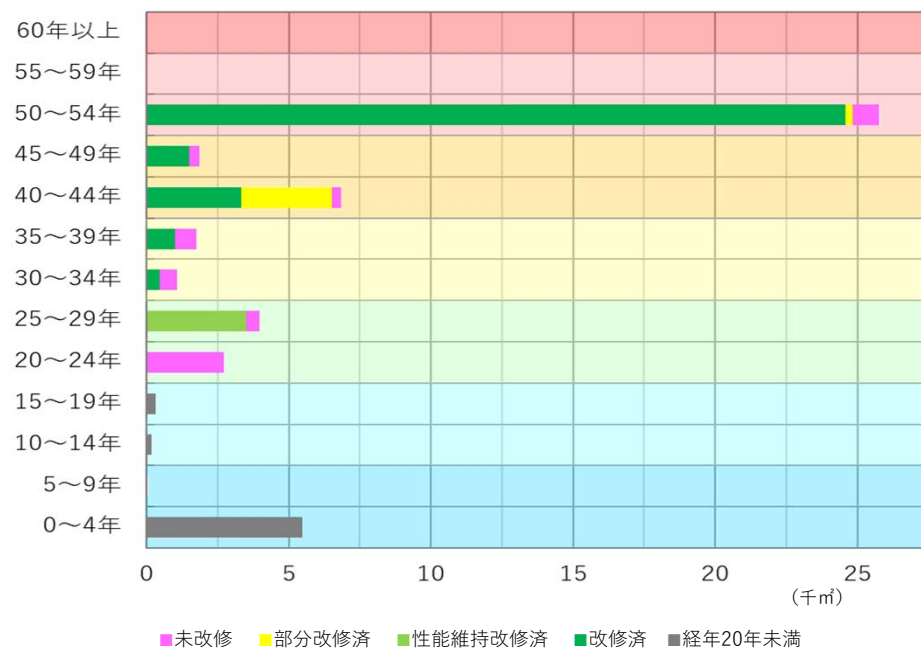
◆ 経年別施設の保有及び改修状況【荒牧キャンパス】

- 荒牧キャンパスのすべての建物（倉庫等を除く）は耐震対策は完了しており、経年40年以上経過している建物34,477㎡のうち、未改修部分は1,639㎡（キャンパス全体の約3.3%）であり、全体的な老朽化対策は実施している。
- 第二体育館や小規模建物などが未改修のまま経年50年を超えており、更新計画が進んでいない状況である。また、屋外運動場等も老朽化が進んでいることから、今後の運用も含めた施設整備計画について検討する必要がある。
- 昭和45年のキャンパス移転から53年が経過し、キャンパスの建物面積のうち約50%の25,783㎡が経年50年を超えており、30年以内に建物の改築時期（経年80年を想定）を迎えることから、計画的な予防保全改修と建替えに向けた検討を進める必要がある。
- インフラ長寿命化計画に基づいた予防保全改修（経年20年）が予算不足等により遅れている状況であることから、安定的な予算確保と確実な実施が求められる。



経年別建物配置図

経年別施設の保有・改修グラフ（荒牧）

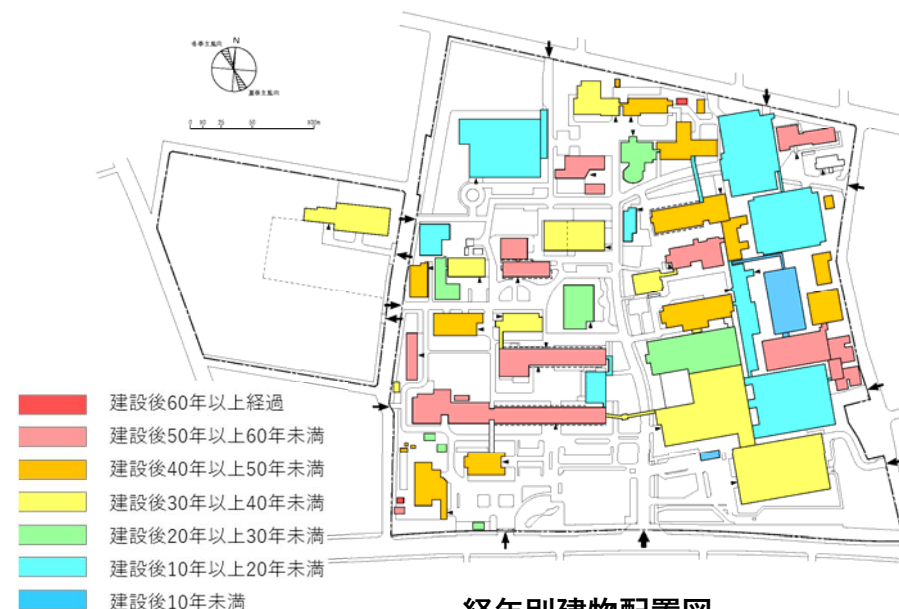


改修別建物配置図

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 経年別施設の保有及び改修状況【昭和キャンパス】

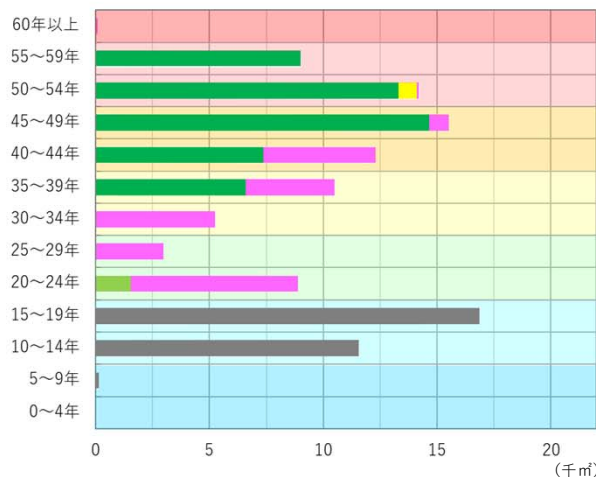
- 昭和キャンパスのすべての建物（倉庫等を除く）は耐震対策は完了しており、経年40年以上経過している建物54,915㎡のうち、未改修部分は6,214㎡（キャンパス全体の約3.5%）であり、診療棟1,3など一部が未改修であるが、全体的な老朽化対策は実施している。
- 病院エリアは、昭和60年から平成20年頃までを病院再開発期間として整備しているが、経年による施設の劣化や機能の陳腐化が進んでいることから、病院機能の性能維持向上のため再開発に向けた検討を進めている。
- 建物と駐車場が多く、敷地に余裕がなく建物の建て詰まりが生じていることから、病院再開発などにあわせた土地の有効活用について検討を進める必要がある。
- インフラ長寿命化計画に基づいた予防保全（経年20年）が予算不足等により遅れている状況であることから、安定的な予算確保と確実な実施が求められる。



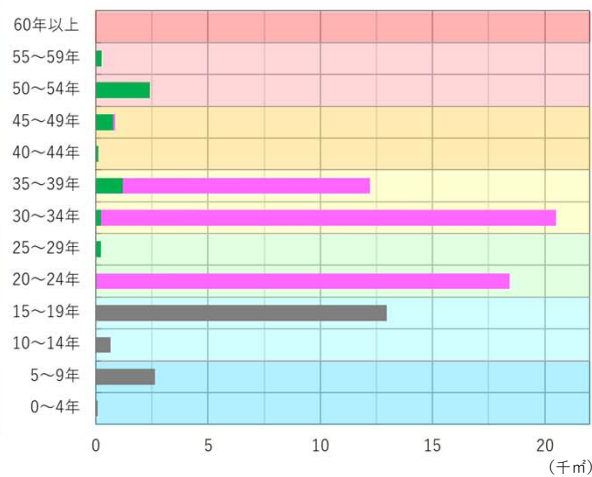
経年別建物配置図

経年別施設の保有・改修グラフ（昭和）

学部エリア



病院エリア



■未改修 ■部分改修済 ■性能維持改修済 ■改修済 ■経年20年未満



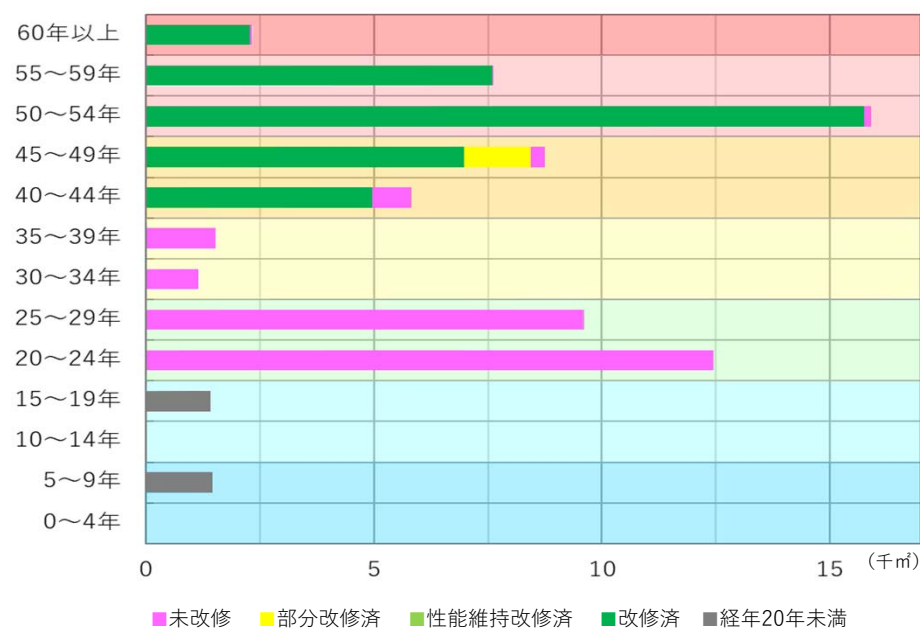
改修別建物配置図

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 経年別施設の保有及び改修状況【桐生キャンパス】

- 桐生キャンパスのすべての建物（倉庫等を除く）は耐震対策は完了しており、経年40年以上経過している建物40,447㎡のうち、未改修部分は1,427㎡（キャンパス全体の約2.1%）であり、合宿研究施設や実験棟、倉庫など小規模の建物が未改修であるが、全体的な老朽化対策は実施している。
- 桐生キャンパスは平成4年からの再整備により経年が20年前後の建物も多く存在するが、桐生キャンパス全体の約40%となる25,859㎡が、30年以内に建物の改築時期（経年80年を想定）を迎えることから、計画的な予防保全改修と建替えに向けた検討を進める必要がある。
- 建物と駐車場が多く、敷地に余裕がないため、建て詰まりの解消に向けた土地の有効活用についての検討が必要である。
- 経年35年以降の未改修建物について今後全面改修に向けた計画を進めることに加え、インフラ長寿命化計画に基づいた建物の予防保全改修（経年20年）が予算不足等により遅れている状況から、安定的な予算確保と確実な実施が求められる。

経年別施設の保有・改修グラフ（桐生）

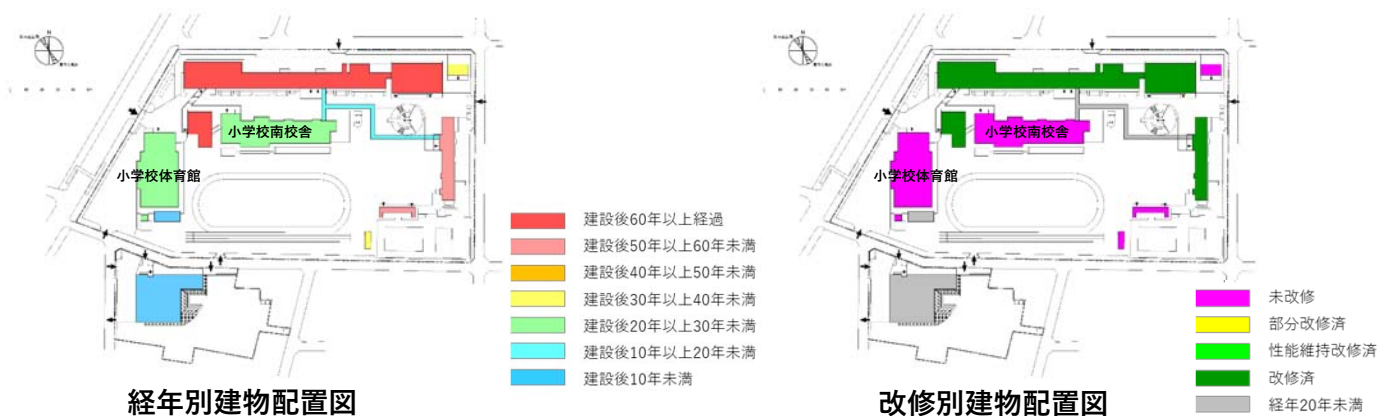


(3) 主要キャンパスの現状・課題

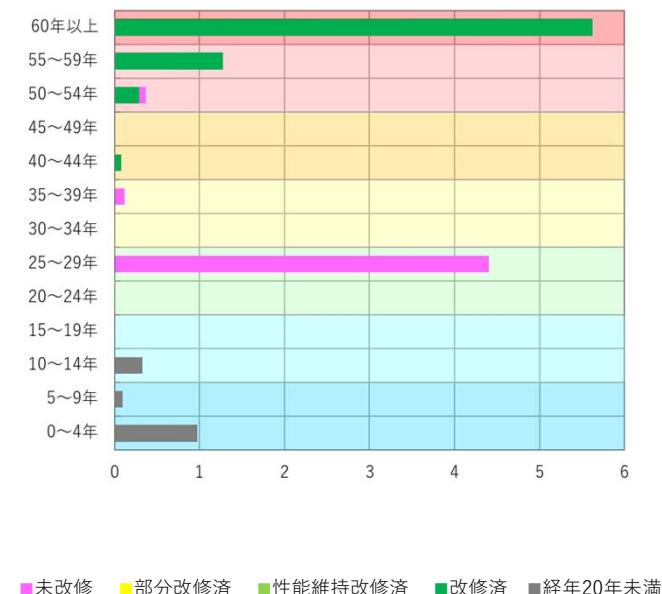
◆ 経年別施設の保有及び改修状況【附属学校】

【若宮団地】

- すべての建物（倉庫等を除く）は耐震対策が完了しており、経年40年以上の建物については概ね整備済みであるが、屋外運動場等の老朽化が進んでいる。
- 建物面積のうち約55%の7,275㎡が経年50年を超えており、30年以内に建物の改築時期（経年80年を想定）を迎えることから、計画的な予防保全改修と建替えに向けた検討を進める必要がある。

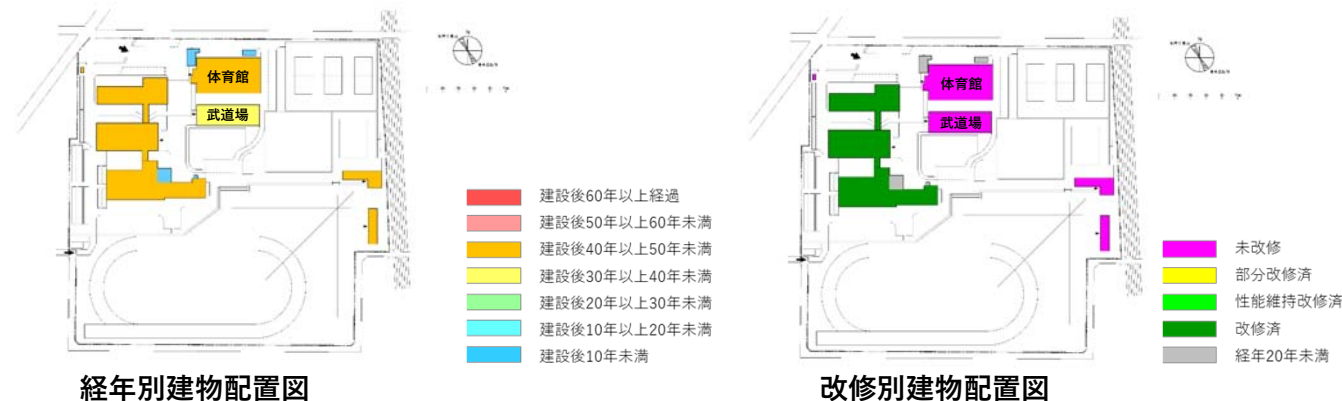


経年別施設の保有・改修グラフ（若宮）

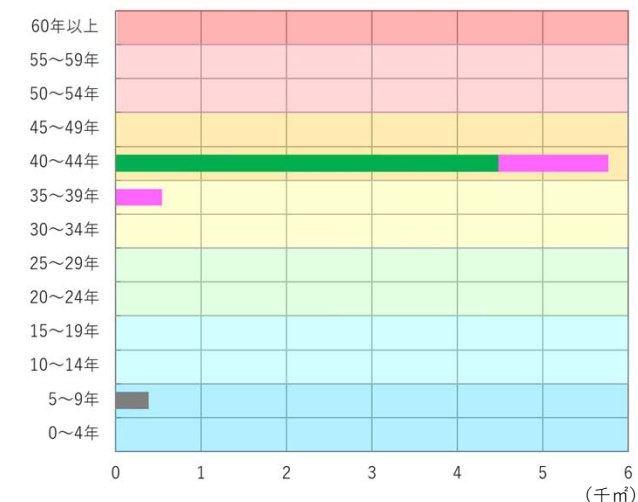


【上沖団地】

- 昭和55年の附属中学校の移転により、建物の建設年が1つの年代に集中していることから、建物の老朽化対策が同時期に生じる可能性が高い。
- 経年40年以上の5,770㎡のうち、未改修建物が1,291㎡であり、体育館や体育管理施設、屋外運動場等の老朽化が進んでいる。

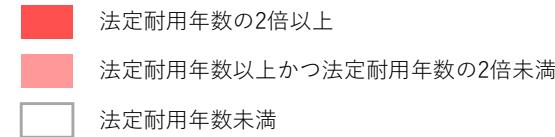


経年別施設の保有・改修グラフ（上沖）



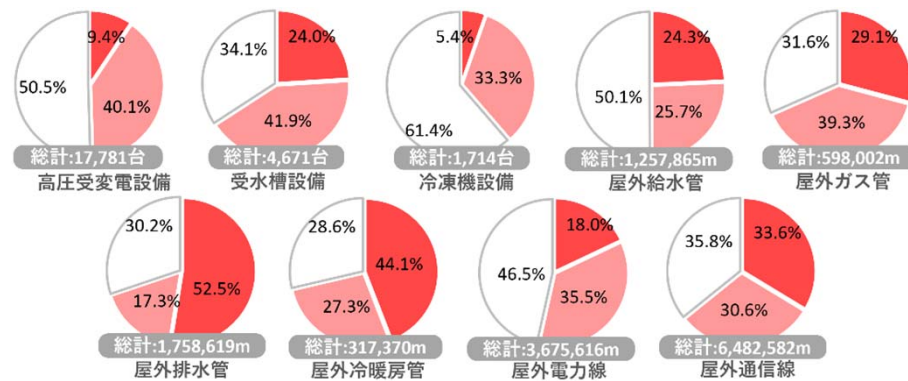
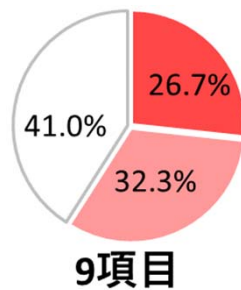
(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ライフラインの改修状況【大学全体】

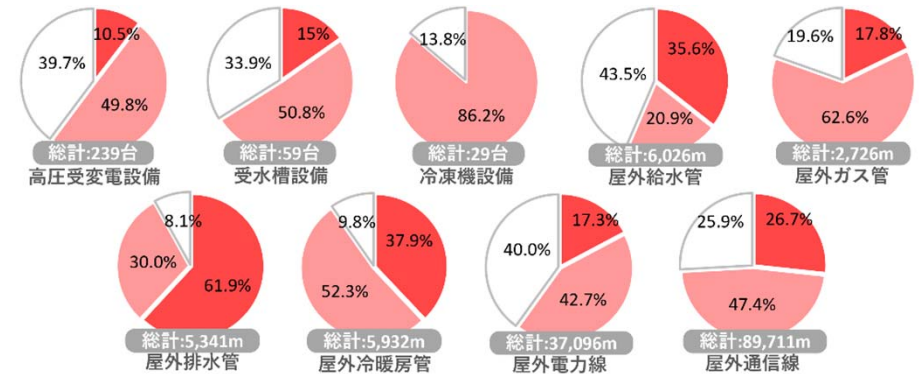
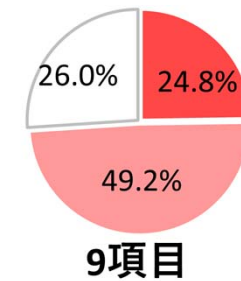


※法定耐用年数（減価償却資産の耐用年数等に関する省令に基づく耐用年数）はそれぞれ15年。
ただし屋外通信線の光ケーブルは10年、光ケーブル以外は13年。

【国立大学法人等ライフラインの改修状況】



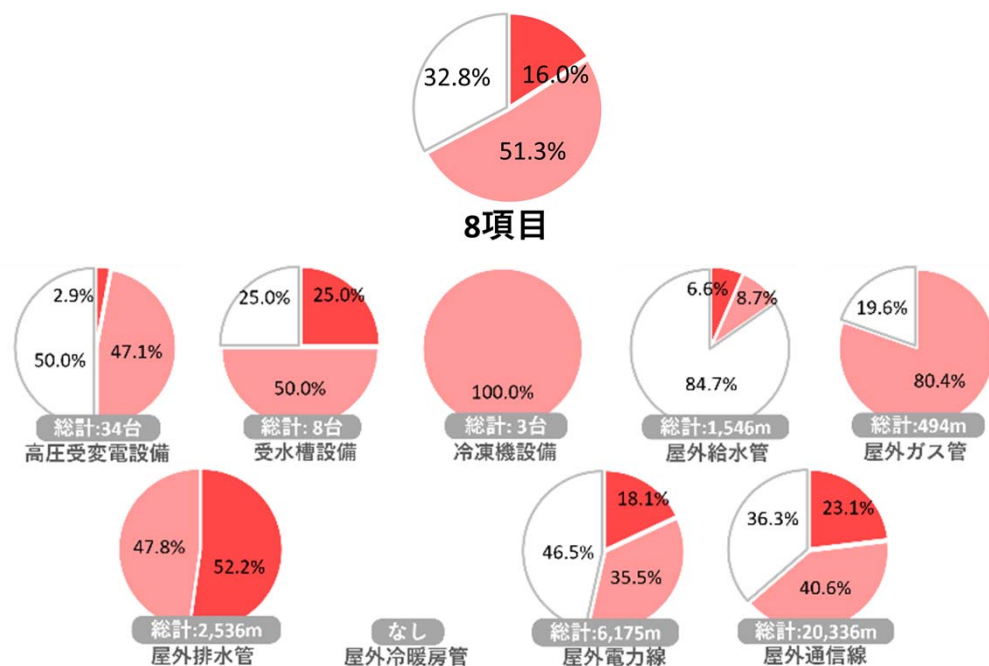
【群馬大学ライフラインの改修状況】



- ・ ライフラインの改修状況9項目の合計においては、耐用年数超過率が全国約60%であるのに対し、本学全体では74%と老朽化率が高い。
- ・ 各項目別では、受水槽設備を除く8項目が全国と比較しても耐用年数超過率が高く、全般的に老朽化率が高い状況であるが、特に冷温水設備、屋外ガス管、屋外排水管、屋外冷暖房管においては特に老朽改善が遅れている状況である。
- ・ このほか、災害対応のため、非常用発電機、無停電電源装置、太陽光発電設備を設けており、災害時に対応できるような整備を進めている。

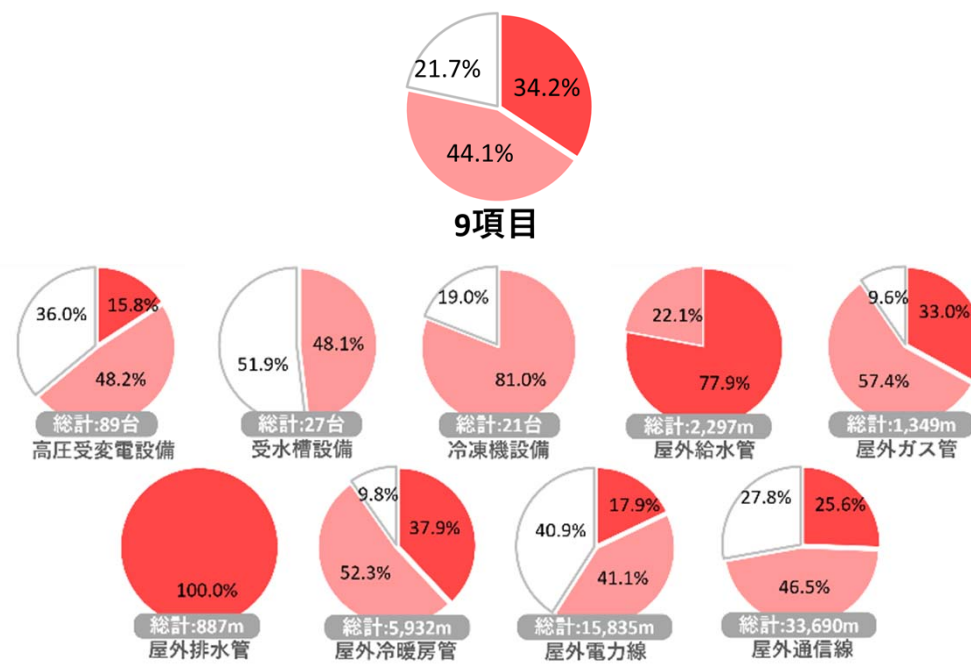
(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ライフラインの改修状況【荒牧キャンパス】



- ・ライフラインの安定的な確保のため、キャンパスの整備にあわせ共同溝を整備している。
- ・大規模改修にあわせて建物周辺のライフラインの更新は行っているものの、キャンパス内幹線部分のうち、屋外排水管や通信線など未更新となっており、法定耐用年数の2倍以上経過しているものも存在している。
- ・ライフラインの耐震化に加え、災害時にも必要最低限の活動が行えるよう太陽光発電設備、非常用発電機を設置しているが、実際の災害時を想定した運用等が行えていないため、重要な教育・研究を維持できるバックアップ機能の強化や機能回復の迅速化に向けた検討を進める必要がある。

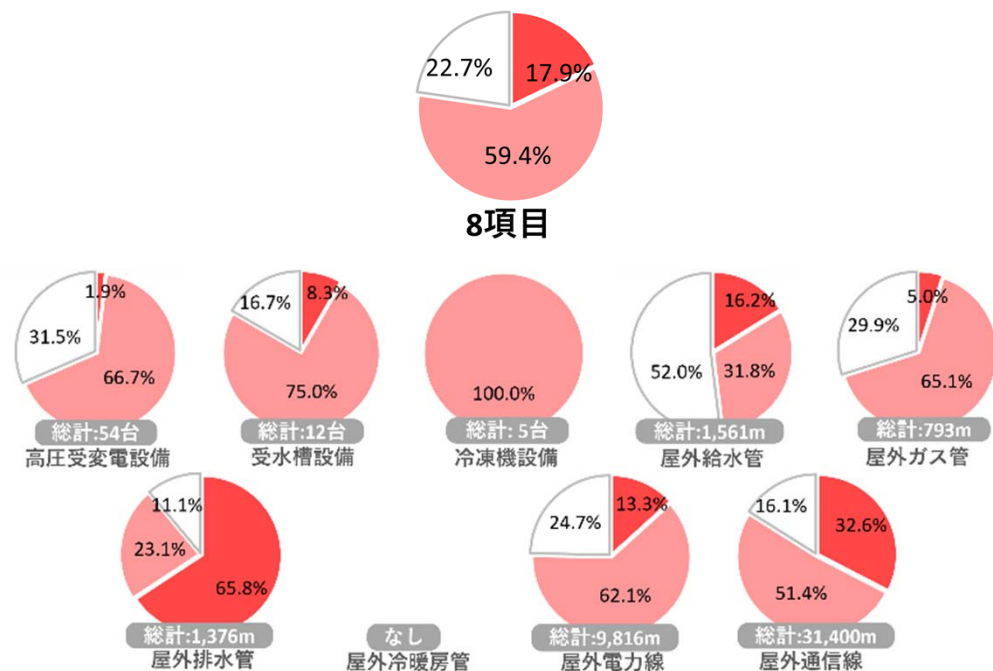
◆ ライフラインの改修状況【昭和キャンパス】



- ・ライフラインの安定的な確保のため、キャンパスの整備にあわせ共同溝を整備している。
- ・ライフラインのうち学部エリアにおいては昭和50年代、病院エリアは昭和60年代の再開発に伴い整備されたものが多く、その後、建物大規模改修に合わせて、建物に関わる部分は更新しているものの、キャンパス内幹線部分のうち、屋外給排水・冷暖房配管や屋外通信線などは未更新のものが多く、法定耐用年数の2倍を経過しているものが存在する。
- ・ライフラインの耐震化に加え、災害時にも必要最低限の活動が行えるよう、非常用発電機や病院地区においては幹線の二重化などを行っている。また、太陽光発電設備、蓄電池も整備している。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

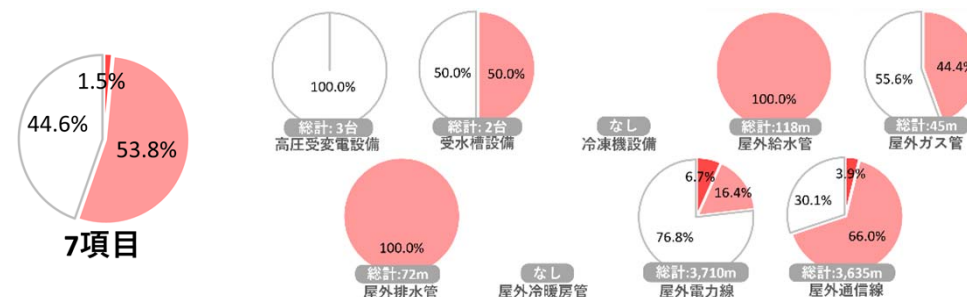
◆ ライフラインの改修状況【桐生キャンパス】



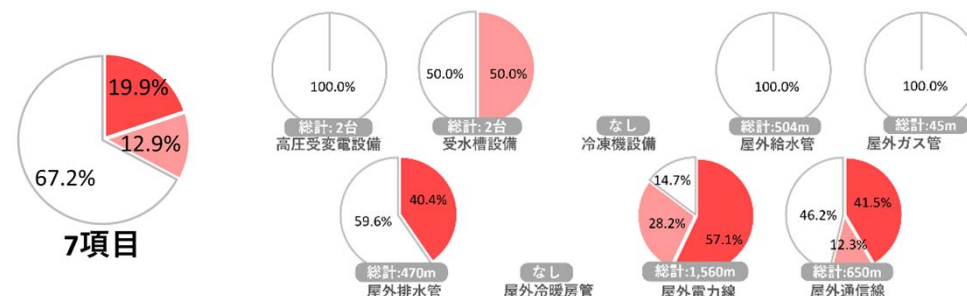
- 昭和46年頃からライフラインの安定的な確保の確保のため、キャンパスの整備にあわせ共同溝を整備している。一部の区間においては、共同溝内部に十分な余幅がない部分もある。
- 大規模改修にあわせて建物周辺のライフラインの更新は行っているものの、キャンパス内幹線部分のうち、屋外排水管や通信線など未更新となっており、法定耐用年数の2倍以上経過しているものも存在している。
- ライフラインの耐震化に加え、災害時にも必要最低限の活動が行えるよう太陽光発電設備、非常用発電機を設置しているが、実際の災害時を想定した運用等が行えていないため、重要な教育・研究を維持できるバックアップ機能の強化や機能回復の迅速化に向けた検討を進める必要がある。

◆ ライフラインの改修状況【附属学校】

【若宮団地】



【上沖団地】



- 各地区には、キャンパス整備にあわせ、共同溝を整備しているが一部区間は埋設配管や十分な余幅がない部分もある。
- 大規模改修にあわせて建物周辺のライフラインの更新は行っているものの、キャンパス内幹線部分のうち、屋外排水管や通信線など未更新となっており、法定耐用年数の2倍以上経過しているものも存在している。
- ライフラインの耐震化に加え、災害時にも必要最低限の活動が行えるよう太陽光発電設備、災害対策トイレなどの整備を行っている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ゾーニング【荒牧キャンパス】

- 講義室が点在した配置や建物の占有意識が残っており、学部使用のスペースの集約化が出来ておらず、利便性や戦略的な運用に欠ける。
- 教育・研究ゾーンの一部建物や屋外の教育・研究用地、産学・連携ゾーンが独立した位置に配置されており、有機的な繋がりが弱い。
- 地域・社会との連携等の観点から、開かれたキャンパスを実現することが求められるが、外部の人が気軽に利用できるような仕組みや場所が少ない。
- 共通・交流ゾーンは正門近くを占めており、地域住民が徒歩等でアクセスしやすい位置に面しているが、正門付近を駐車場や管理施設で使用しており、土地の有効活用が行えていない。
- 課外活動施設等については、現状の運用を踏まえ、今後の方針を検討する必要がある。



農業実習地



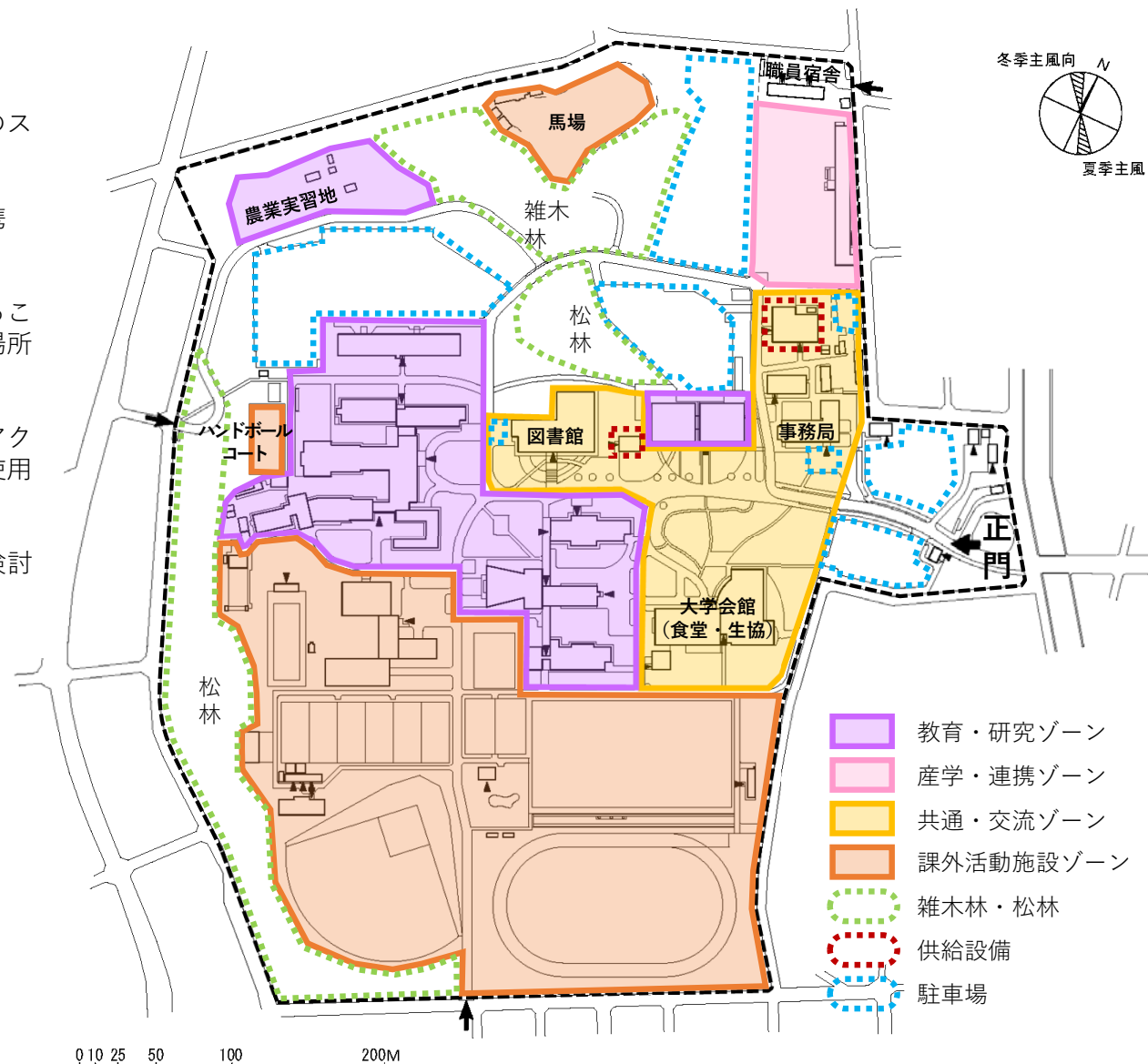
プール付属屋



馬場(課外活動施設)



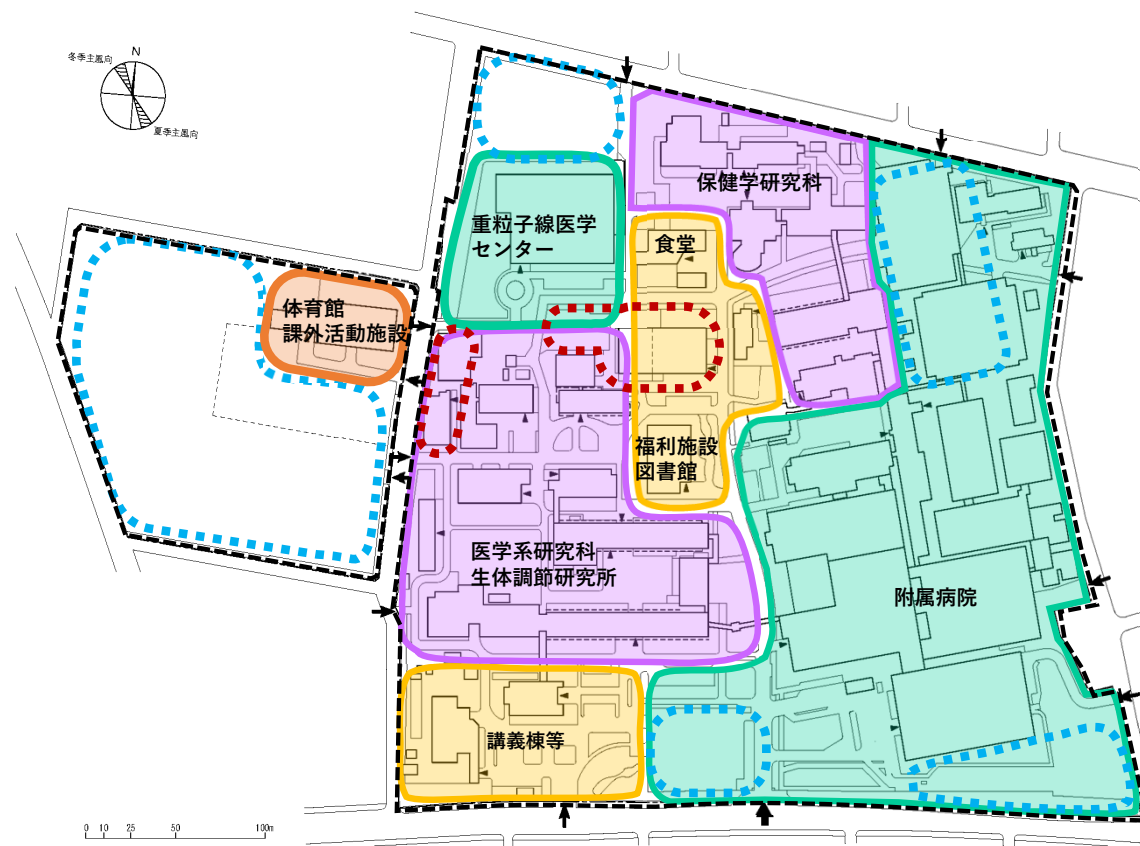
正門付近



(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ゾーニング【昭和キャンパス】

- ・ キャンパス全体に低層建物が散在し、建て詰まっており、大規模な再生整備を実施するためのスペースがない。
- ・ 教育・研究ゾーンには、医学部、医学系研究科、保健学研究科、生体調節研究所などが点在し、渡り廊下で接続されている。
- ・ 医学系研究科と保健学研究科は教育・研究ゾーンが分断されており、有機的な連携が乏しい。
- ・ 産学・連携は個々の講座等で推進しているが、キャンパスの共用スペースとしてまとまった施設がない。
- ・ 課外活動施設等（体育館、部室、弓道場等）は老朽化が進む中、現状の運用を踏まえ、今後の方針について検討が必要である。
- ・ 附属病院ゾーンは低層建物が平面的に広がり、動線が長く複雑となっている。また、キャンパス北西には重粒子線医学センターが独立しているため、病棟等からの患者は院内専用車にて搬送されている。
- ・ 地域・社会との連携等の観点から、開かれたキャンパスを実現することが求められるが、外部の人が気軽に利用できるような仕組みや場所が少ない。



渡り廊下で接続している建物



課外活動施設（部室）



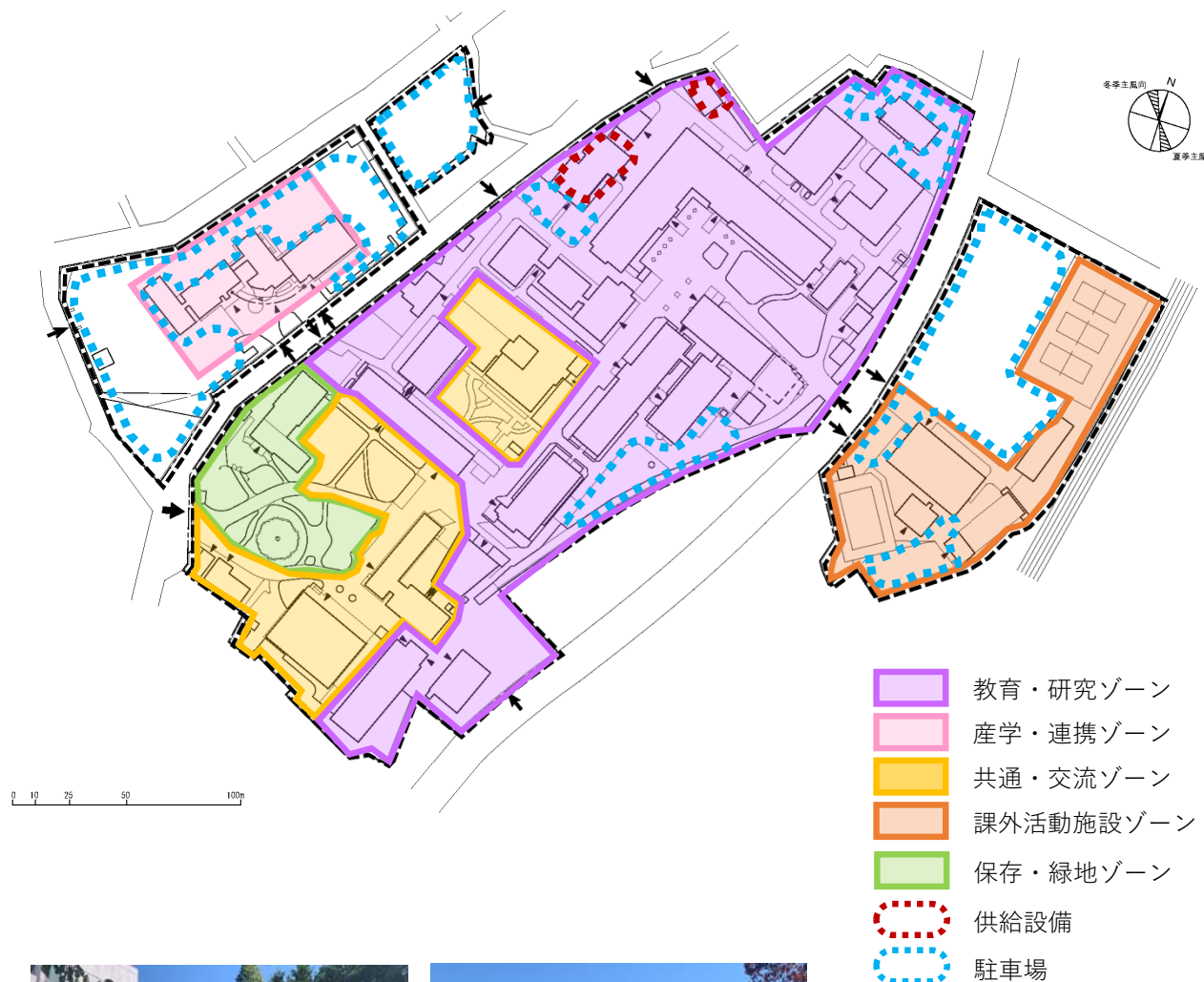
低層の病院施設

- 教育・研究ゾーン
- 産学・連携ゾーン
- 共通・交流ゾーン
- 課外活動施設ゾーン
- 附属病院ゾーン
- 供給設備
- 駐車場

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ゾーニング【桐生キャンパス】

- ・ キャンパス全体に中高層・低層の建物が散在し、建て詰まりとなっていることから、大規模な再整備を実施するためのスペースがない。
- ・ 産学・連携ゾーンは、道を挟んで離れた敷地にあり、教育・研究ゾーンとの有機的な繋がりが弱い。
- ・ 課外活動施設ゾーンは、プールやテニスコートの老朽化が進む中、今後の方針について検討が必要である。
- ・ 有形文化財でもある「工学部同窓記念館」は、重要伝統的建造物群保存地区に位置しており、また地域の観光スポットとなっていることから、伝統の継承が必要である。
- ・ 地域・社会との連携等の観点から、開かれたキャンパスを実現することが求められるが、外部の人が気軽に利用できるような仕組みや場所が少ない。



研究・産学ゾーン



テニスコート



課外活動施設



工学部同窓記念館



低層の施設（R I 実験施設）



低層の施設（研究推進支援センター）

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 動線・交通（駐車場・駐輪場含む）【荒牧キャンパス】

- ・ 駐車場の点在や歩車動線の分離が不十分なため、車両動線と歩行動線が交差する箇所が構内に複数存在し、歩行者の利便性や安全性に欠ける。
- ・ 正門周辺に職員駐車場が集中しており、通学・通勤時間帯に車両と歩行者・自転車との交差が生じ、キャンパス外まで渋滞が発生している。
- ・ 無断駐車などによる駐車場の不足が発生しており、駐車場の適正化及びゲートなどによる入構規制の検討を進める必要がある。
- ・ 車両道路に減速のための段差が設置されているが、雨天時に路面が濡れていると自転車やバイクが滑りやすく危険である。
- ・ 自転車道が整備されておらず、駐輪場も散在していることから、歩道の走行や自転車の危険な追い越しなどが発生している。



車両・歩行動線の交差箇所①



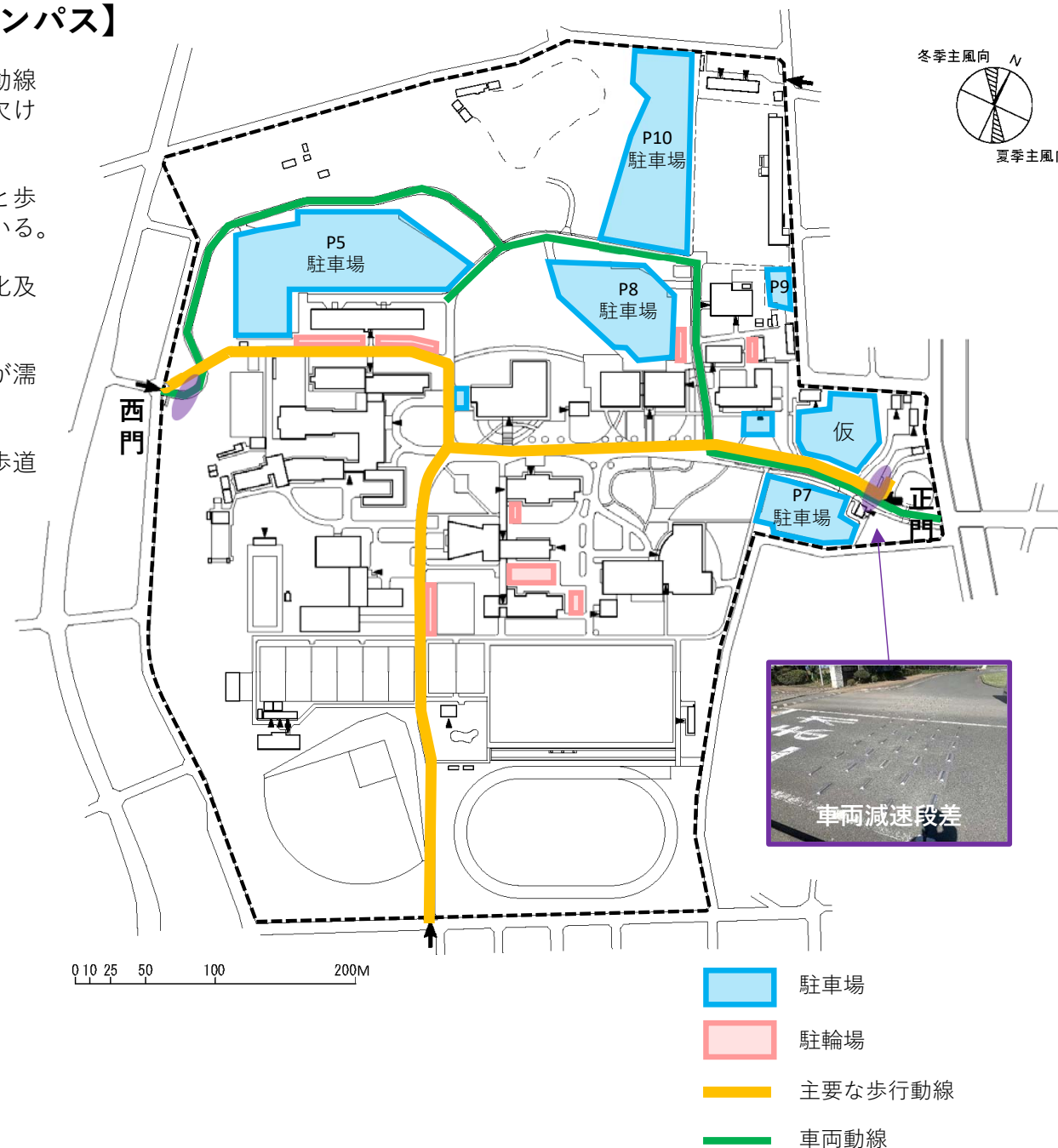
車両・歩行動線の交差箇所②



P 8 駐車場



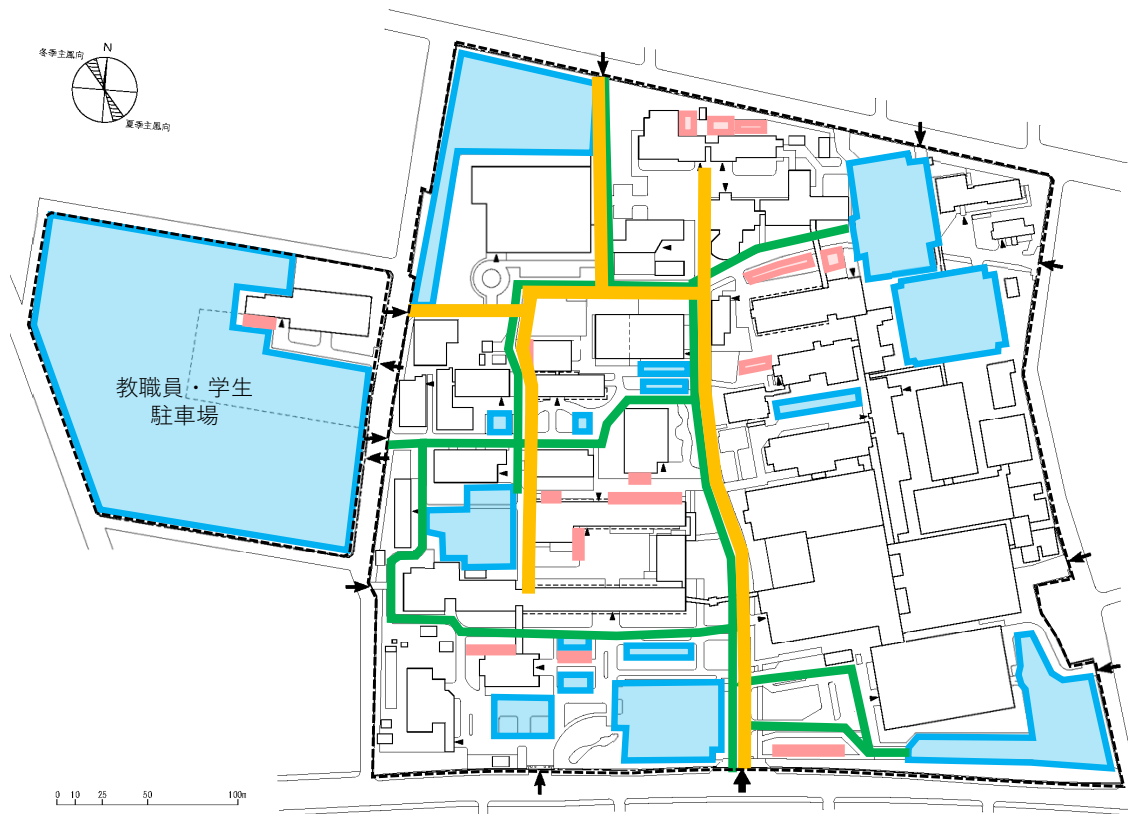
P 1 0 駐車場(スペース不足)
※一部通路に駐車



(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 動線・交通（駐車場・駐輪場含む）【昭和キャンパス】

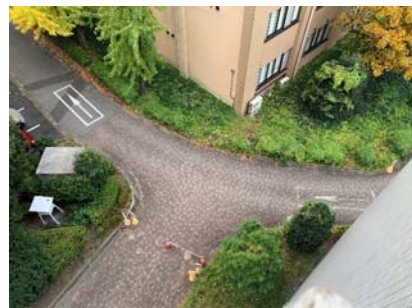
- ・ キャンパス内は駐車場が散在し、構内道路も狭く、複雑な導線となっており、キャンパスの景観を阻害している。
- ・ 歩行者専用の動線はほとんどなく、車両動線と歩行動線が交差する箇所が構内に複数存在し危険なことから、車両動線との分離が課題となっている。
- ・ 教職員・学生の駐車場は慢性的に不足しており、近隣の商業施設等の駐車場を借用して不足分に充当している。
- ・ 附属病院外来者用は、前面道路の渋滞を避けるため、構内中央道路を駐車待ち待機スペースとして利用している。
- ・ 駐輪場は建物ごとに設置され、非効率となっている。
- ・ 自転車道が整備されておらず、駐輪場も散在していることから、歩道の走行や自転車の危険な追い越しなどが発生している。



構内に散在する駐車場



狭く歩道のない車両道路①



狭く歩道のない車両道路②



車両・歩行動線の交差箇所



教職員・学生 駐車場



構内中央道路



(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 動線・交通（駐車場・駐輪場含む）【桐生キャンパス】

- ・ キャンパス内は駐車場が散在し、構内道路は一方通行（正門から入り北西より出庫）と不便である。
- ・ 構内の歩行動線と車両動線が分離しておらず、車両動線と歩行動線が交差する箇所が構内に複数存在し危険なことから、動線の分離が課題となっている。
- ・ 駐輪場は建物毎に設置され、非効率となっており、屋根のない駐輪場も存在している。
- ・ 車の出入りが激しい正門から1号館については、インターロッキングが沈んでいる箇所が多く、雨天時には多くの水たまりができてしまい、劣化が激しい状況である。



構内に散在する駐車場
(車両は一方通行)



車両・歩行動線分離なし①



車両・歩行動線分離なし②(正門)



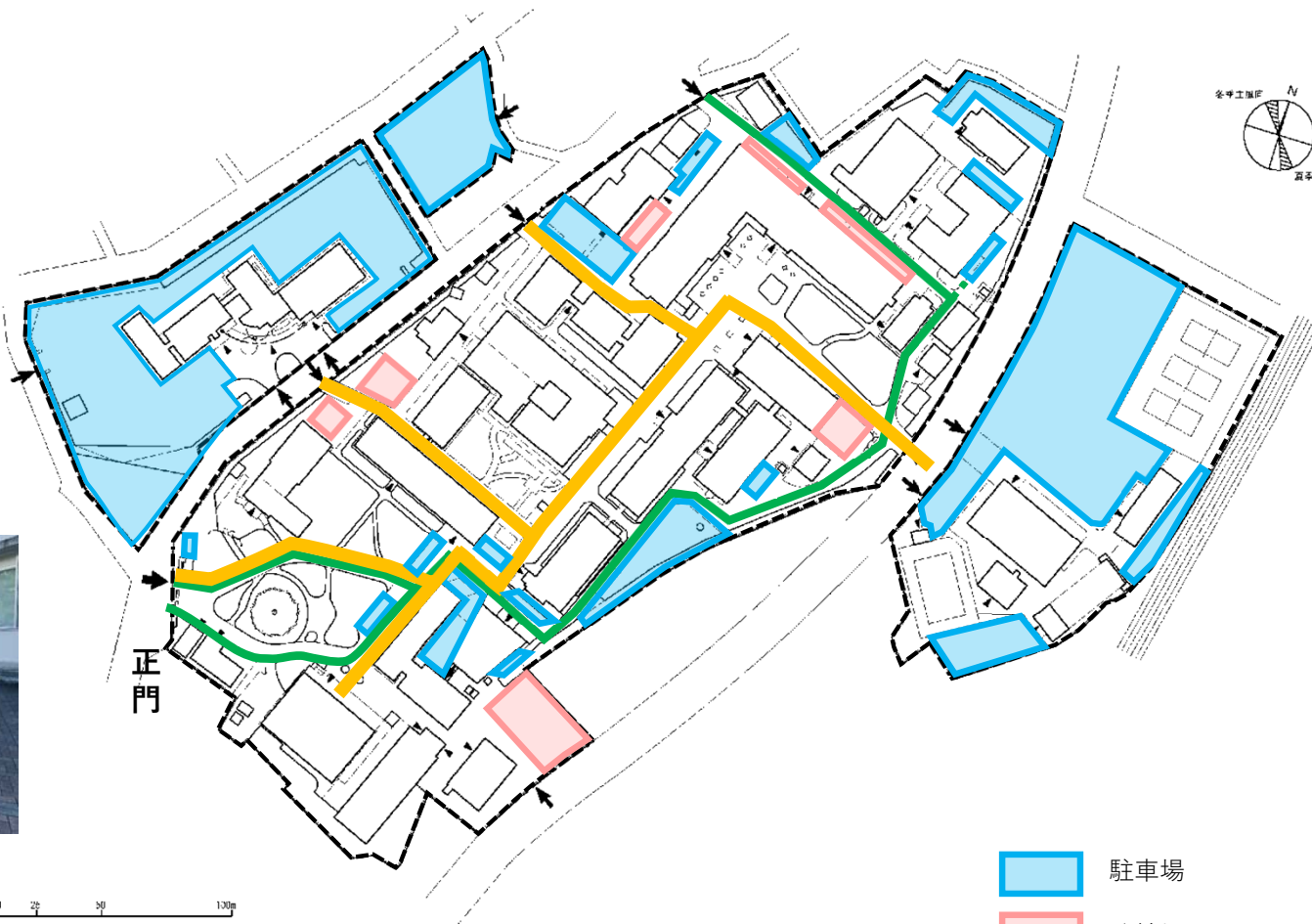
車両・歩行動線の交差箇所



駐輪場(屋根なし)



インターロッキングのへこみ



- 駐車場
- 駐輪場
- 歩行動線
- 車両動線

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 緑地・広場・パブリックスペース【荒牧キャンパス】

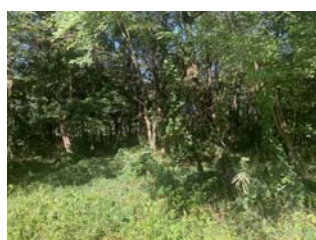
- ・ キャンパス中央部に「憩いの広場」や「中央モール」を配置しており、交流の場となっているが、必要とされる広場の整備や維持管理が実現しておらず、十分な活用がされていない。
- ・ 敷地に対する緑地の割合が全団地の中で最も多く、西・南側の敷地境界は松林や樹木で取り囲んでおり、キャンパスに対して閉鎖的な印象を与えている。
- ・ 広大な緑地やウッドチップを敷いた遊歩道の維持管理が行き届いておらず、スズメバチや蜘蛛の巣等の害虫被害も発生し、景観の阻害のみならず、危険箇所も見受けられる。
- ・ キャンパス内の膨大な数の樹木は、秋から冬に落ち葉で歩行動線を埋めつくし、キャンパス内だけでなく近隣の景観や安全な歩行・自転車走行を阻害している。
- ・ 大木が多く存在しており、死角や外灯を覆い動線への影響が生じていることなどから、計画的な剪定を行う必要がある。
- ・ 街路樹等が根上がりし、アスファルトやインターロッキング等の舗装を持ち上げ、歩道が危険な状態になっている箇所がある。



憩いの広場



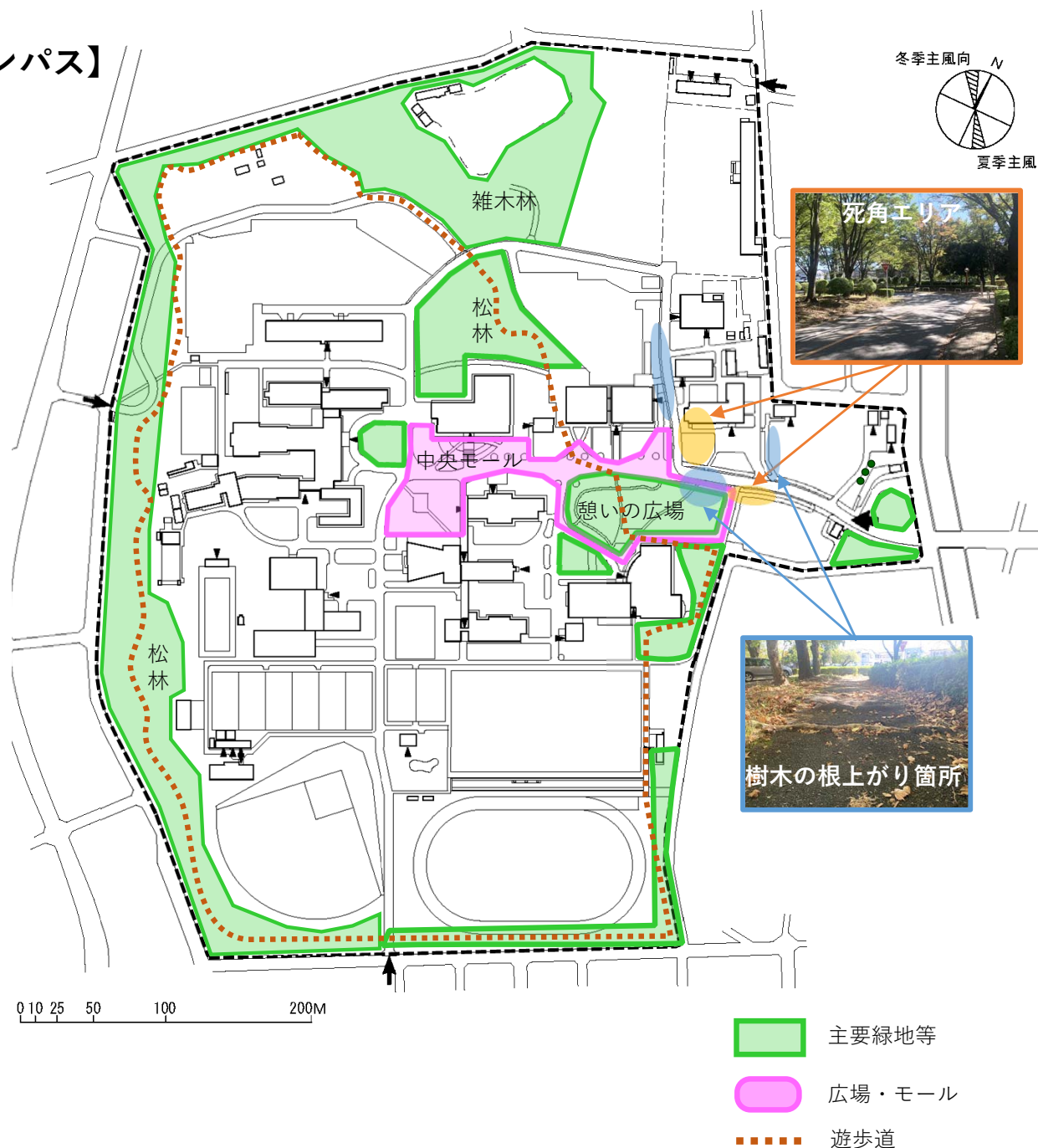
中央モール



放置された雑木林



点字ブロック上の落ち葉



- 主要緑地等
- 広場・モール
- 遊歩道

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 緑地・広場・パブリックスペース【昭和キャンパス】

- ・ キャンパスのパブリックスペースは、建物群ごとに点在しており、キャンパスの象徴となるようなスペースがない。
- ・ 大木が多く存在し、計画的な剪定を行う必要がある。
- ・ 学部エリアについては樹木でキャンパス周辺を取り囲んでいることから、キャンパスに対して閉鎖的な印象を与えている。
- ・ 街路樹等が根上がりし、アスファルトやインターロッキング等の舗装を持ち上げ、歩道が危険な状態になっている箇所がある。



広場（北）



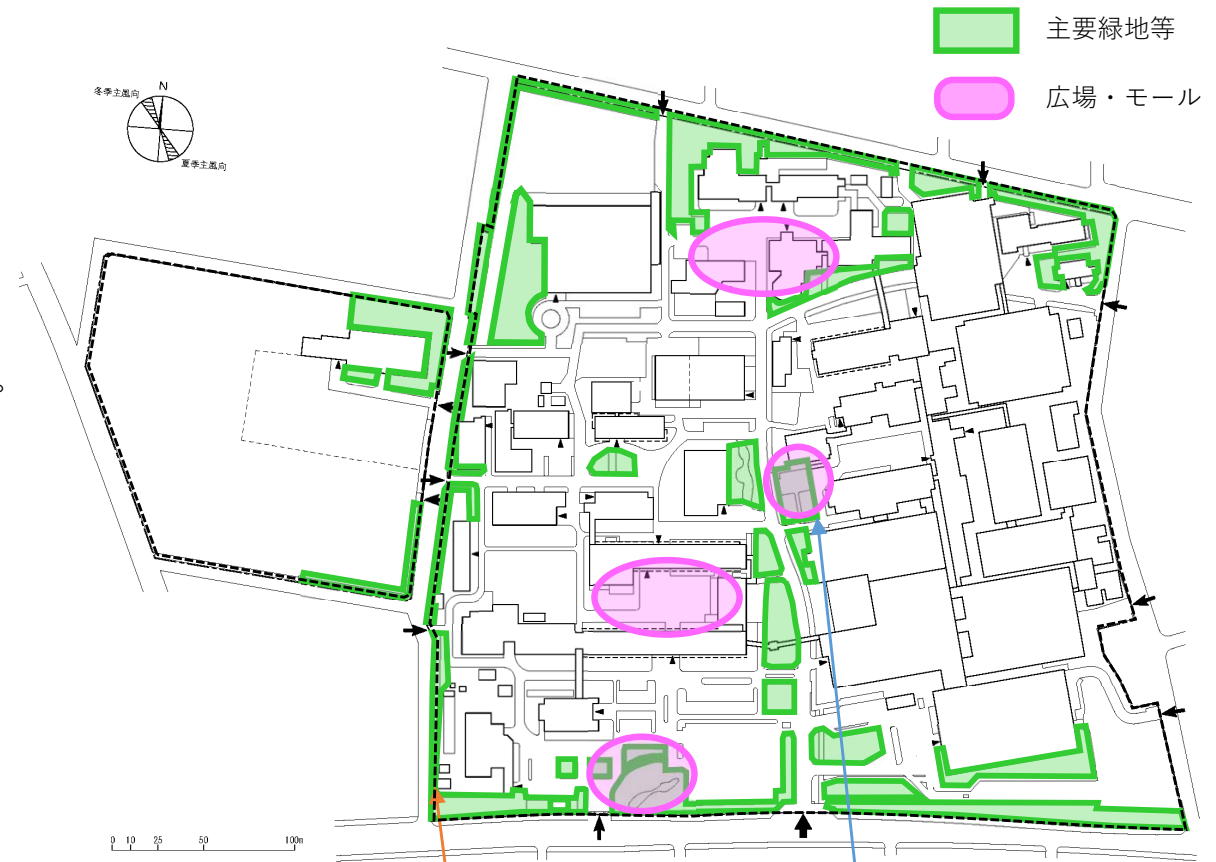
広場（中央東）



広場（中央西）



広場（南）



学部エリアを取り囲む樹木



樹木の根上がり箇所

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ 緑地・広場・パブリックスペース【桐生キャンパス】

- ・ 正門付近の広場や中央モールを設置しており、交流の場となっているが、必要とされる広場の整備や維持管理が実現しておらず、十分な活用がされていない。
- ・ 正門付近の池周りについて、しだれ桜などの歴史的経緯のある自然景観が存在しているが、寿命が近づいており、植樹も含めた計画的な検討が必要である。
- ・ 樹木でキャンパス周辺を取り囲んでいることから、キャンパスに対して閉鎖的な印象を与えている。
- ・ 中央モールの左右に高層の建物が並んでおり、圧迫感のある空間となっている。



正門付近の広場



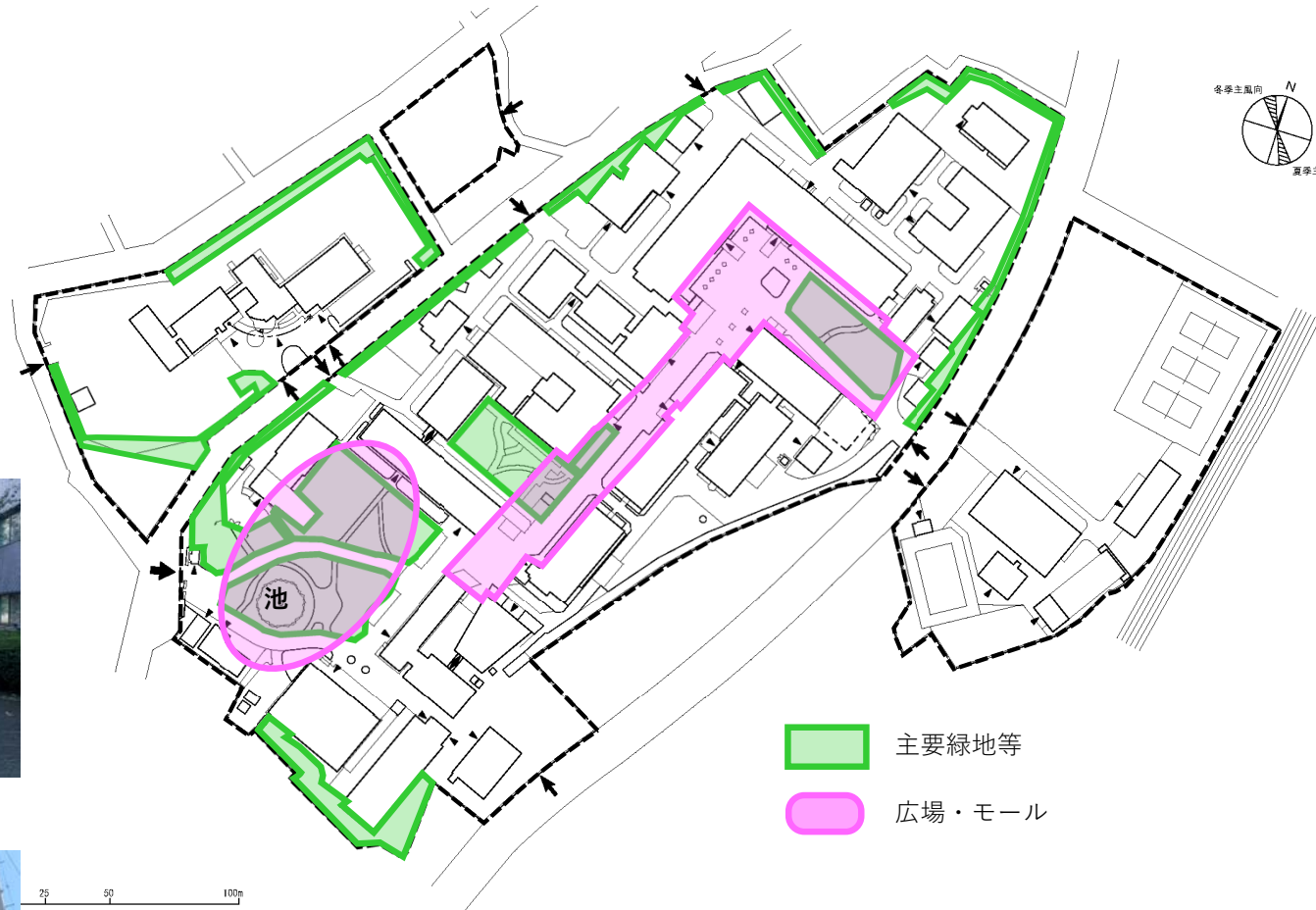
中央モール



正門付近の池周り



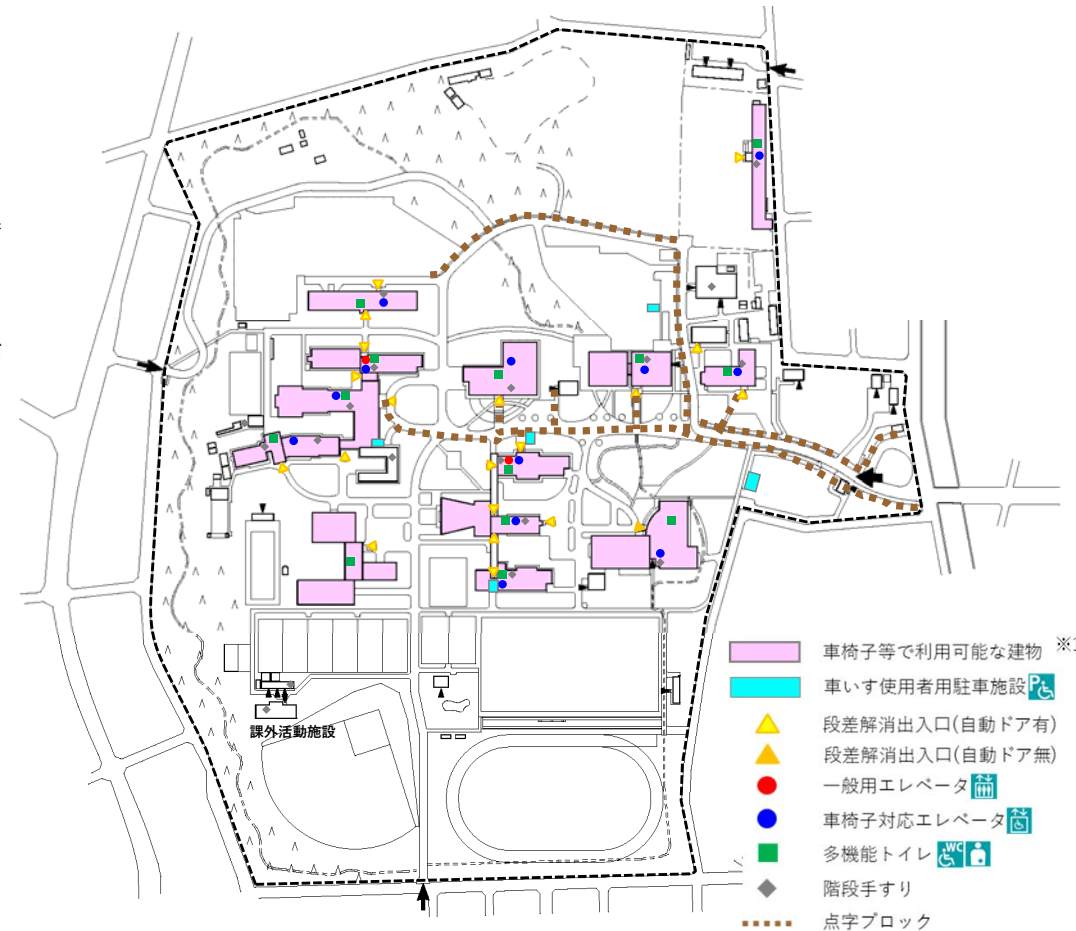
敷地境界の樹木



(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ユニバーサルデザイン①【荒牧キャンパス】

- 主要な建物は、大規模改修時に玄関の自動ドア化、スロープ、手摺り、エレベーター（低層階を含む）、多機能トイレ等について、整備がされている。
- 講義室の出入り口には引戸を採用、ジェンダーレスに対応したトイレの整備など屋内のバリアフリー化、ダイバーシティ化に向けた整備を進めている。
- 体育館や課外活動施設等、バリアフリー化が進んでいない場所があるなど、建物によって整備状況にばらつきがあるため、全体的な整備計画・検討等が必要である。
- 点字誘導がない歩道や、点字誘導が途切れたり、剥がれたりしている箇所もあるほか、車いす使用者用駐車施設は学生・来客用として屋外空間の適切な維持管理や整備が進んでいない状況である。
- 車いす使用者用駐車施設は整備しているものの、看板などの掲示が不十分な箇所が存在するなど、利用者に十分な情報提供ができていない。



※1 自動ドア付の段差解消出入口、車椅子対応エレベータ、多機能トイレを有し、さらに廊下等段差を解消した建物



多機能トイレ



車椅子対応エレベータ



出入口のスロープ



スロープなし(課外活動施設)



点字ブロックの劣化



車いす使用者用駐車施設

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ユニバーサルデザイン②(サイン)【荒牧キャンパス】



キャンパス全体案内図(正門設置)



1～3号館案内図(屋内設置)



共同教育学部案内図(屋外設置)



統一性のない案内標識 (一部日本語のみ)



建物入り口に設置された建物名称プレート



日本語のみで説明された「ご利用案内」、「注意事項」、「使用心得」

- ・ キャンパス構内図は正門入口に整備しているものの、キャンパス内の案内板等が少なく構内の情報が少ない。
- ・ 各場所に設置されている案内図および案内標識はデザインに統一性がない。さらに日本語表記のみの説明もいまだに多く、グローバル化に対応できていない。
- ・ 案内図の設置位置は屋内外設置で統一されていないため、初めて訪れる人にとってわかりやすい設置位置や案内図の集約化について検討する必要がある。
- ・ 建物入り口に設置の建物名称が記載されたプレートは統一されたデザインである一方で、日本語表記のみである。
- ・ キャンパス全体的に日本語説明が圧倒的に多く、シンボル化表記や多言語表記のサインデザインが少ないため、グローバル化に対応しにくい閉鎖的な印象を与えるサインデザインとなっている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ユニバーサルデザイン①【昭和キャンパス】

- ・ 主要な建物は、大規模改修時に玄関の自動ドア化、スロープ、手摺り、エレベーター（低層階を含む）、多機能トイレ等について、整備を進めてきた。
- ・ 学生食堂、体育館、課外活動施設等、バリアフリー化が進んでいない場所や、建物によって整備状況にばらつきがあるため、ダイバーシティへの配慮も含めた全体的な整備計画・検討等が必要である。
- ・ 点字誘導は正門～外来診療棟、敷地内バス停～外来診療棟まで整備しているが、車両動線と交差する箇所があり危険である。
- ・ 車いす使用者用駐車施設は、病院出入口を中心に50台分確保している。



屋内スロープ



出入口のスロープ



車椅子対応エレベータ



スロープなし(課外活動施設)



点字ブロックと車両動線の交差



車いす使用者用駐車施設

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ユニバーサルデザイン②(サイン)【昭和キャンパス】



キャンパス全体案内図(正門設置)



アメニティモール案内図



ロータリー内通行案内図



統一性のない案内標識 (日本語のみ)



建物入り口に設置された建物名称プレート



日本語のみで説明された「案内」、「看板①」、「看板②」

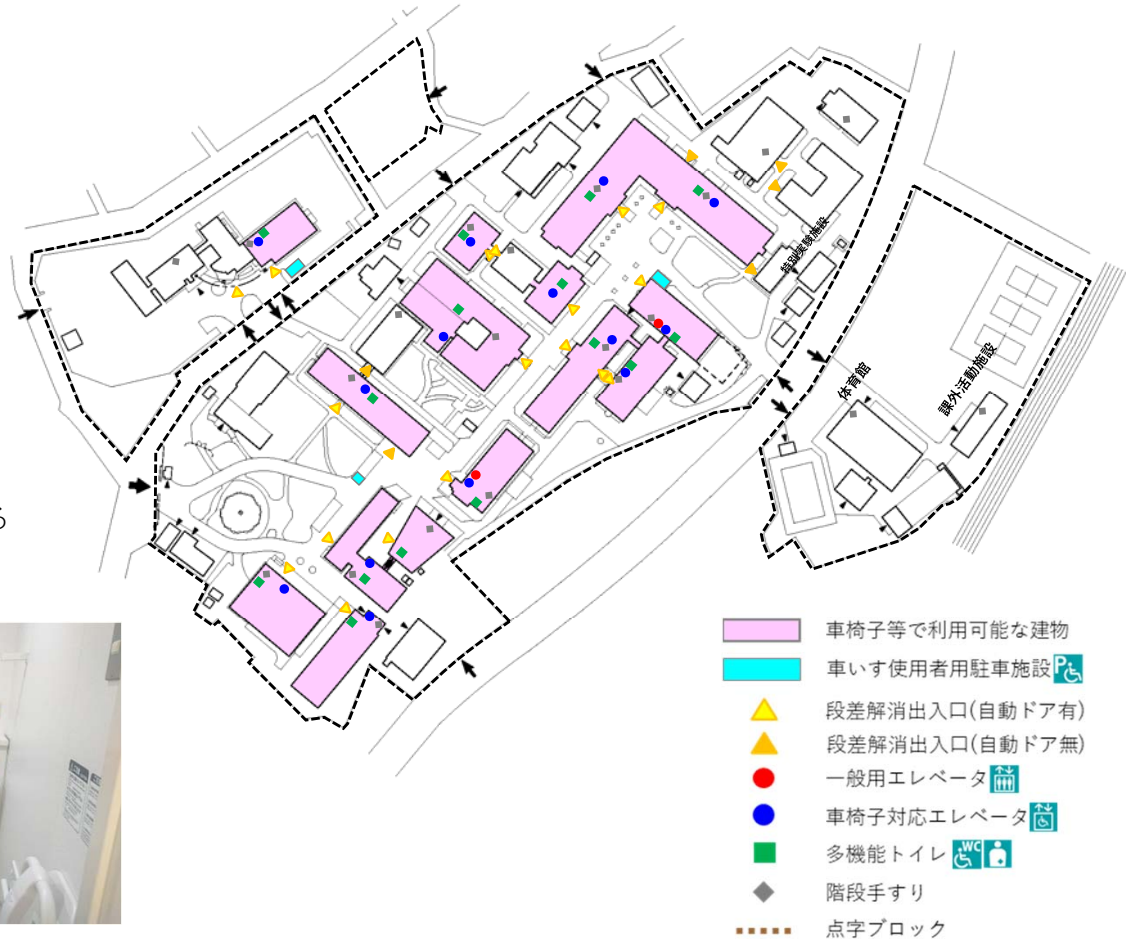


- ・ キャンパス構内図は正門入口をはじめ3箇所整備しているものの、キャンパス内の案内板等が少なく構内の情報が少ない。
- ・ 各場所に設置されている案内図および案内標識はデザインに統一性がない。さらに日本語表記のみの説明もいまだに多く、グローバル化に対応できていない。
- ・ 案内図の設置位置は屋内外設置で統一されていないため、初めて訪れる人にとってわかりやすい設置位置や案内図の集約化について検討する必要がある。
- ・ 建物入り口に設置の建物名称が記載されたプレートはほとんど統一されておらず、さらには日本語表記のみである。
- ・ キャンパス全体的に日本語説明が圧倒的に多く、シンボル化表記や多言語表記のサインデザインが少ないため、グローバル化に対応しにくい閉鎖的な印象を与えるサインデザインとなっている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ユニバーサルデザイン①【桐生キャンパス】

- ・ 主要な建物は、大規模改修時に玄関の自動ドア化、スロープ、手摺り、エレベーター（低層階を含む）、多機能トイレ等について、整備を進めてきた。
- ・ 特別実験棟、体育館、課外活動施設等、バリアフリー化が進んでいない場所や、建物によってバリアフリー化の整備状況にばらつきがみられるため、ダイバーシティへの配慮も含めた全体的な整備計画・検討等が必要である。
- ・ 点字誘導は未整備の状況である。
- ・ 車いす使用者用駐車施設は、教職員・来客用として5台分を確保しているが、学生駐車場には確保出来ていない。



自動ドア



多機能トイレ



出入口のスロープ



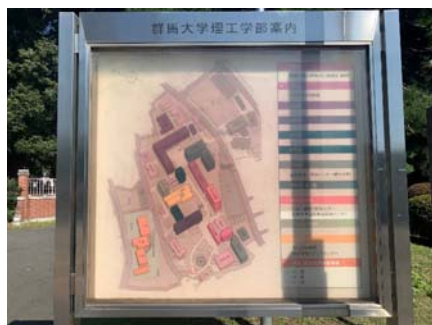
スロープなし(体育館)



車いす使用者用駐車施設

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ ユニバーサルデザイン②(サイン)【桐生キャンパス】



キャンパス全体案内図(正門設置)



2号館電子情報理工学科案内図



3号館電気電子棟フロアマップ



案内標識のないキャンパス



建物入り口に設置された建物名称プレート



日本語のみで説明された「看板①」、「看板①看板②」、「案内」

- ・ キャンパス構内図は正門入口をはじめ3箇所整備しているものの、キャンパス内の案内板等が少なく構内の情報が少ない。
- ・ 正門や各建物出入口に設置されている案内図はデザインに統一性がない。また正門の案内図から各建物までの歩行導線上に案内標識などが見当たらず、初めて訪れる人にとって各建物の場所がわかりにくく迷いやすい。
- ・ 日本語表記のみの説明もいまだに多く、グローバル化に対応できていない。
- ・ 案内図や標識について初めて訪れる多様な人々にとってわかりやすい設置位置および集約化について検討する必要がある。
- ・ 建物入り口に設置の建物名称が記載されたプレートは統一されたデザインである一方で、設置していない建物もあり、さらに日本語表記のみである。
- ・ キャンパス全体的に日本語説明が圧倒的に多く、シンボル化表記や多言語表記のサインデザインが少ないため、グローバル化に対応しにくい閉鎖的な印象を与えるサインデザインとなっている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスデザイン①（周辺地域との調和）【荒牧キャンパス】



キャンパス北東に位置する赤城山



キャンパス北西に位置する榛名山



境界樹木による眺望阻害①



境界樹木による眺望阻害②



キャンパス北側の高所用水路



敷地境界フェンス(ツタ放置)



敷地境界フェンス(塗装剥がれ)

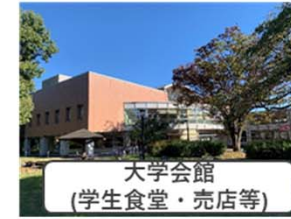
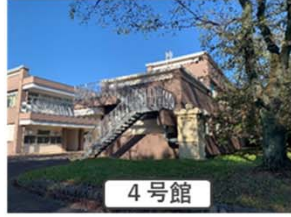
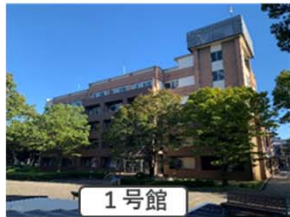


敷地境界フェンス(凹み放置)

- ・ キャンパスの周りには群馬県の象徴である赤城山や榛名山といった上毛三山があり、キャンパス内外からの眺望確保が求められるが、敷地境界の背の高い樹木により、一部の近隣住民の眺望だけでなく日照も阻害している。
- ・ キャンパス敷地境界は北側の高所を流れる用水路とキャンパス全体を囲っているフェンスにより、正門西門以外からの出入りが不可能となっており、近隣住民がキャンパス内パブリックスペースにアクセスしにくい閉鎖的なデザインとなっている。
- ・ キャンパス敷地境界は自然あふれる草樹であふれ、地域の中の貴重な緑地エリアとなっている一方で、十分な手入れが行き届いておらず、フェンスに巻き付き放置されたツタなどが地域の景観を阻害している。さらには敷地を取り囲んでいるフェンスについては放置されたままの塗装剥がれや凹みが一部見受けられ、同様に地域の景観を阻害している。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスデザイン② (構内) 【荒牧キャンパス】



地上設置の空調室外機①



地上設置の空調室外機②



外灯①



外灯②



外灯③



外灯④

- 主要な建物はすべてホワイトとブラウン（レンガ色）を基調とした外観となっており、統一性に配慮されたキャンパスデザインとなっているが、一部の未改修建物においてデザインの異なる建物も存在するため、改修と同時に外観デザインも検討する必要がある。
- 敷地境界付近に高層建物がないため、キャンパス内の建物により近隣住民への日照は阻害していない。
- 一部の建物において空調室外機が建物外地上に複数台設置されており、配管配線の目隠しもなくキャンパス内景観を阻害している。
- キャンパス内の外灯は設置時期によりデザインや高さが異なり、統一性に配慮されていない。主要な歩行動線において、庭園灯や高さの違う外灯の採用による明暗差が生じており、暗い印象を与えている。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスデザイン①（周辺地域との調和）【昭和キャンパス】



キャンパス北東に位置する赤城山



キャンパス北西に位置する榛名山



境界樹木による眺望阻害①



境界樹木による眺望阻害②



敷地境界フェンス①



敷地境界フェンス②



敷地境界フェンス③



境界樹木による公道への落ち葉

- ・ キャンパスの周りには群馬県の象徴である赤城山や榛名山といった上毛三山があり、キャンパス内外からの眺望確保が求められるが、キャンパス内の高層建物や背の高い樹木により、一部の近隣住民の眺望だけでなく日照も阻害している。
- ・ キャンパスは出入り口の門以外フェンスで囲われており、閉鎖的な印象を与えるデザインとなっているが、附属病院の一部エリアにおいては背の低いフェンスを設置しており、主要3キャンパスの中では比較的地域住民に対してオープンなデザインとなっている。
- ・ 敷地境界に多数の樹木を有しており、眺望・日照の阻害に加え秋から冬にかけては公道へ落ち葉を散布させ、街の景観を阻害している。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスデザイン② (構内) 【昭和キャンパス】



附属病院施設



医学科・研究施設



保健学科施設

共通利用施設

- 全キャンパスの中で建ぺい率・容積率が最も高く、キャンパス内は建物が密集し、窮屈な印象を与えるデザインとなっている。
- 主要な建物は、建物用途に合わせ分別すると比較的統一性に考慮したキャンパスデザインとなっているが、一部の建物においてデザインの異なる建物も存在し、改修と同時に外観デザインも検討する必要がある。またキャンパス全体の建物外観デザインの方針についてもあわせて検討する必要がある。
- 敷地境界付近に高層建物は少ない一方、キャンパス内の高層建物が分散して配置しているため、キャンパス内からの眺望はあまりよくない。
- 歩行動線周辺の一部の建物において、空調室外機が建物外地上に複数台設置されていたり、配管配線の目隠しもなくキャンパス内景観を阻害している。
- キャンパス内の街灯は設置時期によりデザインや高さが異なり、統一性に配慮されていない。



地上設置の空調室外機



外灯①～④

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスデザイン①(周辺地域との調和)【桐生キャンパス】



キャンパス北西に位置する赤城山



正門前の歴史的な街なみ



同窓記念会館



桐生キャンパス正門・守衛所



正門近くの保存緑地広場



道路沿いの敷地境界フェンス



敷地境界フェンス(簡易針金)



敷地境界フェンス(ツタ放置)

- 桐生市は多くの歴史的・文化的な建物を保有している一方で、キャンパスの北西には群馬県の象徴である赤城山もあり、周辺地域の景観および眺望のバランスを考慮したキャンパスデザインが求められる。
- キャンパス内正門近くに位置している同窓記念会館、旧桐生高等染織学校正門、守衛所の3施設は国登録有形文化財に指定されており、今後も多様な人が訪れる歴史建造物であることを踏まえ、継承のための保全とキャンパス調和バランスを検討する必要がある。
- 正門近くに国登録有形文化財の景観に合わせた自然あふれる保存緑地広場を配置しており、文化財とともに多くの人々が訪れ、交流するための場として整備されている。
- キャンパスは出入り口の門以外をフェンスで囲っており、主要の道路沿いは低いフェンスを設置するなど景観を意識しているものの、一部フェンスが地域の景観を阻害している。

(3) 主要キャンパスの現状・課題

◆ キャンパスデザイン② (構内) 【桐生キャンパス】



- 主要な建物はすべてホワイトを基調とした外観とタイル貼りの外観で二極化されており、キャンパス全体の外観デザイン統一性について再検討する必要がある。
- 総合研究棟や8号館S棟などのキャンパス境界付近の高層建物が近隣住民への眺望や日照を阻害している。
- 一部の建物において空調室外機が建物外地上に複数台設置されており、配管配線の目隠しもなくキャンパス内景観を阻害している。
- キャンパス内の街灯は設置時期によりデザインや高さが異なり、統一性に配慮されていない。



地上設置の空調室外機①



地上設置の空調室外機②



地上設置の空調室外機③



外灯①



外灯②



外灯③

4. フレームワークプラン

(1) フレームワークプランの目的・位置づけ

◆ フレームワークプランの背景・目的

キャンパスマスタープランの更新にあたっては、①施設整備5ヵ年計画などに基づいた時代の変化に対応し、積極的に整備を展開することが必要な柔軟性のある計画と、②保有する自然環境や歴史的資源など、今後も保存・維持し後世に引き継ぐべき対象及び継承すべき整備方針など、骨格となる部分を明らかにすることが必要となる。

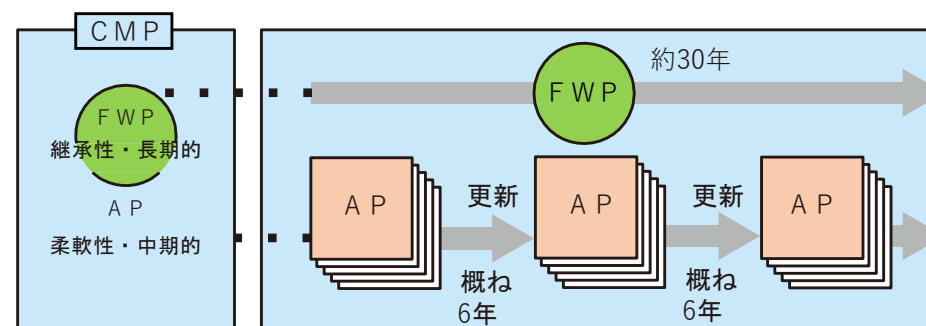
キャンパスを長期的視点から適切に計画・利用し、教育・研究の時代に合わせた社会的要請を効率的に実現するため、建物を個別に計画せず、キャンパス内を目的別・用途別に設定し、教育・研究効果や施設利用効率が高められるよう、増改築や既存施設の利用再編などを踏まえた計画とする。

◆ フレームワークプランの位置づけ

キャンパスマスタープランは継承性・長期的見地と柔軟性・中期的な性質が求められることから、それぞれの役割を2つに分けることにより、連続性のある施設整備を進めることが可能となる。

フレームワークプランは、継承性・長期的見地の役割を担い、統一性のある整備を継続するための骨格と位置づけるため、約30年後の将来を見据えた計画とする。

アクションプランは、フレームワークプランを実現するため、中期的な目下の実施計画として位置づけ、段階的な整備を進める。



※CMP：キャンパスマスタープラン

※FWP：フレームワークプラン

※AP：アクションプラン

図4-1 CMPとFWPの関係

(1) フレームワークプランの目的・位置づけ

◆ フレームワークプランの構成

フレームワークプランでは、全キャンパスに共通する基本方針として、機能強化・機能配置、ゾーニング、動線計画、交通計画等、骨格となる要素についての共通方針を定め、その共通方針に基づき各キャンパスのフレームワークプランを立案する。

フレームワークプラン（概ね30年後の将来を見据えた計画）

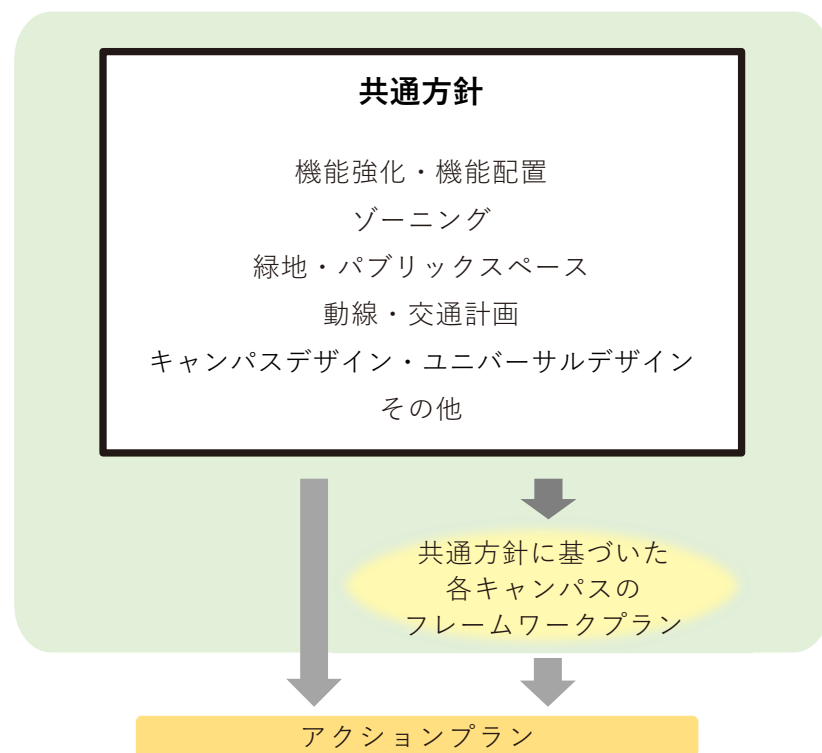


図4-2 フレームワークプランのイメージ

(2) フレームワークプランの共通方針

◆ 機能強化・建物配置の基本方針

① 教育・研究環境の質の向上

- ・ 教育・研究内容の高度化・多様化等に応じた対応が可能なよう、フレキシブルな教育環境の整備を進める。面積の拡大が必要になった場合は、既存施設の共同利用の促進や新規需要の重要性・優先順位等を十分に検討し対処する調和のとれたアカデミックな環境の醸成を図る。
- ・ 施設・環境整備にあたっては、「共創」拠点への転換に向け、既存施設の「有効活用」「リノベーション」「予防保全」を組み合わせた、戦略的リノベーションを検討・実施する。

② 建物相互の機能関連など利便性が高く、機能的で使いやすい合理的な計画

- ・ 建物の利用実態や建物相互の機能関連、人の移動状況等を踏まえ、利便性と機能性を向上させる施設配置とする。

③ 施設の集約配置・総量最適化

- ・ 効率的・効果的な管理運営を図る観点から、施設の集約的配置を計画する。
- ・ 安定した教育・研究空間の確保を維持するため、人口減少などの社会構造の変化等も考慮した保有施設の総量の最適化を図る。

④ 各キャンパスの有機的な繋がり確保

- ・ 増改築や改修時には、特殊な建物を除き共同利用スペースを一定量確保し、全学的な運用と共創の場として使用できる空間の確保を進める。
- ・ キャンパス内での有機的な繋がりだけでなく、各キャンパスとの有機的な繋がりを実現するため、大学の将来構想を踏まえたキャンパス再整備やDX等による、現実空間だけでなくデジタル空間も含め、あらゆる場での共創拠点の整備を進める。

(2) フレームワークプランの共通方針

◆ ゾーニングの基本方針

① キャンパスの核の設定

- ・ 屋内外を有機的につなぎ、将来にわたりキャンパスの中心となる部分を「キャンパスの核」として位置づけ、それを中心としたキャンパスごとの特徴を踏まえたゾーニング計画を行う。

② 将来需要や長期的視点にも柔軟に対応できるゾーニングの設定

- ・ ゾーン内での建て替えや更新など施設の再整備が可能なよう、一定の空地をとりながら、ゾーンごとの独立性を保持する。
- ・ 可変性のある教育・研究機能においては、多機能化などフレキシブルな活用を図る。

③ 各種施設の利用目的に基づく活動を踏まえたゾーンの設定

- ・ 教育・研究ゾーンの独立性を保ちながら、産学・連携施設や交流施設との連携が図りやすい隣接性を確保する。
- ・ 共通・交流ゾーンを中心とした有機的な繋がりを確保する。

④ 施設利用者への快適性の確保

- ・ 共通・交流ゾーンを中央に配置することで、キャンパス全体の空間イメージをわかりやすくし、他ゾーンとの接点を円滑にすることで利用者の快適性を確保する。
- ・ 一般開放する施設を教育・研究ゾーンに配置する場合は、共通・交流ゾーンに隣接させるか、教育・研究ゾーンの主要動線沿線に配置する。

⑤ 土地の有効活用の促進

- ・ キャンパスの敷地全体を一体的にとらえ、特定の教育・研究組織に捉われず、全学的な視点に立脚して土地の有効活用を図る。
- ・ アカデミックプランとの関連を踏まえた将来的な土地利用の必要性、現状施設の便益と維持費等について把握し、新たな活用の在り方について検討・実施する。



図4-3 各ゾーニング構成

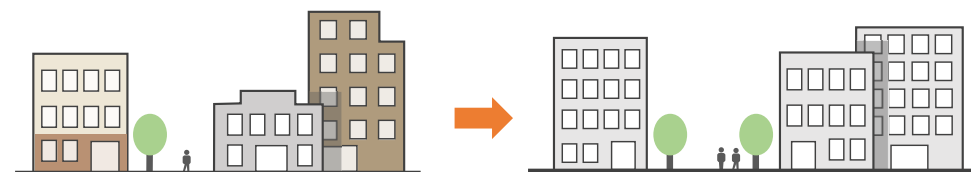
(2) フレームワークプランの共通方針

◆ 緑地・パブリックスペースの基本方針

- ① 地域環境との連続性や調和を考慮したランドスケープデザイン
 - ・ 地域につながる誘導空間の整備を進めるとともに地域になじむ景観の整備を進める。
- ② 多様な交流・コミュニケーションを生み出す空間計画
 - ・ 多様な効果を生み出す広場、モール、緑などの空間的要素の活用を図る。
 - ・ パブリックスペースは交流や休息の場として機能する重要な空間であるため、交流ゾーンを明確に分けることが重要であり配置に留意する。
 - ・ 共通・交流ゾーンにおけるパブリックスペースに加えて、教育・研究ゾーンにおける学生専用のオープンスペースや施設内コミュニティスペースを確保・整備する。
- ③ 緑地管理の推進
 - ・ キャンパスの緑地を敷地全体（建築面積を除く）のうち、20~30%確保する。
 - ・ 各キャンパスにおける生態環境の保全と創出を行うため、保存・緑地ゾーンを設け、「群馬大学緑地管理方針」に基づき、緑地管理を図る。
 - ・ 四季折々を感じる花木など各キャンパスの植栽の配置計画や敷地境界の基本的な考え方を示す。

◆ キャンパスデザイン・ユニバーサルデザインの基本方針

- ① 様々な利用者を想定したユニバーサルデザイン
 - ・ 建物内外の積極的なバリアフリー化や多様性に考慮した、全体的な整備の基本的な方針として「群馬大学施設のユニバーサルデザインガイドライン」を作成し、各キャンパスが統一性のある整備可能な計画を立案する。
 - ・ ダイバーシティの視点に配慮した、色彩や表示などのサイン計画を進める。
 - ・ グローバル人材を養成する多言語対応、異文化理解を進める空間を整備する。
 - ・ 初めてキャンパスを訪れる人にもわかりやすい案内図や標識を整備する。
 - ・ 屋外ダクト・配管、室外機、危険物の屋外保管庫などは、屋上への設置、植樹やルーバーによる目隠しなどで、歩行者の安全、周辺道路への景観に配慮する。
 - ・ 各キャンパスにおいてLGBTQ+に考慮したトイレや更衣室の整備を進めるなど、誰でも使いやすい施設整備を進める。
- ② 調和のとれたアカデミックな環境の醸成
 - ・ 建物デザイン、色調、高さ、壁面線等の調和の取れた景観形成を図るとともに、デザインの基本的な方針を定め、アカデミックな環境の醸成を図る。



デザイン、色調、高さ、
外装の素材などの統一化

(2) フレームワークプランの共通方針

◆ 動線・交通計画の基本方針

① 主要動線

- ・ 主要施設と附属施設間での往来が多い場合の動線を主要動線と位置づけ、各ゾーンの中央を貫通するように配置する。

② 機能をつなぎ教育・研究活動を支援する動線の形成

- ・ 教育・研究施設を結ぶ廊下やホール、アトリウムなどのオープンスペースを、より開かれた空間として整備し、学生や教職員の交流の活性化を促す動線を形成する。
- ・ 主要動線を中心となるモールについては、緊急時以外は自動車等の進入を原則禁止し、多様な集まりと交流活動を促すイノベーションに資する空間として整備する。
- ・ 建物相互の機能関連や交通状況等を踏まえて、明瞭性と利便性の高い動線計画とする。

③ 歩車分離を図るため、自動車等の進入可能区域の設定と駐車場・駐輪場の再整備

- ・ 構内の歩車道線の分離を確実に進めるため、自動車・自転車などの進入可能区域を設定し、安全性に配慮した動線を計画する。
- ・ 駐車場・駐輪場の適正化を図った上で、駐車場を集約的に配置するとともに、必要に応じたゲートの設置についての検討を進める。
- ・ 構内の各ゾーンへ緊急対応可能な車両が通行可能な動線を確保する。

◆ その他の基本方針

■ 防災・安全

- ・ キャンパスの一部を開放する一方で、屋内外の防犯対策を講じる必要があることから、セキュリティ機能や夜間照明、防犯カメラの設置などの整備方針を定める。
- ・ 耐震対策や水害対策など、災害時にも必要最低限の活動が維持できるような施設やインフラ設備の強化や冗長化等を進める。
- ・ 地震や津波、洪水等の自然災害リスクが相対的に低いという群馬県の強みを活かし、大規模災害等に首都圏や地域に対する支援可能な医療・教育・研究機能の確保を図る。

■ インフラストラクチャー

- ・ 「インフラ長寿化計画」に基づき、教育研究活動不可欠な電力、給排水、ガス、情報通信、空調等を計画的な老朽改善整備を進める。
- ・ 電力・給水・情報通信等の敷設は、共同溝を主とし、土中埋設を最小限とする。
- ・ 電力及び情報通信等の整備では、主幹線の二重化、将来計画を考慮した容量の選定、非常時に対応可能なバックアップ体制の強化を図る。
- ・ 給排水及びガス設備の整備では、耐震性の優れた配管の採用、将来計画を考慮した管サイズの選定等を行う。

(3) イノベーション・commonsに向けた全学の方向性について

「イノベーション・commons」とは、ハード・ソフトの取組が一体となり、あらゆる分野、あらゆる場面で、様々なステークホルダーが共創できる拠点であり、キャンパス全体が有機的に連携して共創活動を実現できる場のことをいう。

本学においてもイノベーション・commonsの実現に向け、学生、教職員だけでなく行政・産業界・市民など含めた様々なステークホルダーが集い・交流し・対話を行うことが出来るキャンパス空間を作るため、以下の「イノベーション・commonsの実現に向けた整備についての考え方」を踏まえ、キャンパスごとのイノベーション・commonsを具体的な検討を行うこととする。

◆ イノベーション・commonsの実現に向けた整備の考え方について

- ・ アクティブラーニングスペースやオープンラボのようなオープンでフレキシブルな空間や、地域連携活動の拠点となる施設の整備
- ・ 図書館や食堂、福利施設や屋外空間などの日常的な交流の場も含めた学内外のステークホルダーの対話・交流を誘発する空間づくりの形成
- ・ 対面だけでなく、デジタル技術も応用したオンラインによるコミュニケーションも可能な空間づくりの整備を図る
- ・ 戦略的リノベーションや、建物の効率的な集約化に伴う改築などの整備を行うことにより、段階的にキャンパス全体をイノベーション・commonsへと転換する
- ・ 多様な人勢が集まることで革新的・創造的アイデアが生まれ、新しい価値が創造されるようダイバーシティ、アクセシビリティなどにも配慮した環境づくり



令和4年10月国立大学法人等の施設整備の推進に関する調査研究協力者会議
「イノベーション・commons（共創拠点）」の実現に向けて」より引用

図4-4 「イノベーション・commons」の整備イメージ

◆ 各キャンパスでの共創の場

荒牧キャンパス
10号館

教育・研究の共創の場

- ・ワークスペース
- ・コミュニケーションモール
- ・オープンラボ
- ・展示スペース

桐生キャンパス
総合研究棟他

地域一体化型実践的教育プログラム※1

※1

「未来創生塾」

2012年より実施している地域一体化のSTEAM教育。感性豊かなイノベーション人材の育成と地域創生を目的として、主に小学生とその保護者を対象とした産学官民一体化による実践教育を行っている。

荒牧キャンパス
大学会館

異分野交流スペース
オープンスペース

太田キャンパス



リカレント教育

地域にひらくキャンパス

地域交流

人材育成

先端的研究拠点

地域産業振興の拠点

昭和キャンパス
プロジェクト棟他

競争的研究スペース

荒牧キャンパス
CRANTS

学内実証実験スペース
自動運転試験路

各キャンパスに点在する共創拠点を足がかりに、キャンパスごとにキャンパス全体のイノベーション・コモンズ化に向けて検討を進める。

◆ 群馬大学と地域との「共創」拠点

群馬県

■ 群馬県庁「NETSUGEN」



群馬県の事業として整備された官民共創スペース

- ・ コワーキングスペース
- ・ セミナー・授業・交流事業の実施

個人の利用に限らず、セミナーの開催や参加も可能で、地域の課題解決など新たなアイデアが生まれる場として利用している。

前橋市

■ 前橋商工会議所会館



「ぐんま未来イノベーション会議」の開催

群馬県において産・学・官・金が互いに連携し官民共創コミュニティの実現を図り、地域力の向上、イノベーションの加速によって、地域社会および経済を活性化させることを目的とし、毎年度開催している。

太田市

■ 群馬大学太田キャンパス



地場産業に直結した太田市や企業との共同研究や地域交流拠点

- ・ 企業との共同研究講座の設立
- ・ 地域や子供等への公開講座の実施

市民と学生と研究者が共存し、新しいアイデアを生み出せるような伸び伸びとした開放的な施設。

桐生市

■ 桐生キャンパス周辺地域



「群馬大学と桐生市の相互友好および連携協力に関する包括協定」により、市の重要施策や地域の活性化に寄与する群馬大学の研究や活動を支援するため、桐生キャンパス北側の跡利用敷地の具体的な利用について市と協議・検討を進めている。

■ 地域貢献シンポジウム

平成17年度から地域・自治体に向けたシンポジウムを大学構内外の施設やオンライン等を用いて毎年度開催。基調講演やパネルディスカッション等、大学が組織的に取り組んできた地域貢献活動の理解や実施事業の評価、意見交換等を行っている。

(4) 荒牧キャンパスのフレームワークプラン

◆ ゾーニング計画 ～30年後のビジョン～

30年後の荒牧キャンパスは、主要な建物が「改築」時期を迎えることから、キャンパス全体の建ぺい率を抑えつつ、駐車場・保存緑地の集約化を図り、現在の広大でやや分散的なキャンパスの空間構成を、個々の個性を生かしつつ、まとまりを持ったキャンパス空間として形成する。

文理融合施設として整備を進めている10号館を教育・研究の「共創」のランドマークとして位置づけ、コミュニケーションモールや共同研究スペースなどを中心に産学・連携拠点や既存施設との連携を進め、多分野との交流拠点のハブとして機能させる。改築等に合わせ、学際的・横断的な教育・研究を効率的に利用可能なよう、集約化及び中高層化を図る。

共通・交流ゾーンのうち、キャンパス正門付近は地域との交流を生み出す場として定義付け、地域共創のための整備を進める。また、様々な人が集まる施設郡（講義室、図書館や大学会館等）をキャンパスの中央部に配置させ、地域社会も含めた交流・連携を図る。

駐車場・将来構想ゾーンをキャンパス北側に設け、駐車場の集約化や、土地の有効活用の推進を行う場として活用する。

保存林・保存緑地をキャンパス西側に集約させ、自然豊かな環境を通じた地域に開いた環境空間を図る。

農場等の屋外の教育・研究スペースについては、その特性を踏まえて、保存・緑地ゾーンや教育・研究ゾーン内での集約化を行い、学部等の垣根を越えた屋外での教育・研究活動の展開できる空間として整備していく。



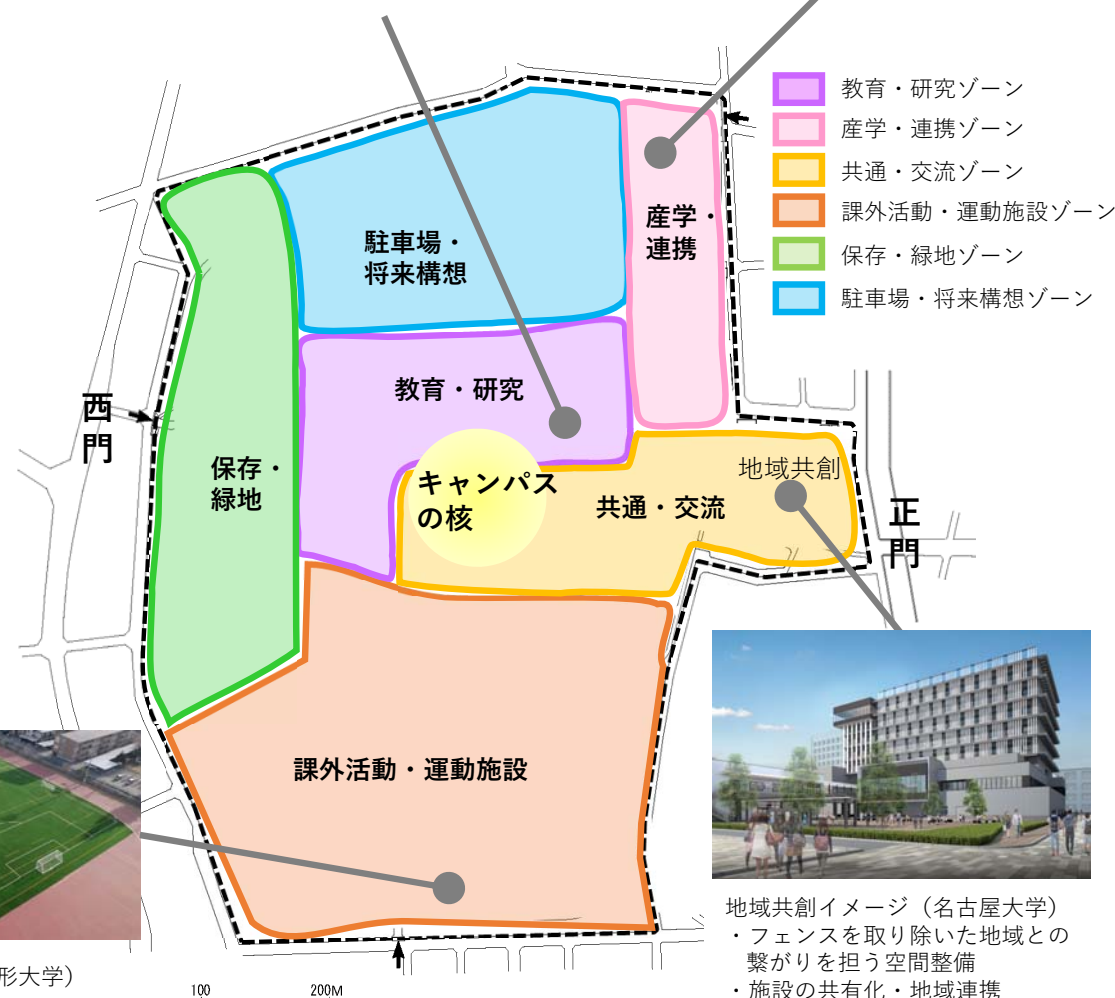
地域と共創拠点（山形大学）
・地域の活性化
・学外利用による外部資金の獲得



10号館 コミュニケーションモール



11号館
次世代モビリティ社会実装センター



地域共創イメージ（名古屋大学）
・フェンスを取り除いた地域との繋がりを担う空間整備
・施設の共有化・地域連携
・大学の活動の見える化 など

(4) 荒牧キャンパスのフレームワークプラン

◆ 動線・交通計画

正門から西門までをむすぶ主動線を恒久的な歩行者専用道路として位置づける。主動線を中心とした各施設等へのアプローチを可能とすることで、良好な教育研究活動を維持する。

南門から主動線をむすぶ副動線等により、多様な人材がキャンパスの各場所へ安全かつ効率よく辿り着けるようにする。

歩車動線が交錯し危険性の高い箇所（正門、西門）については、車動線の分離化のため、出入口の改善強化に向けたエリア別計画を検討する。

駐車場・駐輪場のニーズを満たすような集約化や適切なスペースの確保を行うとともに、ゲートの設置による無断駐車防止を進め、収益化した駐車料金は維持管理費に充てる。

キャンパスの入り口となる部分（各門）については、フェンス等の物理的な境界を取り払うなどアクセス性を向上させ、より地域に対してオープンなキャンパスを目指す。

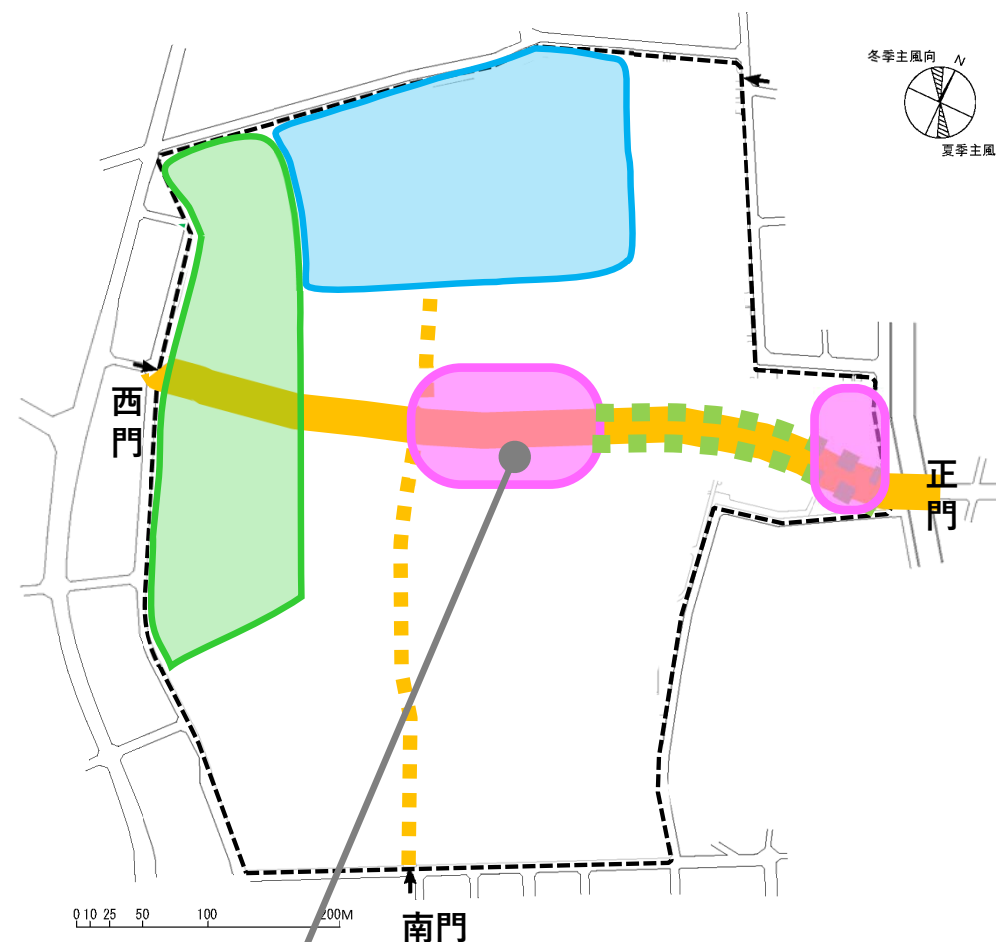
◆ 緑地・パブリックスペース計画

広大な敷地の緑豊かなキャンパスであることから、自然景観と教育研究環境の両立によるキャンパス環境の形成をする。

キャンパスの樹木は、保存していくべき樹木を保存・緑地ゾーンへの集約化や主動線の景観維持に向けた緑地の最適化を図る。
また、集約化にあたっては、自然の保存への配慮だけでなく、自然を活用した空間となるよう、遊歩道の整備や休憩スペースの確保整備の検討を図る。

キャンパスの中央や入口付近に、それぞれ広場やパブリックスペースを設け、学生・研究者・地域・産業など多様な人々の憩い・交流の場となるようなスペース整備を目指す。

特に、キャンパス中央モールにおいては、屋外での教育・研究活動も可能なスペースとして位置づけ、屋内外をつなぎ交流を促す空間として整備する。



広場・モールイメージ（東北大学）

- 駐車場・将来構想ゾーン
- 主要動線
- 副動線
- 広場・モール
- 保存・緑地ゾーン
- 保存樹木（並木）

(4) 荒牧キャンパスのフレームワークプラン

◆ キャンパスデザイン計画

建物の用途別に素材等の統一を進め、色彩については、既設建物で使用しているレンガ色を基本としながらも、周辺の緑豊かな周辺環境との調和等を考慮し、温かみのあるやわらかい印象となるようなキャンパス空間の整備を進める。

交流の場となりやすい低層部分においては、内部の雰囲気がわかるような透明性の高い素材の採用について検討する。

中央モール付近に位置づける建物については、屋内外が一体となった空間の整備について検討を行い、屋内のみならず屋外においても交流を生み出すような環境を確保する。

動線（歩道・車道）を踏まえた外灯の高さやデザインの統一を進める。



屋内外一体となった空間イメージ
(東京大学駒場コミュニケーション・プラザ)

◆ ユニバーサルデザイン計画

ユニバーサルデザインに基づいた設備やサイン整備を推進し、大学を訪れる多様な利用者が快適に過ごせる空間を作る。特に、様々なステークホルダーが利用する建物については、屋内の点字ブロックの整備やLGBTQ+に配慮したトイレ・更衣室などの設置・整備について検討を行う。

キャンパス構内情報の不足を解消するため、グローバル化にも対応をした屋外サインについて計画を進め、維持管理や経済性に配慮した構造、デザインとし、仕様（材質・形状等）を定める。

劣化している屋内外バリアフリーの維持管理を進めるとともに、利用者への情報をわかりやすく提供できるような仕組みを構築する。

(5) 昭和キャンパスのフレームワークプラン

◆ ゾーニング計画 ～30年後のビジョン～

30年後の昭和キャンパスは、主要な学部等エリアの建物が「改築」時期を迎えることから、キャンパス全体の建ぺい率を抑えつつ、駐車場の集約化を図り、キャンパス全体の建て詰まりを解消しつつ、病院施設と学部等施設がまとまりを持ったキャンパス空間として形成する。

キャンパスの中心に講義室や食堂、図書館などを集約し、各ゾーンからの利便性を図るようなゾーニングの検討を進める。

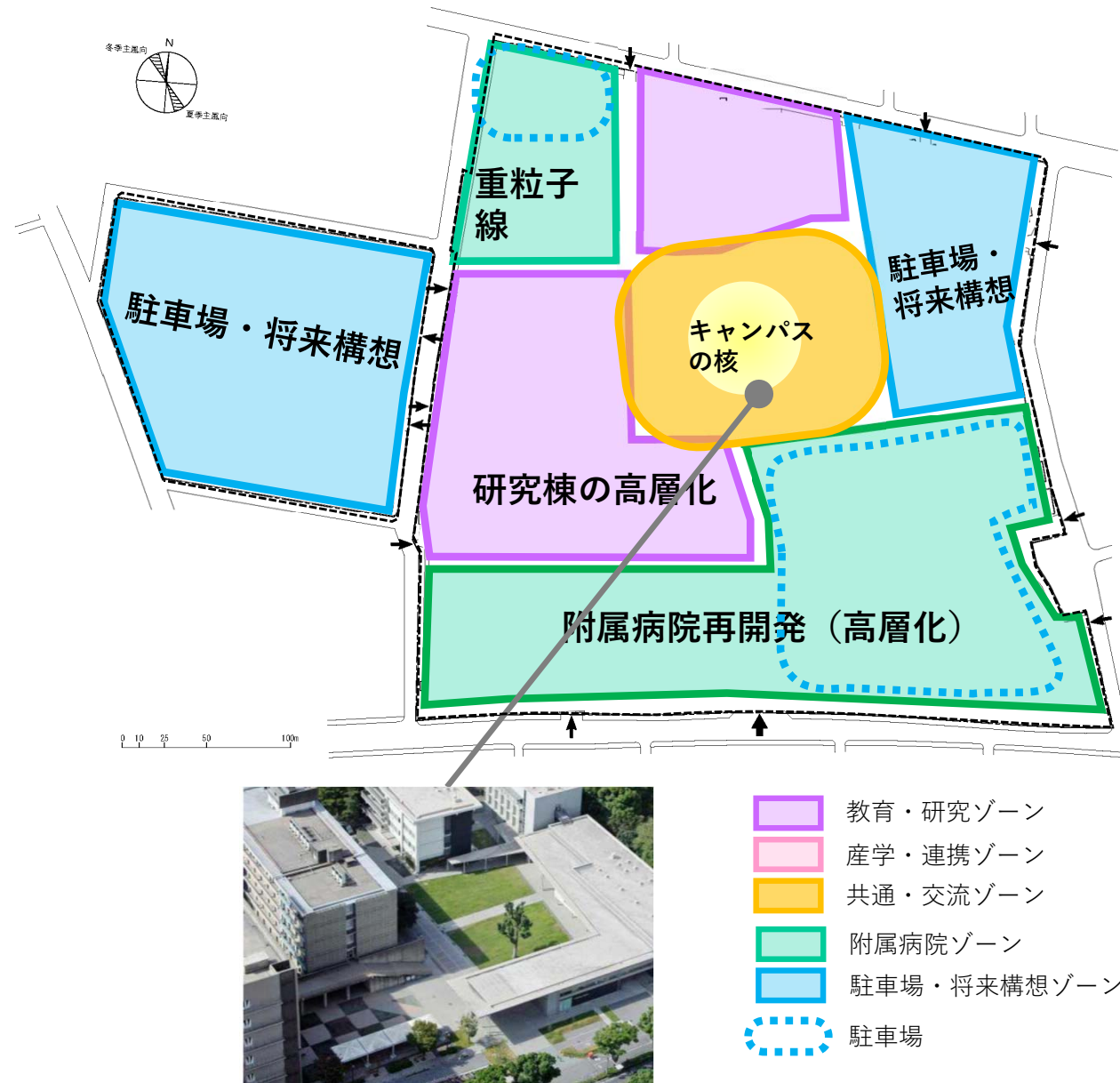
教育・研究ゾーンは集約・高層化し、各学部等が生命科学の分野で有機的に連携し、「核」となるスペースで共通・交流ゾーンの形成を目指す。

機能の陳腐化、老朽化により著しく診療機能が低下した附属病院を再生するため、再開発整備を計画する。

附属病院の整備に際し、キャンパス南面を附属病院ゾーンと位置付け、高層化・集約化・高機能化を目指す。

駐車場・将来構想ゾーンをキャンパスの西側及び北東側に設け、駐車場を集約化し、土地の有効活用を促進するとともに、構内車両交通量を抑制する場として活用する。

なお、課外活動施設は、荒牧キャンパスの施設と共用や周辺施設の利用なども検討する。



共通・交流ゾーン（キャンパスの核）
イメージ図（鹿児島大学）

(5) 昭和キャンパスのフレームワークプラン

◆ 動線・交通計画

病院正門からキャンパスの核となる中心部をつなぐ主要動線を恒久的な歩行者・車両道路として位置づける。主動線を中心とした各施設等へのアプローチを可能とすることで、良好な教育研究活動を維持する。

駐車場・将来構想ゾーンから主動線をむすぶ副動線等により、多様な人材がキャンパス内の各場所へ安全かつ効率よく辿り着けるよう計画する。

病院正門付近は恒久的な位置づけとし、外来者が安全かつ効率よく移動できるよう十分な広さの歩道動線、車両動線及び駐車場の確保を行う。

駐車場・駐輪場のニーズを満たすような集約化や適切なスペースの確保を行い、構内の車両動線は最小限に抑え、安全な歩行動線を確保する。

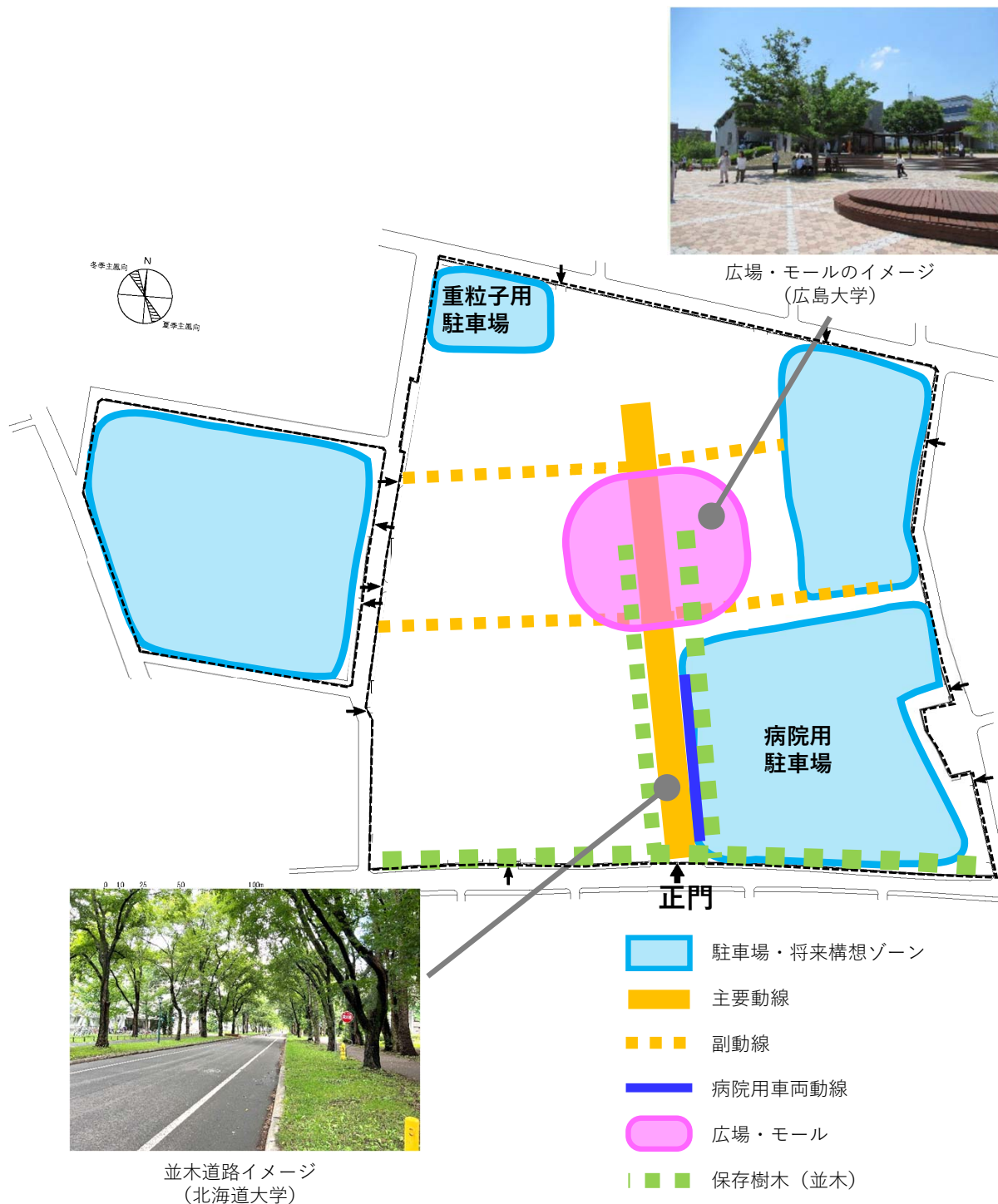
◆ 緑地・パブリックスペース

キャンパスの再整備の際は、中央部にパブリックスペースを設置し、教育・研究・診療の交流・融合の象徴となるようなスペース整備を目指す。

キャンパスの樹木は、保存していくべき樹木と、整理・トリアージする樹木を設定し、南側の敷地沿い及び主要動線上に整備し地域とをつなぐ通りとなるような景観の維持を進める。

キャンパス南面県道沿いの桜は、地域に親しまれた象徴的な景観となっていることから継承する樹木群として維持管理する。

病院正門からの主導線に並ぶイチョウは、キャンパスで学び育った先人たちの象徴的に認知された樹木となっていることから保存樹木として継承する。



(5) 昭和キャンパスのフレームワークプラン

◆ キャンパスデザイン計画

建物の用途別に素材等の統一を進め、色彩については、周辺環境との調和等を考慮したものとする。教職員のみならず、病院患者・外来者など様々なステークホルダーが集う場となるため、明るくやさしい印象となるようなキャンパス空間の整備を進める。

中央モール付近に位置づける建物については、屋内外が一体となった空間となるよう屋外デッキの設置なども検討する。

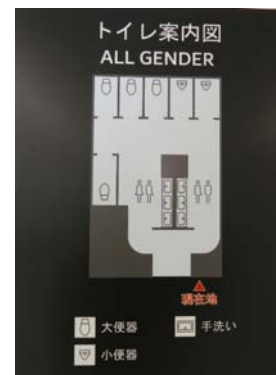
教育・研究施設は高層化を想定していることから、交流の場となりやすい低層部分においては、内部の雰囲気がわかるような透明性の高い素材の採用について検討する。

◆ ユニバーサルデザイン計画

キャンパス敷地上、高度利用化が必要な昭和キャンパスにおいては、全般的に建物高さは高層化を目指す。キャンパス外周部は周辺環境に配慮しつつ、キャンパス中心部等からの眺望を阻害しないような計画とする。

ユニバーサルデザインに基づいた設備やサイン整備を推進し、大学を訪れる多様な利用者が快適に過ごせる空間を作る。特に、屋外のバリアフリー化として歩道動線の幅の確保や段差の解消、点字ブロックの整備を進める。また、様々なステークホルダーが利用する建物については、ベビーチェアやLGBTQ+に配慮したオールジェンダートイレなどの設置・整備について検討を行う。

キャンパス内の案内標識の整備を進め、統一感があり、分かりやすく変化にも対応しやすいサインを適切な場所に設置する。



オールジェンダートイレ（荒牧キャンパス10号館）

(6) 桐生キャンパスのフレームワークプラン

◆ ゾーニング計画 ～30年後のビジョン～

30年後の桐生キャンパスは、主要な建物が「改築」時期を迎えることから、キャンパス全体の建ぺい率を抑えつつ、駐車場・保存緑地の集約化を図り、現在の建物の建て詰まりの解消と、文化財など周辺の景観との調和を図りながら、まとまりを持ったキャンパス空間として形成する。

教育・研究ゾーンは集約・高層化し、コミュニケーションモールや共同研究スペースなどを中心に、多分野間や地域との連携できるスペースの整備を進める。

また、教育・研究施設のうち、地域に開くエリアと高度な教育・研究エリアをゾーニングの中で意識した配置とし、核ゾーンとの繋がりを意識した整備を進める。

共通・交流ゾーンのうち、講義室等は教育・研究ゾーンとの連続性を持たせるため、「キャンパスの核」の周辺に位置づけ、様々な人が集まる施設群（図書館や大学会館等）をキャンパスの核を中心として集約させることで、教育・研究と地域との連携を有機的につなぐような交流・連携を図る。

産学・連携ゾーンは、既存の建物を活かしながら地域との協同研究など学内外との共創拠点として機能させる。

駐車場・将来構想ゾーンをキャンパスの東側に設け、駐車場の集約化や、土地の有効活用の推進を行う場として活用する。課外活動施設については、菱団地への集約化や市など外部施設の活用や、駐車場・将来構想ゾーン内における地域共創拠点の整備など、活動や効果を踏まえた、整備の方向性の検討を進める。



産学・連携ゾーン A・B・C棟



国登録有形文化財「工学部同窓記念会館」

- 教育・研究ゾーン
- 産学・連携ゾーン
- 共通・交流ゾーン
- 保存・緑地ゾーン
- 駐車場・将来構想ゾーン

(6) 桐生キャンパスのフレームワークプラン

◆ 動線・交通計画

正門からキャンパスの核となる中心部をつなぐ主要動線を恒久的な歩行者道路として位置づける。主要動線を中心とした各施設等へのアプローチを可能とすることで、良好な教育研究活動を維持する。

産学・連携ゾーンと教育・研究ゾーンをむすぶ歩行動線を副動線とし、連絡通路等の計画を進めることで、多様な人材がキャンパス内の各場所へ安全かつ効率よく辿り着けるようにする。

駐車場・駐輪場のニーズを満たすような集約化や適切なスペースの確保を行い、構内の車両動線は緊急時用として最小限に抑え、安全な歩行動線を確保する。

◆ 緑地・パブリックスペース

正門付近は、重要伝統的建造物群保存地区に位置していることから、しだれ桜や有形文化財を中心とし伝統の継承をするとともに、地域共創の場として整備を進める。

キャンパス中心部のメインストリートとなる広場・モールは、現在の中央モールを活かしつつ、屋外での教育・研究活動も可能なスペースとして位置づけ、屋外デッキの設置の検討など、屋内外をつなげるだけでなく、学生・研究者・地域・産業など多様な人々の憩い・交流の場となるようなスペース整備を目指す。

キャンパスの樹木は、保存していくべき樹木と、整理・トリアージする樹木を整理し、主要動線上や保存・緑地ゾーンに整備し、地域とをつなぐ空間となるよう整備をする。



地域共創拠点
広場・公園イメージ
(立命館大学)



連絡通路イメージ



広場・モールイメージ (東北大学)

(6) 桐生キャンパスのフレームワークプラン

◆ キャンパスデザイン計画

建物の用途別に素材等の統一を進め、色彩については、周辺環境との調和等を考慮したものとする。

正門付近は、桐生市景観計画などを踏まえた色彩とし、歴史的建造物である「工学部同窓記念会館」と調和した、キャンパス全体が統一感のある景観の形成を図る。

教育・研究施設は高層化を想定していることから、交流の場となりやすい低層部分においては、内部の雰囲気がわかるような透明性の高い素材の採用について検討する。

中央モール付近に位置づける建物については、屋内外が一体となった空間の整備について検討を行い、屋内のみならず屋外においても交流を生み出すような環境を確保する。



屋内外一体となった空間イメージ
(大阪大学)

◆ ユニバーサルデザイン計画

ユニバーサルデザインに基づいた設備やサイン整備を推進し、大学を訪れる多様な利用者が快適に過ごせる空間を作る。特に、様々なステークホルダーが利用する建物については、LGBTQ+に配慮したオールジェンダートイレなどの設置・整備について検討を行う。

キャンパス構内情報の不足を解消するため、グローバル化にも対応をした屋外サインについて計画を進め、統一感があり、分かりやすく変化にも対応しやすいサインを適切な場所に設置する。

屋外の点字ブロックの整備や劣化している屋内外バリアフリーの維持管理を進めるとともに、利用者への情報をわかりやすく提供できるような仕組みを構築する。

(7) その他キャンパスのフレームワークプラン

◆ 附属学校（若宮・上沖団地）のフレームワークプラン

若宮・上沖団地は、附属学校でありながら離れた場所にあるため、特に小・中学校間での連携がとりにくく、利便性の悪さが懸念されている。建物の老朽化については、インフラ長寿命化計画に基づく整備を進めるとともに、附属学校間での連携や利便性等の向上に向けた検討を進める。

◆ 太田キャンパスのフレームワークプラン

太田キャンパスは、今後も産学官連携による地場産業に直結した共同研究開発や人材育成を推進する施設として利用しつつ、学部垣根を超えた共同利用ができるよう検討する。

また、桐生キャンパス・フレームワークプランによる産学・連携機能強化を考慮し、桐生キャンパスでの活動が可能なように機能拡大等を検討する。

◆ 学生寮・国際交流会館・職員宿舎のフレームワークプラン

学生寮・国際交流会館・職員宿舎は、老朽化による維持管理費の増大や運営面での業務負担を考慮し、民間の創意工夫を活用したPFI事業（Private Finance Initiative）やPPP事業（Public Private Partnership）での運用や民間宿舎を借り上げ、統廃合等を十分検討し、大学負担の最小限化を図る。

5. アクションプラン

(1) アクションプランの基本的な考え方

キャンパスマスタープランの基本方針及び30年程度の将来を見据えた計画であるフレームワークプランを具現化するため、計画の柔軟性と段階的な整備を反映させた中期的な計画として、整備・活用方針に基づき本学が「第4期中期目標・中期計画期間」において実現を目指す主な施設整備の行動計画を立案する。

各個別の整備にあたっては、フレームワークプランの共通方針や各計画、整備・活用方針などを踏まえた整備を進めるものとする。

概算要求事業や自己資金等により事業を実施する際には、インフラ長寿命化計画のもと、安全や機能強化の観点から最優先とする事業を選定し、経営層を含む学内的な合意を得た上で、着実に実施する。

社会情勢により、アクションプランで例示していない建物を計画する必要がある出てくることが考えられるが、それぞれのプランで示す基本方針に十分に配慮し、将来的に十分活用ができる施設となるように検討を行う。

また、整備した施設等については、基本的に教育・研究活動や地域社会等にどのような効果を与えているか検証を行い、次期アクションプランにおける整備効果向上に繋げていく。

◆ 群馬大学インフラ長寿命化計画

本学が所有するインフラ（建築物等及び基幹設備等）を点検により劣化、損傷等、老朽化の状況を的確に把握、維持管理・更新等を着実に推進するための中期的な取組の方向性を示すために、平成29年3月にインフラ長寿命化計画（行動計画）を策定している。

本行動計画に基づき、個別施設ごとの具体的な改修方針および修繕計画を定める計画として、令和2年3月にインフラ長寿命化計画（個別施設計画）を策定した。

個別施設計画では、「メンテナンスサイクルの構築」「トータルコストの縮減・平準化」「インフラ長寿命化に向けた推進体制」の3つを柱とし、厳しい財政状況下においても、学生や教職員が安心して利用できる教育研究施設の保全を図ることを目的としており、本計画に基づいた戦略的な維持管理・更新を進めている。

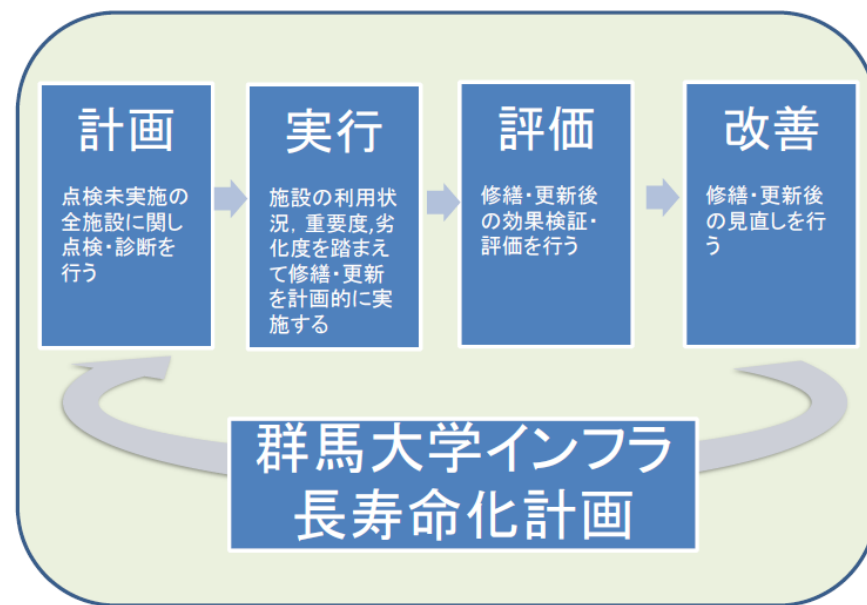


図5-1 メンテナンスサイクル図

(2) 施設整備計画

◆ 施設整備計画（全体共通事項）

共通的な事項については、全学共通的な方針や計画を優先的に進めることとし、各キャンパスごとの計画にあたっては具体的な実施を進めるものとする。

基本方針	整備方針	フレームワークプランを踏まえた 施設整備計画
1 教育・研究・医療の高度化、 多様化、グローバル化などに 対応し、イノベーションを生 み出す共創の場となるキャン パス	- 教育・研究・医療の高度化・多様化・グローバル化を推進し、キャンパス全体の「イノベーション・コモンズ化」により、イノベーションを継続的に生み出す環境づくりを行う。 - 時間や場所に制約されることなく教育・研究を実施することができるよう、DX,ICT環境、学習環境の整備を進める。 - 様々な用途に対応できるようフレキシブルな教育環境の整備を進め、教育・研究・医療の高度化・多様化に対応した施設整備を行う。 - 施設・土地等の研究資源のあり方を見直し、学際的・横断的な領域、産学官連携にも対応できる環境を整備する。 - 先端医療を推進する役割を果たすとともに、地域医療拠点としての機能を担う場として、附属病院を計画的に整備する。	（イノベーション・コモンズ化） - 各キャンパスでの活動等についての意見交換を行い、ソフト・ハードが一体となった各キャンパスの段階的なイノベーション・コモンズ化について具体的な検討を行う。 （機能強化・建物配置計画、ゾーニング計画） - デジタルトランスフォーメーション（DX）等を含めた学内だけでなく、他大学や海外との交流・学習環境の確保等を進め、あらゆる場で共創が生まれるような施設整備を進める。 - 人口減少などを考慮し約30年後の施設総量の適正化について検討を進め、具体的な建物配置計画を検討する。 - 学生等のニーズに応じた教育・研究環境の整備を進めるため、アンケートや意見交換の場を設け、稼働状況の低いスペースに対し、プロジェクト研究スペースや学習スペースへの転換等を図る。 - 各キャンパスの土地等の有効活用に向け、サウンディング型市場調査の実施などを行い、整備方針について検討する。

基本方針	整備方針	フレームワークプランを踏まえた施設整備計画
2 災害に強く、安全・安心で持続可能なサステナブルキャンパス	- 敷地を有効に活用するとともに施設の総量最適化を図り、「戦略的リノベーション」を中心とした老朽化改善整備により既存施設の長寿命化を図る。 - 施設整備を行うにあたり、予防保全などの性能維持改修をはじめとする老朽改善整備、多様な財源の活用を積極的に検討する。 - 良好な教育研究環境を維持・確保するため、施設マネジメント推進のための仕組みの構築、スペースの適切な配分による施設等の有効活用、および適切な維持管理、の3つの観点による戦略的な施設マネジメントの取組を推進する。 - キャンパス全体の環境負荷の低減を図るため、積極的な省エネ機器等の導入、キャンパスにおける消費エネルギーの抑制などエネルギーマネジメントを行うとともに、脱炭素社会実現に向けた取組を進めていく。 - 学生や教職員の安全・安心な教育研究環境を確保するため、防災・減災を考慮した施設やライフライン等の強靱化を推進する。	(機能強化・建物配置計画、ゾーニング計画) - インフラ長寿命化計画（個別施設）に基づき、予防保全を進める。 - 着実な予防保全の実施に向け、インフラ長寿命化の見直しを図るとともに、予算の拡充についての具体的な検討を進める。 - 既存施設のスペースを見直し、スペースマネジメントにより生まれたスペースを共同利用スペース等に転換する。 (防災・安全計画) - 屋外環境（照明、防犯カメラ等）の整備方針を策定する。 - 優先的事項として、将来性を踏まえたキャンパス内の外灯の配置・整備計画を策定、実施する。 (インフラストラクチャー計画) - インフラ長寿命化計画に、ライフラインの具体的な整備計画を反映する。 - 危機管理対応指針、危機管理対応マニュアル、BCP計画などに基づき、自然災害、大規模な損傷事故に対応するため、設備の冗長化を促進し、途切れのない診療や教育研究を支援するインフラの整備を目指す。 (エネルギーマネジメント) - 施設整備の際には、容量や台数なども含め、省エネ効果を検証した上で、より適切な機器への更新を図る。
3 ダイバーシティに対応した、自然豊かな環境で新たな交流が生まれるキャンパス	- 教育・研究・医療活動や地域・社会との共創において、多様な人材の能力を最大限発揮できるよう、ユニバーサルデザインに配慮した施設整備を行う。 - 地域に開かれた魅力的なキャンパスとなるような、全体などの景観に配慮し、地域との交流を促進するパブリックスペースの整備を推進する。 - 学生や教職員のみならず地域や産業界など様々な人々と、屋内・屋外を問わず、キャンパス全体で交流が生まれるような施設整備、空間の整備を行う。	(キャンパスデザイン計画) - 全学的なサイン計画と各キャンパスごとの建物色彩の計画を策定し、計画に基づいた整備を行うよう全学的な共通認識を図る。 (ユニバーサルデザイン計画) 「群馬大学施設のユニバーサルデザインガイドライン」を策定し、全学的な整備計画の方針を定める。 - バリアフリー化やオールジェンダーに配慮した、各キャンパスごとの施設整備計画を策定し、計画的な整備を実施する。 (緑地・パブリックスペース計画) 「群馬大学緑地管理方針」を策定し、点検、診断を適時実施し、各キャンパスの樹木の管理を進めるとともに、継承する樹木・伐採する樹木について明確化する。 - 緑地年次計画を策定し、計画的な緑地の維持保全を進めるとともに、集約化に向けてトリアージを進める。 - 学生交流の整備を進めるため、人が集まる広場・パブリックスペースとなるよう具体的な整備について検討を進める。

(2) 施設整備計画

◆ 施設整備計画（荒牧キャンパス）

施設整備計画	取組内容
機能強化・ 建物配置計画 ゾーニング計画	- 課外活動施設や運動施設などの老朽化、各施設での活動状況を踏まえ、昭和キャンパス・荒牧キャンパスの課外活動施設等の統合なども含めた整備検討を行う。 - 屋外の教育・研究活動スペースの集約化を図り、屋外環境の整備を進める。
動線・交通計画	- 情報学部を設置による学生数の増員等も踏まえ、現状の把握、課題の整理を行うとともに、必要な駐車場の整備を行う。 - ウッドデッキやインターロッキングなどに付着したカビやコケなどの対策を行い、学生等の安全性の確保を行う。
防災・安全計画	- 老朽化したライフラインの整備を着実に進める。 - 構内の外灯の整備を図り、主要動線及び駐車場への動線については十分な明るさの確保を行う。
ユニバーサル デザイン計画	- 案内板に多言語化に対応したQRコードを設け、多様化への対応を図る。 - LGBTQ+にも考慮した、全学共通の更衣室の確保・集約化等についての検討を進める。 - 車いす使用者用駐車施設や多機能トイレの場所など、必要な情報を利用者に分かりやすく伝える工夫を行う。
緑地・パブリック スペース計画	- 緑地規模の見直しを行い、保存・緑地ゾーンへ集約化を進めるための計画を策定する。 - 正門付近のスペースの活用について、交通計画なども鑑み、有効活用についての具体的検討を進める。

◆ 施設整備計画（昭和キャンパス）

施設整備計画	取組内容
機能強化・ 建物配置計画 ゾーニング計画	- 附属病院ゾーンは低層建物が平面的に広がり建て詰まり状態となっており、機能の陳腐化、老朽化により診療機能が低下した附属病院を再生するため、再開発整備を計画する。 - 病院再開発計画を踏まえ、キャンパス全体のゾーニングや配置等の計画の見直しを図る。
動線・交通計画	病院再開発計画に際し、駐車場を整理・集約し、構内の車両導線を最小限に抑制し、外来者が安全かつ効率よく移動できる駐車場及び歩行動線を確保する計画を検討する。
防災・安全計画	- 診療、教育研究に不可欠な電力、水、ガス等のライフラインを安定的に供給するため、ライフラインの整備を進める。 - 病院再開発計画を念頭とした、病院施設のインフラ長寿命化計画を策定し、計画的な整備を進める。 - キャンパスの環境負荷低減を目的として実施している管理一体型ESCO事業の実績を踏まえ、省エネ設備の導入、効率的な熱源運転等を促進し、更なる環境負荷の低減を目指す。
ユニバーサル デザイン計画	学部等の研究棟は、エレベーターや多機能トイレ等肢体不自由者への対応整備は概ね完了しているため、個々の障がいやLGBTQ+への対応など必要な整備を進める。
緑地・パブリック スペース計画	キャンパスの緑地は管理方針に基づき日常の点検、適時の診断をルーティーン化し、剪定、治療を計画的に実施するとともに、台風や突風などの自然災害により倒木の恐れのある樹木については、伐採し構内の安全を確保する。

(2) 施設整備計画

◆ 施設整備計画（桐生キャンパス）

施設整備計画	取組内容
機能強化・ 建物配置計画 ゾーニング計画	- プールについては、利用率が低く老朽化が著しいことから、設備故障した場合に廃止することが学部会議で決定済みであるため、今後の土地の利用なども含めた検討を進める。 - 情報学部との統合等により発生した空きスペースや、500㎡未満の老朽化した建物について、集約化やトリアージ、スペースの利用計画などの検討を進める。
動線・交通計画	- 情報学部との統合による桐生キャンパスの学生数の減少を踏まえた、駐車場の適正化を進める。 - 構内のインターロッキングに沈みが生じていることから、駐車場の適正化にあわせ、歩車動線の分離に向けた具体的な検討を進める。
防災・安全計画	老朽化したライフラインの整備を着実に進める。
ユニバーサル デザイン計画	- 学部等の研究棟はエレベーターや多機能トイレ等、肢体不自由者への対応整備は概ね完了しているため、個々の障がいやLGBTQ+への対応など必要な整備を進める。 - 案内板に多言語化に対応したQRコードを設け、多様化への対応を図る。
緑地・パブリック スペース計画	正門付近のしだれ桜の寿命が近づいていることから、しだれ桜や樹木の植樹等も含めた正門周辺の再整備について具体的な検討を行う。

◆ 施設整備計画（その他キャンパス）

	施設整備計画
若宮団地 (小学校) (特別支援学校) (幼稚園)	- キャンパス付近の日吉団地（農園）の、有効活用について検討を進める。 - 更衣室など、ダイバーシティへの対応やユニバーサルデザインについての検討を進める。 - バリアフリー化が対応できていない校舎や体育館についての整備検討を進める。
上沖団地 (中学校)	- 老朽化したライフラインの整備を着実に進める。 - 課外活動施設など老朽化した建物整備についての検討を進める。 - 更衣室やトイレなど、ダイバーシティへの対応やユニバーサルデザインについての検討を進める。
学生寮 国際交流会館 職員宿舎	特に老朽化が進んでいる養心寮（学生寮）や職員宿舎については、学生等のニーズや周辺の民間宿舎状況等の把握をした上で、サウンディング調査を行い、統廃合なども含めた今後の運用に関する具体的な検討を行う。
研修所	北軽井沢研修所については、令和3年3月に利用者の受け入れ終了を行っている状況も踏まえ、今後の運用についての検討を行う。

6. 施設マネジメント

(1) 施設マネジメントの基本的な考え方

施設（建物・屋外環境・緑地等）は大学の経営資源であり、共有の財産であることから、利用者の既得権を前提とせず、トップマネジメントのもと大学構成員全員で有効に活用していくものである。

施設マネジメントは、大学の理念やアカデミックプランの実現を目的とし、施設について戦略的な運営を行い、教育研究や財務の戦略と整合性を図りながら、最小限の投資により最大の効果をあげる取組であり、中期的な行動計画を策定するPDCAサイクルを確立するとともに、毎年の取組についてもPDCAサイクルによる検証・評価を行い、取組を継続的に改善していくことが必要である。

施設のクオリティ、スペース、コストの三つの視点の総合的なバランスを図りながら、施設の整備・修繕、既存施設の有効活用、省エネルギー対策などの具体的な施設マネジメントを推進する。

クオリティマネジメント (施設の質の管理)

良好な施設研究環境の確保
安心・安全な環境の確保

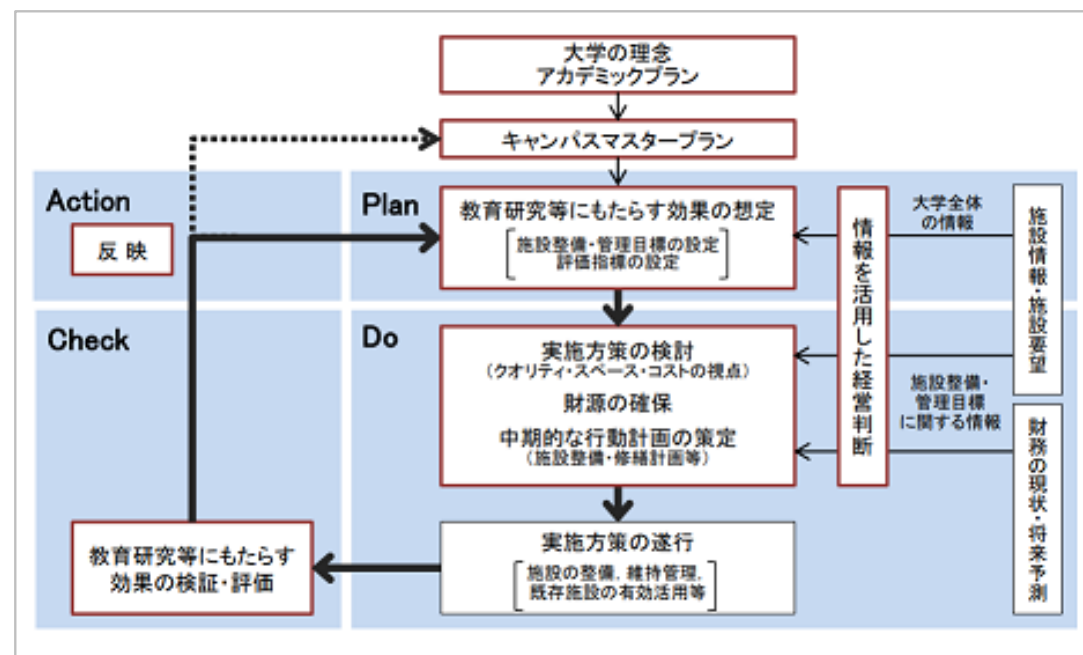
スペースマネジメント (施設の運用管理)

教育研究に必要な場所の確保
全学的な管理による屋内外の
スペース・敷地の有効活用の
促進

コストマネジメント (施設に係るコスト管理)

維持管理コストの適正化・費用対効果の向上
効率的な施設計画の策定
省エネルギー対策の実施

図6-1 施設マネジメントの概念



令和27年3月国立大学等施設の総合的なマネジメントに関する検討会
「大学経営に求められる施設戦略～施設マネジメントが教育研究基盤を強化する～」より引用

図6-2 持続的な施設マネジメントサイクル

(1) 施設マネジメントの基本的な考え方

◆ クオリティマネジメント

高度化・多様化する教育研究に対応する機能性、防災・事故防止などの安全性、施設利用者の快適性・利便性を確保し、魅力あるキャンパスづくりを進める。また、施設の長寿命化や省エネルギー・省資源に配慮した施設水準の向上を図る。

特に、施設利用者が快適に安心して施設を利用するためには、**保有する施設を健全に維持していくことが極めて重要**であることから、インフラ長寿命化計画に基づくメンテナンスサイクルを着実に進めていく。

◆ スペースマネジメント

教育研究活動に必要なスペースを確保するためには、既存のスペースの状況や需要を把握した上で、陳腐化したスペースを集約し、全学的見地から機動的にスペースを再配分する。

教育研究活動の新たな展開等により生じる施設需要に対応する必要がある場合においても、**まずは既存施設の活用を十分に検討する。**

また、**施設の新築や増築は、その後の施設管理に係るコスト**（定期的な改修費や毎年の維持管理費、光熱水費等）の増大につながることを認識し、**保有施設の総量の最適化を図る。**

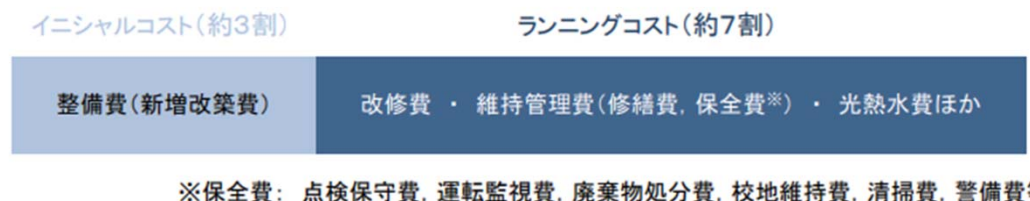
◆ コストマネジメント

整備のための**初期の建設コストの他に、毎年の維持管理費、光熱水費、定期的な改修費等が将来にわたり継続的に必要**であり、特に施設の**新增改築を計画する際には、これら必要な財源の確保及び負担等についての十分な検討**が必要である。

ランニングコストを抑えるためにも、インフラ長寿命化計画の実施や省エネルギー対策を推進し、施設規模・機能の適正化を図るとともに施設にかかるコスト削減に向け、ソフト・ハードが一体となり取組を進めていく。

維持保全に要する費用については、必要な財源を安定的に確保する必要があり、建物の大規模改修やライフライン再生などの多額の費用がかかる整備については、国の施設整備費補助金を求めていくものの、運営費交付金等の学内予算についても、一定の計画的な配分の下に必要な財源に充てる。

また、スペースチャージ等の施設利用に関するより一層の取組や多様な財源（PPPやPFI事業、国等の補助制度、企業等との連携による整備）の活用等について検討する。



※保全費：点検保守費、運転監視費、廃棄物処分費、校地維持費、清掃費、警備費等

令和27年3月国立大学等施設の総合的なマネジメントに関する検討会
「大学経営に求められる施設戦略～施設マネジメントが教育研究基盤を強化する～」より引用

図6-3 施設のライフサイクルコスト

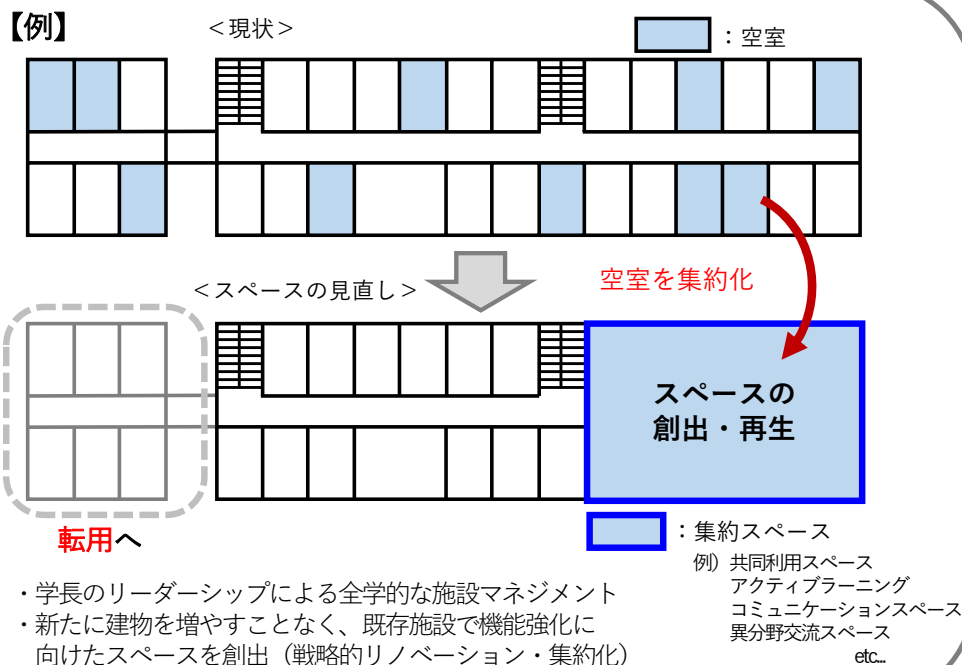
(2) スペースマネジメントに関する取組

施設の利用状況を踏まえ、配置の適正化を図りながら、**同種の用途や同様の機能を有するスペースを集約し、利用効率の向上を図る**。学部等の占有意識・既得権益利用等に関する意識改革を進め、学部の枠を超えたスペースの有効活用を行うため、**共同利用スペースを確保し、全学的な利用や共同利用等へと転換する**。

施設利用状況の一元管理による施設保有量の適正化を図り、弾力的・流動的なスペースの確保を行い、アカデミックプランの実現に向けて戦略的・重点的に進めている教育研究等の取組に対し、トップマネジメントにより速やかに配分する。

また、施設の質（クオリティ）を確保するため、令和2年度より開始した**スペースチャージ制度**をより発展させ、**スペースマネジメントとコストマネジメントが一体となった施設マネジメントを進める**。

スペースの集約化のイメージ



社会情勢の変革に対応した機能強化

教育の質の向上

新たな教育課題に対応(アクティブラーニング、CT環境等の学修環境)し、Society5.0に資する人材を育成

イノベーションの創出

産学連携や異分野間での共同研究等に対応できるフレキシブルなオープンラボや交流拠点の整備

安全性確保（ライフライン再生）

大学の教育・研究を支える基幹的な設備（特高受変電、電力、給排水、ガス等）を再生し安心安全な環境を確保

資産の有効活用

施設性能や財政状況も踏まえた保有量の最適化や集約化によるスペースの効果的・効率的な活用

今後の検討課題

- ・ スペース申請手続き・余剰スペース抛出時のルール of 明確化
- ・ スペースの抛出・トリージを行った学部等へのインセンティブの付与
- ・ スペースの適正化に向けた基準面積の設定
- ・ スペースチャージ制度の発展
- ・ どのようなスペースをどれだけ確保するかの目標設定
- ・ スペース転用にかかる模様替費用の負担 など

群馬大学第4期中期目標・中期計画（案）（令和4～9年度）

全学的なコアファシリティに関する統括体制を整備、施設及び研究設備について共同利用の促進（中期計画）
共同利用スペースを、約30,000㎡に拡充する

(3) サステナブルキャンパスに向けた取組

大学キャンパスは、数百から数千人もの学生や教職員が集う、教育・研究等の様々な活動の場であるため、それに伴う膨大なエネルギー消費があり、その結果生じる大きな環境負荷に対して自力で対処する責務がある。

本学では地球環境との調和と共生を図り、環境負荷の低減に努めるために「群馬大学環境方針」を策定し、その理念の基で、教育研究活動を通じて環境に配慮した人材の育成や環境に優しいキャンパスの形成を目指している。

地球温暖化対策の推進と施設運営の適正化等の観点から、地球環境との調和と共生を図り、温室効果ガス等、環境への負荷低減と業務運営コストの削減のため、以下のような観点から環境配慮型の施設・設備の整備を推進する。そのためにはCO2削減方針やマネジメント方針など学内で共有する必要がある。

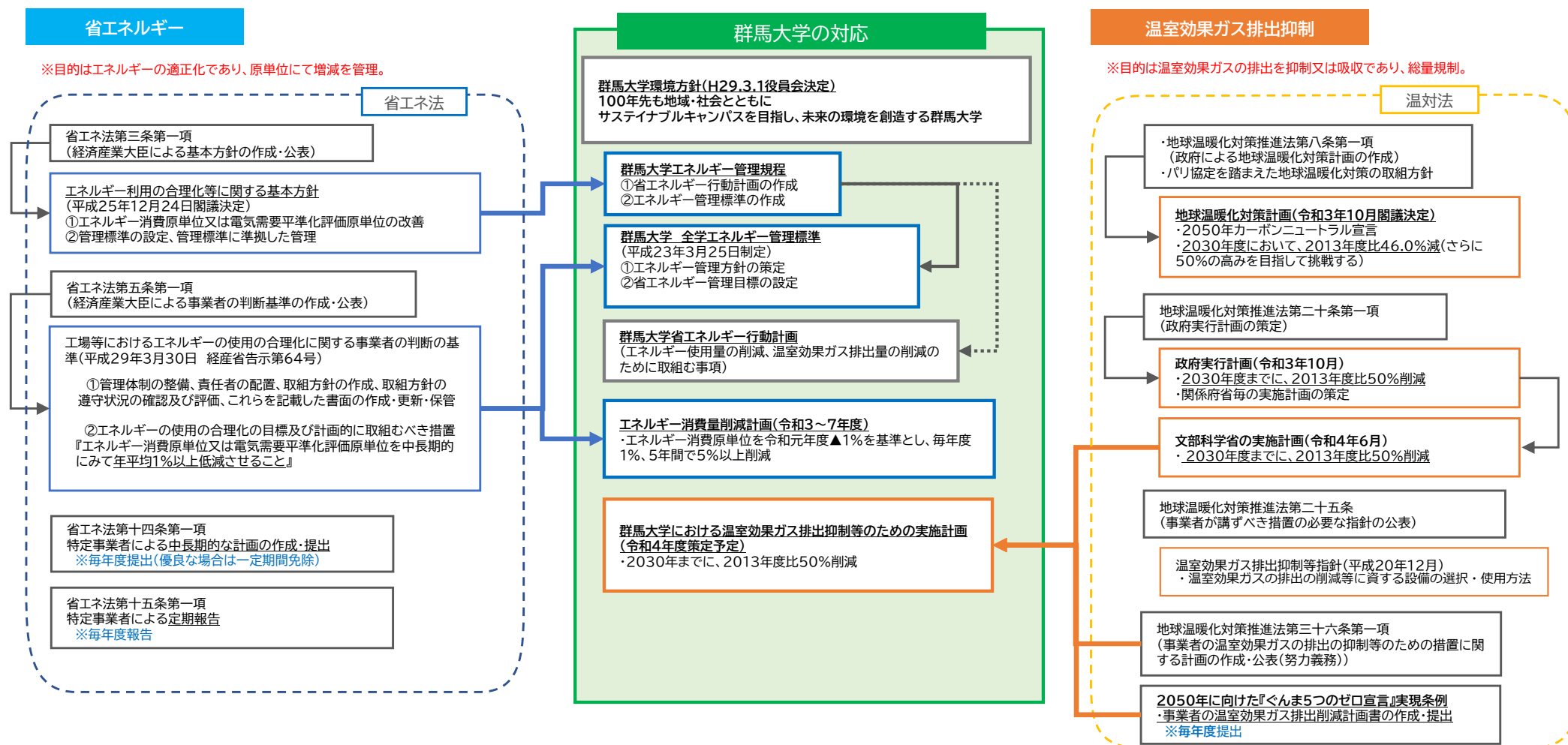


図6-4 群馬大学における省エネルギー及び温室効果ガス排出抑制に関する対応状況

(3) サステナブルキャンパスに向けた取組

◆ カーボンニュートラルに向けた全学の方向性

政府が掲げる2050年カーボンニュートラルを目指すためには、大学全体でゼロカーボン・キャンパスに向けたロードマップの作成やこれまで以上の省エネ等への取組が必要となる。

本学でも、政府実行計画でも示されている「**2030年までに温室効果ガスを2013年度比50%削減**」を目指し、全学的にカーボンニュートラルに向けた取組を進めるものとする。

■ 施設の省エネ化

- ・ 利用頻度の低い施設や集約化が可能な施設について、集約化・トリアージを進め、施設の総量を減らすことで建物に係るエネルギーの削減を図る。
- ・ 建物の断熱性能の強化（複層ガラス、外壁断熱、屋上断熱等）や高効率機器の導入（照明、空調設備等）を図る。
- ・ 新增改築・改修の際には、自然エネルギーの利活用を進め、国が提唱しているZEBの概念・技術等を取り入れたZEB ready※1を目指す。
- ・ 環境に優しい部材の導入やCO2排出係数の少ない材料の活用による、施設の低炭素化を進める。

■ 実験機器等の省エネ化

- ・ 分散化している実験機器や機器室・低温室等の共用・集約化により、維持管理コストやエネルギー使用量の削減を進める。
- ・ 高効率機器や省エネ機器への更新によるエネルギーの削減を図る。

■ 運用における省エネ

- ・ 各種エネルギーの見える化の促進、こまめな省エネ活動の推進を図る。

■ 再生可能エネルギーへの転換

- ・ 環境に優しい電力の導入、CO2排出係数の少ないエネルギーへの転換、太陽光発電等の再生可能エネルギーの導入等により、エネルギーの低炭素化を進める。

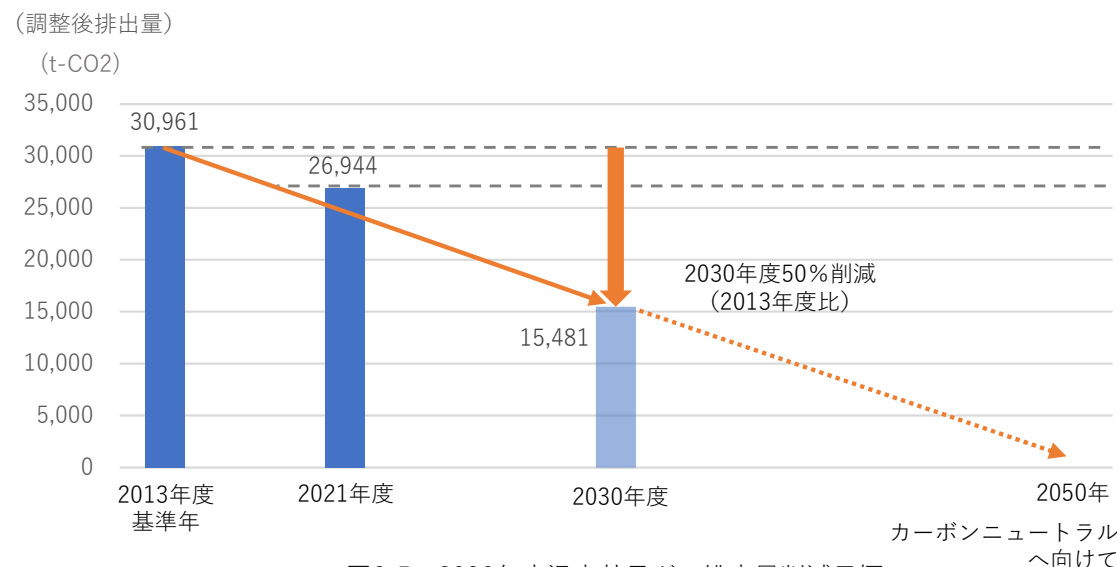


図6-5 2030年度温室効果ガス排出量削減目標

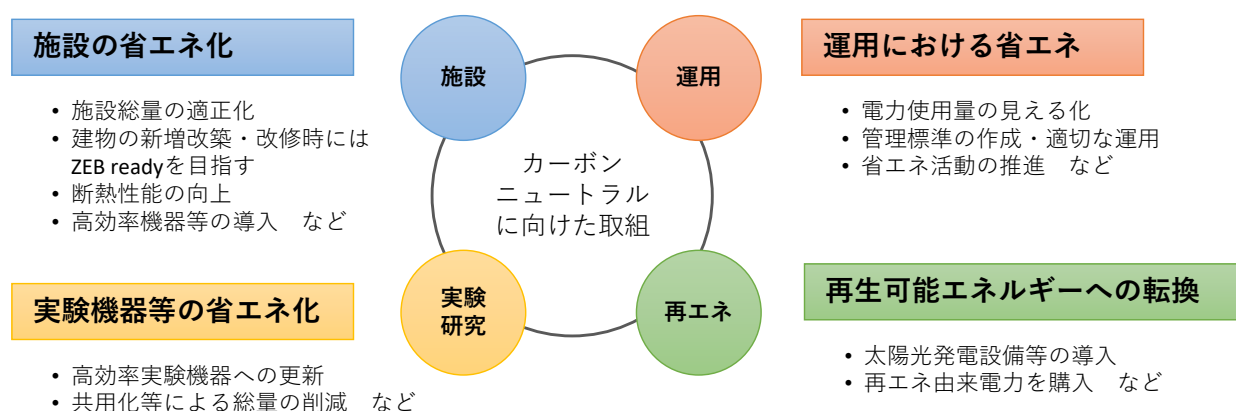


図6-6 カーボンニュートラルに向けた取組

※1 ZEB ready：従来の建物で必要なエネルギー消費量（電気・ガス）を省エネ改修により50%削減した建物

7. 参考資料

◆ キャンパスマスタープラン2023検討経緯

令和4年	
7月1日	施設・環境推進室（体制の見直し,CMP2023策定スケジュール）
9月5日	施設・環境推進室（CMP2023編集方針について）
9月15日	キャンパスマスタープラン策定会議（CMP2023編集方針について）
10月24日	施設マネジメント部会（中間報告・意見交換）
10月28日	施設・環境推進室（中間報告・意見交換）
11月2～15日	学部長等との意見交換（中間報告・意見交換）
12月2日	施設マネジメント部会（素案協議）
12月8日	施設・環境推進室（素案協議）
12月15日	キャンパスマスタープラン策定会議（素案協議）
令和5年	
2月9日	施設・環境推進室（原案協議）
2月16日	キャンパスマスタープラン策定会議（原案協議）
3月2日	役員会（原案審議）
3月16日	教育研究評議会（報告）
3月29日	経営協議会（報告）

他大学の参考写真は、主に令和4年10月国立大学法人等の施設整備の推進に関する調査研究協力者会議「「イノベーション・コモンズ（共創拠点）」の実現に向けて」より引用しています。

◆ キャンパスマスタープラン策定に関する委員会等

■ キャンパスマスタープラン策定会議	
○学長	石崎 泰樹
理事（教育・評価担当）	林 邦彦
理事（研究・企画担当）	花屋 実
理事（総務・財務担当）、事務局長	小坂 慎治
理事（病院担当）	齋藤 繁
理事（学長特命（男女共同参画・ダイバーシティ））	五十嵐優子
理事（学長特命（産学連携））	近藤 潤
共同教育学部長	藤森 健太郎
情報学部長・社会情報学部長	高山 利弘
医学系研究科長・医学部長	小湊 慶彦
保健学研究科長	横山 知行
理工学府長・理工学部長	石間 経章
生体調節研究所長	佐藤 健
総合情報メディアセンター長	西村 淑子
国際センター長	田中 麻里
■ 施設・環境推進室	
○理事（総務・財務担当）、事務局長	小坂 慎治
共同教育学部教授	中雄 勇人
情報学部教授	奥 寛雅
医学部医学系研究科教授	南嶋 洋司
医学部保健学研究科教授	興石 一郎
理工学府教授	半谷 禎彦
生体調節研究所教授	佐藤 美由紀
理工学府教授	渡辺 秀司
医学部附属病院准教授	半田 寛
施設運営部長	西 博文